

平成26年度

日南町・鳥取大学

連携の歩み

The Heisei 26 fiscal year

日南町・鳥取大学 連携のあゆみ

Tottori University + Nichinan-cho
Development of cooperation



日南町役場
<http://www.town.nichinan.tottori.jp>
鳥取大学
<http://www.tottori-u.ac.jp>

平成27年3月

鳥取大学



【目次】

鳥取大学長あいさつ	1
日南町長あいさつ	2
鳥取大学・日南町連携事業ワーキンググループ座長あいさつ	3
平成26年度までの主な経緯	
平成26年度までの主な経緯	4
鳥取大学・日南町地域活性化教育研究センターに関する協定書	6
連携事業ワーキンググループ会議	
平成26年第1回鳥取大学・日南町ワーキンググループ会議	10
平成26年第2回鳥取大学・日南町ワーキンググループ会議	18
平成26年第3回鳥取大学・日南町ワーキンググループ会議	23
平成26年度連携事業	
平成26年度鳥取大学一日南町連携事業実績報告概要版	28
教育・文化	
「にちなんふる里まつり」に連携する出前科学実験教室2014（大学開放事業）	36
医学部准教授 中本幸子	
鳥取大学・日南町連携講座「にちなん町民大学」	41
日南町教育委員会	
日南小・中学校「サマー・ウィンタースクール」	44
日南町教育委員会	
医療・福祉	
住民の生きがいづくりのためのエコミュージアムワークショップの開発（地域貢献支援事業）	47
地域学部教授 福田恵子、准教授 関 耕二、准教授 筒井一伸	
中山間地における大腸がん検診の課題（地域貢献支援事業）	54
医学部特任助教 渡邊ありさ	
発達障害児の包括的支援ネットワークの構築（地域貢献支援事業）	59
医学部教授 前垣義弘	
シミュレーションを用いた認知症教育プログラム（地（知）の拠点整備事業）	64
医学部教授 山本美輪	
生活・環境	
豊かな環境を守るための不在村地主問題への対策（地域貢献支援事業）	67
農学部助教 片野洋平	
日野川源流域における水質・生態系調査（地域貢献支援事業）	68
地域学部准教授 寶來佐和子	
産業	
日南町森林活用プロジェクト会議～森林を活用した山村地域振興～（地（知）の拠点整備事業）	70
地域学部教授 永松 大、農学部教授 日置佳之、准教授 藤本高明、助教 片野洋平	
観光	
地域資源を活かしたエコツーリズム振興のための人材育成（地域貢献支援事業）	74
農学部教授 日置佳之	
その他	
日南町オーダーメイド型インターンシップ（地（知）の拠点整備事業）	76
工学研究科教授 谷本圭志、日南町企画課	
鳥取大学協定四町（日南町、南部町、大山町、琴浦町）連携事業	80
日南町、南部町、大山町、琴浦町	
連携事業報告会	
連携事業報告会	83
日南町企画課	

鳥取大学長あいさつ

日南町と鳥取大学は、平成 18 年に「鳥取大学・日南町地域活性化教育研究センター」設置に関する協定を締結以来、9 年が経過いたしました。連携自治体の中でもいち早く「連携事業ワーキンググループ会議」を組織し、行政と大学の連携だけではなく学生や地域、関係団体の皆さまとのつながりに発展し、広がってきました。



鳥取大学長
豊島 良太

連携協定を締結以降、オオサンショウウオの研究やヒメボタルの生態調査をはじめ、森林資源の活用、名水調査などによる地域の名物、名産や誇りの発掘、活用のほか、住民の皆さんの生きがいをづくりや健康増進などを目指した様々な連携事業を行なってまいりました。鳥取大学は教育と研究の理念に「知と実践の融合」を掲げ、日南町の広大で豊かなフィールドのなかで教育と研究、両面からのアプローチを有機的に絡め合わせて、増原町長が町政のスローガンに掲げておられる「創造的過疎」の実現に向けて、人口減少・少子高齢化に適応した地域づくりと空洞化しつつある地域の活性化を目標にした地域再生の「しくみ」づくりをともに考えてまいります。

平成 27 年度には、日南町と鳥取大学の記念すべき連携協定 10 周年を迎えます。これからも社会の変化に適切に対応しつつ時代のニーズに応じた連携事業を展開し、日南町と鳥取大学がともに発展していくことを願っています。最後になりましたが、教員や学生の活動を真心込めて支えていただいた地域の皆さまや関係団体等、多くの方々に心からお礼申し上げます。

平成 27 年 3 月



日南町長あいさつ

平成27年は『地方創生元年』という言葉が飛び交い、地方自治体が知恵と創意工夫を競い合い、生き残りをかけた節目の年となると考えております。56年前に誕生した「日南町」としてのこれまでの歩みを振り返り、次の10年、20年を見据えた新たなステージを創造していく年と捉え、日南町の持つ限りない可能性を大きく育てながら、町内外の皆様に「日南町に住み続けてよかった、そして、住んでみたい」と感じていただけるスタートの年にしていく決意です。



日南町長
増原 聡

平成18年3月の連携協定締結以来、鳥取大学と日南町との連携も9年目を迎えました。本町と鳥取大学との関わりは年々深まっており、連携事業に積極的に取り組んでいただきましたことにより、その成果は産業・観光振興をはじめ生活環境の整備、教育・文化、医療・福祉など様々な分野に波及しています。

平成27年度は、鳥取大学と本町の連携協定10周年を迎えると同時に、ともに歩んだ「まち（むら）づくり協議会」設立10周年を迎える記念すべき年でもあります。引き続き本町の持つ自然豊かなフィールドを研究資源としてご提供し、地域の実情を学生教育に活かすことで将来を見据えた人材育成に寄与するとともに、鳥取大学の持つ高度で専門的な知見を活用させていただき、地方創生に向けた連携事業に取り組んで参りたいと考えております。

終わりに、各種の連携事業にご支援、ご協力いただきました鳥取大学の皆さまに心から御礼申し上げます。

平成27年3月



連携事業でできたこと、まだまだなこと

今年で9年目になる、日南町・鳥取大学連携事業は大きく二つの系統に分けることができると思います。

1つ目は「潜在的資源の発掘」です。昭和30年代までの日南町は木炭の一大生産地でした。雑木が炭になり、その炭がどんどん売れた時代でした。時代は変わって、今は杉や檜の材を素材や加工品が町から出荷されていますが、やはり町内にある資源を利用して稼いでいることに変わりありません。最近では、福万来のヒメボタルが観光資源として注目されたり、「まめな水」のペットボトルが試販されたりもしています。これらも細々かも知れませんが何らかの実入りにつながる可能性のあるものです。「山村には何も無い」という認識は大きな間違いです。確かに都会にあるような大きな商業施設や工場などはありませんが、かわりに豊かな自然環境があります。町のみなさんも「おらが町の隠れていた資源」に気がついて、それに積極的な価値づけをしてこられました。例えば、大宮小学校のたたら製鉄、多里小学校のオオサンショウウオや若松鉦山の展示は、町民の方々の研究にもとづいた素晴らしい博物館になっています。必ずしも大学がそのすべてに関わってきたわけではありません。ですが、研究者や学生などのよそ者が来て「日南町は素晴らしい」といろいろな機会に言ったことが、町民のみなさんへの刺激になったのであれば、それも連携事業の効果だったと思えるのです。

2つ目は「困りごと相談」です。困りごとは主に人口減少や少子・高齢化に起因するもので、医療・福祉、教育、交通、耕作放棄地・空き家などの分野に関するものが多かったと思います。行政学者の佐々木信夫氏によると、地方自治体の職員規模が1,500名程度になると一定の専門家集団を形成して、難度の高い行政課題への対応も可能になるとのことです。日南町の職員数は100名に満たないので、その目安を大きく下回っています。いかに1人1人の職員が優秀な日南町であっても次々に浮上する、それとかなり専門性を要する行政課題に対処することは困難だと思います。政策立案や実行を補完するためにコンサルタントに業務を発注すると、今度は多大な予算が必要な上に、一過性の解決策提示に終わってしまうことも少なくありません。その点、大学は割と近くにある、結構安上がりで、長期のお付き合いができるシンクタンクのようなものですから、これからも大いに活用していただきたいものです。

いままで十分にできていないことは、モノの商品化や課題解決策の政策化です。そこまで大学が関わらなくてもよいのかも知れませんが、やはり目に見える「カタチ」や「仕組み」としての成果にまでもっていかたいと考えています。これが今後の一番の課題です。

これからも連携事業ワーキングは頑張りますので、どうか今後ともよろしくお願い致します。



日南町・鳥取大学連携
事業ワーキング座長
日置 佳之
(農学部教授)

平成26年度までの主な経緯

【平成 26 年度までの主な経緯】

【平成 16 年度】

- (1) H17. 2. 8 矢田日南町長、内田課長 鳥大訪問
- (2) 3. 23-24 岩崎理事外日南町訪問（情報交換会、にちなん環境林視察）

【平成 17 年度】

- (3) H17. 4. 21 本名農学部長、日置教授外日南町訪問、視察（県庁林政課同行）
- (4) H18. 2. 21 矢田日南町長、内田課長来学 学長、岩崎理事、林監事外訪問
- (5) 2. 28-3. 1 岩崎理事、林監事外 日南町訪問（意見交換会、町内小学校等視察、協定の調印式）

【平成 18 年度】

- (6) H18. 4. 20 第 1 回ワーキンググループ会議 ～H19. 3. 24 第 4 回WG会議
- (7) 7. 7 地域活性化教育研究センター開所式及び記念講演会（能勢学長講演）
- (8) H19. 3. 25 鳥取大学・日南町連携事業成果報告会（日南町役場交流ホールにて）

【平成 19 年度】

- (9) H19. 4. 1 鳥取大学社会貢献推進課における日南町職員の派遣研修（手嶋主事）
- (10) 4. 16 30 年後プロジェクト有識者会議
- (11) 4. 20 第 1 回WG会議 ～H20. 3. 2 第 3 回WG会議
- (12) H20. 3. 2 連携事業成果報告会（日南町生涯学習まちづくりフォーラム共催）

【平成 20 年度】

- (13) H20. 4. 1 鳥取大学社会貢献室における日南町職員の派遣研修（高橋主任）
- (14) 4. 19 30 年後プロジェクト有識者会議
- (15) 5. 8 第 1 回WG会議 ～H21. 2. 15 第 3 回WG会議
- (16) H21. 2. 15 連携事業成果報告会（日南町生涯学習まちづくりフォーラム共催）

【平成 21 年度】

- (17) H21. 4. 1 鳥取大学社会貢献室における日南町職員の派遣研修（荒金主事）
- (18) 6. 9 第 1 回WG会議 ～H22. 3. 12 第 3 回WG会議
- (19) 9. 9-11 明治大学「M-Navi プログラム」による日南町訪問
- (20) 9. 16 「日野郡フィールド実践による地域づくりセミナー」過疎プロジェクト報告会開催
- (21) H22. 1. 22 「大学連携によるまちづくり」能勢学長講演会／連携事業報告会
- (22) 2. 18-19 明治大学菊地ゼミによる日南町訪問・意見交換

【平成 22 年度】

- (23) H22. 4. 1 鳥取大学社会貢献室における日南町職員の派遣研修（荒金主事（2 年目））
- (24) 4. 19 第 1 回WG会議 ～H23. 3. 12 第 3 回WG会議
- (25) 9. 9 日南町議会による鳥大視察、研修会
- (26) 11. 24 日南町議会・教育委員会合同研修会
- (27) H23. 2. 1 明大・鳥大合同セミナー「日南町地域活性化への提言」
- (28) 3. 12 「地球温暖化と日南町の挑戦」中村名誉教授講演、連携事業報告会

【平成 23 年度】

- (29) H23. 4. 1 鳥取大学社会貢献課における日南町職員の派遣研修（石倉主事）
- (30) 5. 6 鳥取大学連携講座「にちなん町民大学」～12. 2 計 10 回開催
- (31) 6. 15 第 1 回WG会議 ～H24. 3. 3 第 3 回WG会議
- (32) 10. 24 日南町議会による鳥大視察、研修会
- (33) 11. 20-22 明治大学菊地准教授ゼミ生による日南町訪問・意見交換
- (34) H24. 3. 3 連携事業成果報告会（同日、日南町環境フォーラム開催）

【平成 24 年度】

- (35) H24. 4. 1 鳥取大学社会貢献課における日南町職員の派遣研修（石倉主事（2 年目））
- (36) 4. 28 鳥取大学連携講座「にちなん町民大学」～12. 8 計 10 回開催
- (37) 6. 8 第 1 回WG会議 ～H25. 3. 2 第 3 回WG会議
- (38) 8. 20 インターンシップ受入（～8. 31 のうち 10 日間）
- (39) 10. 24 日南町議会による鳥大視察、研修会
- (40) 11. 16 にちなん「農家楽」セミナー開催
- (41) H25. 1. 25 日南町自治協議会・自治会長会合同研修（乾燥地研究センター見学）
- (42) 3. 2 連携事業成果報告会（日南町総合文化センターにて）

【平成 25 年度】

- (43) H25. 4. 1 鳥取大学社会貢献課における日南町職員の派遣研修（川上主事）
- (44) 5. 17 鳥取大学連携講座「にちなん町民大学」～翌 26. 3 計 11 回開催
- (45) 6. 11 第 1 回WG会議 ～H26. 3. 9 第 3 回WG会議
- (46) 9. 9 インターンシップ受入（～9. 13 工学研究科 学院生 3 名）
～H25. 11. 11 報告会を開催（日南町役場にて）
- (47) 10. 2 日南町森林活用プロジェクト会議の立ち上げ
第 1 回日南町森林活用プロジェクト会議 ～H25. 12. 5 第 2 回会議
- (48) 11. 12 四町連携（日南、南部、大山、琴浦）合同企画
鳥取大学連携シンポジウムを開催（琴浦町にて）
- (49) 3. 9 連携事業成果報告会（日南町総合文化センターにて）

【平成 26 年度】

- (50) H26. 4. 1 鳥取大学社会貢献課における日南町職員の派遣研修（川上主事（2 年目））
- (51) 5. 16 鳥取大学連携講座「にちなん町民大学」～翌 27. 3 計 12 回開催
- (52) 6. 1 鳥取大学知（地）の拠点整備事業シンポジウムを開催（増原町長出席）
- (53) 6. 10 第 1 回WG会議 ～H27. 2. 28 第 3 回WG会議
- (54) 7. 31 第 1 回日南町森林活用プロジェクト会議 ～H26. 11. 5 第 2 回会議
- (55) 9. 9 ハーブの利用に関する研究会が解散
- (56) 9. 29 オーダーメイド型インターンシップ開催（～10. 3 工学研究科 6 名）
～H26. 12. 1 報告会を開催（日南町役場にて）
- (57) 10. 12 鳥取大学風紋祭に炊き込みご飯を出展（四町連携事業）
- (58) 2. 9 4 タウンストーリーズ（地域の課題解決に取り組んだ学生たち）
研究展示会を開催（～2. 26 鳥取大学広報センター）
- (59) 2. 24 日南小学校にて高齢者疑似体験学習を開催（医学部山本教授）
- (60) 2. 28 連携事業成果報告会（日南町総合文化センターにて）

鳥取大学・日南町地域活性化教育研究センターに関する協定書

国立大学法人鳥取大学（以下「甲」という。）と日南町（以下「乙」という。）とは、甲と乙が共同で設置する地域活性化教育研究センターに関し、次のとおり協定する。

（設置）

第1条 教育研究活動を推進する施設として、鳥取大学・日南町地域活性化教育研究センター（以下「センター」という。）を設置する。

（目的）

第2条 センターは、乙の地域活性化に資する研究及び実践活動並びに甲の教育研究活動を行うことを目的とする。

（活動内容）

第3条 甲と乙は前条の目的を達成するため、相互に連携しながら、農林業の振興、自然環境の保全、都市との交流と住民の定住に関する研究及び実践活動を行うとともに、甲の学生のフィールドを活用した実践教育を行うものとする。

（センターの利用目的）

第4条 センターの利用目的は次のとおりとする。

- （1）甲の教員及び学生による研究及び実践活動並びに学生の教育
- （2）前号に掲げる活動に関連した普及啓発活動
- （3）第1号に掲げる活動のための宿泊
- （4）町民等との交流

（役割分担）

第5条 甲は、センターを利用した積極的な研究及び実践活動並びに教育に努めるものとする。

2 乙は、センターの設置場所を提供するとともに、研究及び実践活動並びに教育に対する支援に努めるものとする。

（費用の負担）

第6条 センターの維持管理に要する費用については、別途、甲と乙が協議して定めるものとする。

（協定の期間）

第7条 本協定の有効期間は、平成18年3月1日から平成19年3月31日までとする。ただし、期間内に両者が異議の申立てを行わない場合は、1年ごとに期間が更新されるものとする。

（その他）

第8条 この協定書に定めるもののほか、必要な事項は、甲と乙が協議して定めるものとする。

上記のとおり協定した証として、この証書2通を作成し、両者記名押印の上、各自1通を保管する。

平成18年3月1日

甲 国立大学法人鳥取大学
学 長

能勢隆之



乙 鳥取県日野郡日南町
町 長

矢田 洛美





鳥取大学と日南町の協定



▶ 大学連携の経緯とねらい

(平成17年2月)

町長ほかが鳥取大学を訪問し、日南町との連携を要望。大学側が日南町を訪問し、町内視察や意見交換等を行った。

(平成18年3月)

県内の自治体として初めて大学との連携協定を締結。直面する課題解決に向けて、自治体と大学のパートナーシップに基づいた連携事業を行う。



「鳥取大学・日南町地域活性化教育研究センター」設置に関する協定締結 (H18.3 日南町役場)

▶ 鳥取大学・日南町地域活性化教育研究センターの設置

(平成18年4月)

廃校舎（旧大宮小学校・旧花口分校）を再利用し鳥取大学・日南町地域活性化教育研究センターを設置。

鳥取大学スローガン → 「知と実践の融合」

「現場（フィールド）主義の実践」が可能に。



「地域活性化教育研究センター」開所式 (H18.7 花口)

鳥取大学-日南町連携事業ワーキンググループ会議

▶ 行政ニーズと大学シーズのマッチングの場

(H18年4月)

「鳥取大学－日南町連携事業ワーキンググループ会議」を設立。

日南町が抱える諸課題の解決と、将来を見据えた学生教育と研究に対応するため、鳥取大学教職員と日南町職員及び県職員が参画し、連携事業の立案から協議検討、評価、意見交換などを行っている。（※座長に農学部の日置教授）

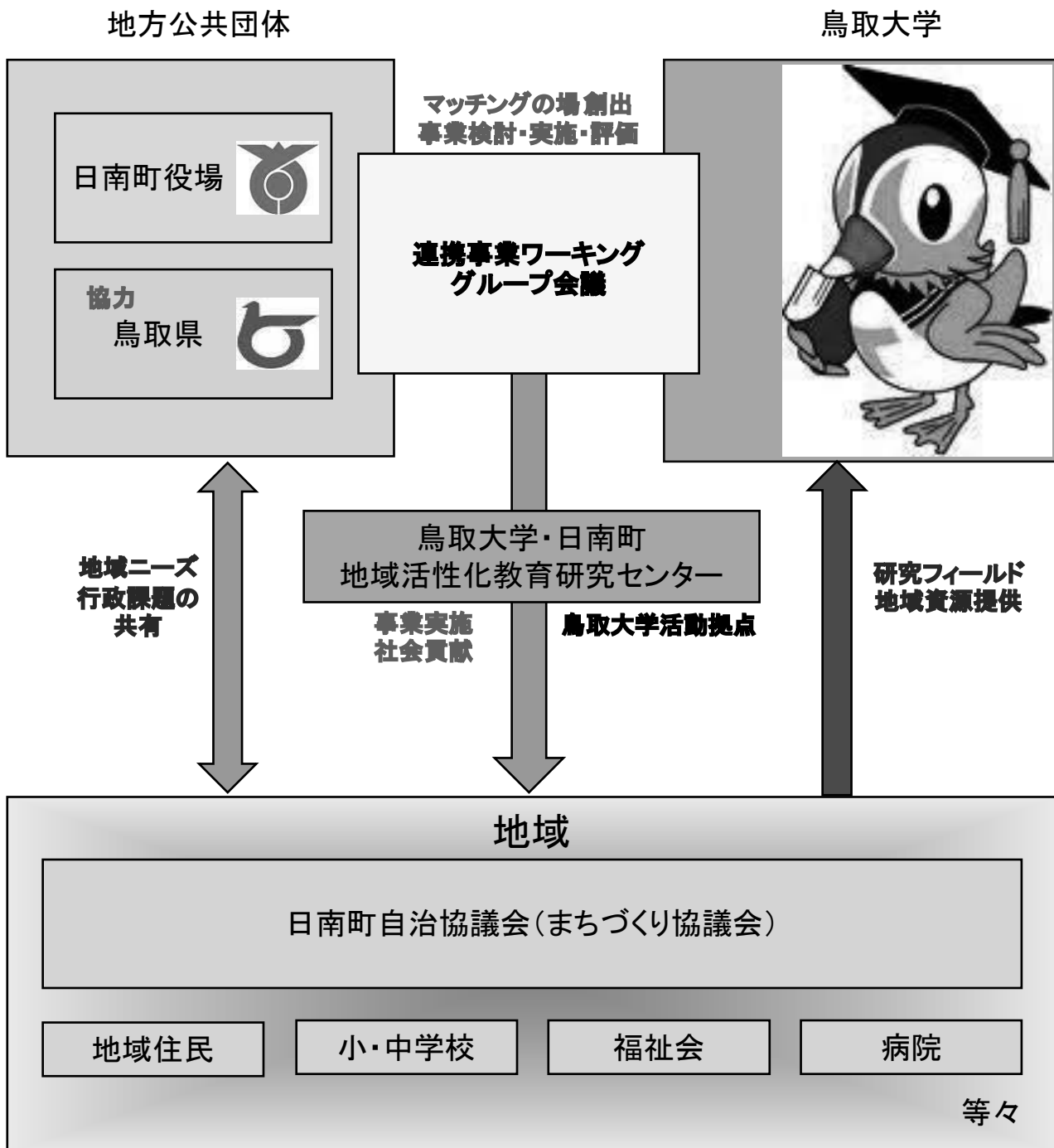
- ・ 第1回・・・・・・・・該当年度の連携事業の内容やスケジュールの確認
- ・ 第2回・・・・・・・・連携事業の進捗状況確認（中間報告）と新年度事業の立案
- ・ 第3回・・・・・・・・連携事業の実績報告と評価及び新年度事業の確認

「鳥取大学と日南町の連携」を先進モデルとして県内でも産官学連携をスタートする動きが見られ、琴浦町（H21. 3）、南部町（H24. 4）、鳥取市（H24. 11）、鳥取県（H25. 1）、大山町（H26.3）が鳥取大学との協定を締結。



「鳥取大学－日南町連携事業WG会議の様子」（H26.6 日南町役場）

連携事業推進体制フロー



連携事業ワーキンググループ会議

平成 26 年度 第 1 回鳥取大学・日南町ワーキンググループ会議 次第

日時：平成 26 年 6 月 10 日（火）15：40～17：30

場所：日南町役場 1F 防災会議室

1. 挨拶

WG 会議座長 農学部フィールドサイエンスセンター教授 日置 佳之

鳥取大学 理事（地域連携担当）・副学長 法橋 誠

日南町長 増原 聡

2. ワーキンググループ会議出席者紹介

3. 報告・協議事項

(1) 前回議事録より（前回 H26. 3. 9 平成 25 年度第 3 回 WG 会議より）

(2) 平成 26 年度連携事業計画について

地域貢献支援事業、大学開放事業、COC 事業、その他の事業

(3) 学生のインターンシップについて

(4) ハーブの利用に関する研究会について

4. その他

5. 閉会

日南町副町長 中村 英明

平成26年度 第1回 鳥取大学・日南町連携事業ワーキンググループ会議 出席者

H26.6.10

	所属・職名	氏名	参加
鳥取大学	理事(地域連携担当)・副学長	法 橋 誠	○
	農学部 附属フィールドサイエンスセンター 教授 (本会 座長)	日 置 佳 之	○
	農学部 生物資源環境学科 国際環境科学 助教	片 野 洋 平	×
	大学院工学研究科 社会基盤工学専攻 社会経営工学 教授	谷 本 圭 志	○
	地域学部 地域環境学科 共生型環境学 教授	永 松 大	○
	地域学部 地域環境学科 循環型環境学 准教授	寶 來 佐 和 子	○
	医学部 保健学科 看護学専攻 成人・老人看護学 教授	山 本 美 輪	○
	地(知)の拠点整備(COC)推進室 特命教授	山 内 有 明	○
	地(知)の拠点整備(COC)推進室 特命講師	天 野 圭 子	○
	産学・地域連携推進機構 機構長 (工学部附属地域安全工学センター センター長) (大学院工学研究科 社会基盤工学専攻 土木工学 教授)	松 原 雄 平	○
	産学・地域連携推進機構 地域貢献・生涯学習部門 部門長 (地域学部 地域教育学科 教授)	福 田 恵 子	×
	産学・地域連携推進機構 地域貢献・生涯学習部門 副部門長	清 水 克 彦	×
	産学・地域連携推進機構 米子地区地域連携部門 部門長 (医学部 医学科 感染制御学 ウィルス学 教授)	景 山 誠 二	×
	産学・地域連携推進機構 米子地区地域連携部門 副部門長 (大学院 医学研究科 機能再生医科学専攻 遺伝子再生医療学 准教授)	栗 政 明 弘	○
	産学・地域連携推進機構 米子地区地域連携部門 産官学連携コーディネーター	増 田 紳 哉	○
	研究・国際協力部 社会貢献課 課長	原 田 剛	○
	研究・国際協力部 社会貢献課 係長(鳥取県派遣職員)	永 江 佳 朗	○
	研究・国際協力部 社会貢献課 課員(日南町派遣職員)	川 上 将 典	○
鳥取県	西部総合事務所日野振興センター日野振興局 地域振興課 係長	川 本 陽 子	○
	西部総合事務所日野振興センター日野振興局 地域振興課 主事	田 中 裕 哉	○
日南町	町 長	増 原 聡	○
	副町長	中 村 英 明	○
	福祉保健課 課長	梅 林 千 恵	○
	福祉保健課 主任社会福祉士	緒 形 明 朗	○
	福祉保健課 保健師	岩 佐 詩 織	○
	教育課 学校教育室 室長	橋 本 康 雄	○
	農林課 林政室 主任	島 山 圭 介	○
	住民課 住民生活室 主事	吉 田 博 一	○
	企画課 課長	中 曾 森 政	○
	企画課 企画振興室 室長	浅 田 雅 史	○
	企画課 自治振興室 主事	石 倉 嘉 寛	○

平成 26 年度第 1 回鳥取大学・日南町ワーキンググループ会議 概要

日時：平成 26 年 6 月 10 日（火）15:40～17:20

場所：日南町役場 1F 防災会議室

1. 開 会

- 日置座長）鳥大と日南町の連携も 9 年目を向かえ、お互いに着々と発展してきた。来年は、節目の 10 周年となる。これまでの関係や成果を、目に見える形としてまとめられれば良い。
- 法橋理事）先日（6/1）には、本学で開催した C O C シンポジウムに増原町長にパネリストとしてお越し頂き、盛況であった。C O C 推進室も新たに開設し、今後も連携を進めながら本学としても協力したいと考えている。
- 増原町長）先日、日本創世会議より発表された約 900 の自治体が消滅の可能性あり、という報道があったが、ストップ・ザ・少子化、地方の元気、女性の人材活用など大学と連携した町づくりをより一層推進したいと考えている。他の連携自治体を巻き込んだ発展的な事業が行える事を期待している。

2. ワーキンググループ会議出席者紹介

- 出席者自己紹介（順に）
- 産学・地域連携推進機構もこの春から 23 名の新しい体制でスタートした。産学・地域連携推進機構一丸となって地域貢献事業に取り組んでいる。今後も、機構全力を上げて今まで以上に連携推進を行っていききたい。（松原機構長）

3. 報告・協議事項

・前回議事録の確認

- 前回の WG 会議は、平成 26 年 3 月 9 日に日南町総合文化センターを会場に開催した。平成 25 年度に行った 14 の連携事業について、それぞれ実績の報告と確認を行った後、平成 26 年度に取り組みたい事業について協議いただいた。（川上課員）
- ・平成 26 年度連携事業計画について（地域貢献支援事業、大学開放事業、C O C 事業、その他の事業）
- ・「鳥取大学－日南町連携事業ワーキンググループ会議・連携事業報告会」
- WG 会議については、毎年 3 回程度行っている。今年度の第 1 回は本日、第 2 回は晩秋頃に次年度予算に反映できるよう事業の芽だしを行い、第 3 回は当該年度事業のまとめ、実績の確認という意味で行っている。また、例年第 3 回の WG 会議と当時開催で、一般町民向けに連携事業報告会を開催している。（日置座長）

【教育・文化】

- ・「「にちなんふる里まつり」に連携する出前科学実験教室」について（医学部 中本准教授／教育委員会との連携）

→10月26日に開催される「にちなんふる里まつり」と連携し、医学部及び生命機能研究支援センターの専門家が科学実験教室を出前する。平成19年度から継続し、今年8年目の連携事業。子どもを中心とした参加者の理解度、自発的な考えを助け医学的知識の普及を図るとともに地域の科学技術を支える人材育成に繋がることを期待。13名の専門家の参加により、10ブースを予定している。（川上課員）

- ・「鳥取大学一日南町連携講座として「にちなん町民大学」を開催」について

→さまざまな分野の講座を教育委員会が主催し、全12回のうち数回、鳥取大学教員に講師として講演いただく「にちなん町民大学」を開催している。身近なことから、専門的な分野まで幅広い知識の宝庫である鳥取大学には、講師派遣を通じて、学ぶ楽しさや大切さを感じてもらい生涯学習の場として定着している。

【医療・福祉】

- ・「住民の生きがいがづくりのためのエコミュージアムワークショップの開発」について（地域学部 福田教授、筒井准教授、関准教授／大宮まちづくり協議会との連携）

→日南町大宮まちづくり協議会との連携により、地域住民の生きがいがづくり・地域づくりの一つの施策として、住民の趣味・特技のほか、地域の歴史・文化・自然といった諸資源を包括した「エコミュージアムワークショップ」を企画・実施する。その心理的な効果について、住民の意識調査を通して検証するとともに、身体的健康の側面からエコミュージアムの周遊コースの効果検証を行う。（川上課員）

- ・「中山間地における大腸がん検診の課題」について（医学部 渡辺助教／日南病院との連携）

→平成25年度事業で、日南町の大腸がん検診と日南病院の大腸内視鏡データを分析し、大腸がん検診の啓発チラシとポスターを作成。今年度は、さらに日南病院の大腸内視鏡検査の調査範囲を広げ、また啓発活動の効果を判定し、受診率をさらに上げる工夫をしていくことで、日南町における大腸がん死亡率の減少、医療費の削減を目指す。（梅林課長）

- ・「発達障害児の包括的支援ネットワークの構築」について（医学部 前垣教授／日南町子ども支援連絡会議との連携）

→昨年12月に開催したWG会議にて町長の発言による依頼「発達障害児への包括的支援」から事業化。日南町内の保育園・小学校・中学校・教育委員会・福祉保健課より構成されている「日南町子ども支援連絡会議」へ鳥取大学の医師、臨床心理士などの専門職が参加しスーパーバイズする。

継続的に日南町内の事例の検討を行うことで、具体的な問題点と解決策を共有・理解し、支援の実施と評価の流れを定着させる。また関係機関・職員のスキルアップを図るとともに、関係

者の役割分担を明瞭なものとし、問題となる子どもへの取り組み方法を改善していく。（岩佐保健師）

→先日、医学部にて第1回目の事業打合せを行い、日南町の現状を聞かせていただいた。子どもの監督というよりは医療・支援スタッフ、教育スタッフ、家庭の問題等があることが分かった。次回は、医学部が日南町の現場に伺い、実際に子どもや子どもと接している方々の状況を見て把握し、子ども支援連絡会議にも参加する予定。

また、医学部教育センターの角南助教も米子市との連携事業を持っておられることから、本事業にも積極的に関わって頂く。（栗政副部門長）

→この4月から本学地域学部に「子どもの発達・学習研究センター（小枝教授）」が開設されたが、連携は考えられるか。（法橋理事）

→小枝先生は、もともと脳神経小児科の先生でよく知る存在だが、医学部と本学、日南町との距離は気になるところ。問題点を洗い出すという部分では、角南助教が小枝教授と連携しておられる。（栗政副部門長）

→「子どもの発達・学習研究センター」では、附属小学校との連携なども行うようになる。双方、電子媒体を使っての情報共有に努められたい。（法橋理事）

・「シミュレーションを用いた認知症プログラム」について（医学部山本教授／福祉保健課、日南病院、日南福祉会との連携）

→現在、学内の学生でプログラムの検証を行っている。昨日、日南病院との打合せで看護職の研修に参加させて頂くことが決定した。9月30日、10月21日には「日南病院」にて、また10月24日には「介護福祉センターあかねの郷」での職員研修が決定している。（山本教授）

→毎月開催する認知症部会の中で「対応力を如何に上げていくか」ということが課題となっている。職員の認知症ケアの質の向上を目指す。（緒形社会福祉士）

【生活・環境】

・「豊かな環境を守るための不在村地主問題」について（農学部 片野助教／企画課、農林課、住民課、建設課との連携）

→土地や家屋を所有しながら管理を行わず、法的な諸手続も行うことがない、不在村所有者の問題は日本国内の地域社会で共有される課題になりつつある。荒れ果てた山林や農地、空き家などについて公共性を害さない程度に管理する必要があることから、何らかの対策を講じる必要がある。平成25年度に日南町に土地や家屋を所有する方々に対して行った社会意識調査を平成26年度中にデータの分析を進め、現状の分析、未来を予測し、具体的な政策転換や条例等の整備を目標とする。（川上課員）

→デリケートな問題であり、町としても悩まれるところだと片野助教も気にしている。取りまとめたデータをもとに研修者目線からの提言や政策立案まで持っていく、その可能性について最終的には方向性を町が選択するというところだと考えている。（法橋理事）

→空き家などの場合は法的な撤去命令なども行えるが、条例でどこまで個人の資産や所有権に踏み込めるか、というところ。仕組みづくりや解消への導きなど、色々な案としての提案をいた

だく事は有り難いと考えている。(増原町長)

・「日野川源流域における水質・生態系調査」について(地域学部 寶來准教授/住民課との連携)

→日野川源流域の支流をモデルに様々な角度からの成分分析を行い、その環境変化や要因のメカニズムを明らかにする。来週には早速現地に入り、まずはサンプリングを中心に行う。なお、サンプリングはなるべく季節の変化を見て行っていく。(寶來准教授)

→地元住民や日野川漁協組合など関係機関の関心も非常に高い。来週の現地調査には、地元の方をはじめ、「日野川源流と流域を守る会」の方にも立ち会っていただく。(吉田主事)

→調査・研究の内容にもよるが、鳥大工学研究科研究員の岡田純さんにも協力が仰げるかもしれない。生き物についての専門家ではあるが、これまで日野川で研究されてきた経緯もある。(谷本教授)

→この調査については、今起きている状況や現象がはっきりとつかめていないという問題もある。不確定な噂話というような情報があるが、情報をまとめて整理するところから始めなければならない。寶來准教授は無機の専門であるが、各専門家を集めたチームにより調査に向かえるような体制が望ましい。(法橋理事)

→奇形魚などの話はあまり聞かないが、感じているのは昔から居たはずの天然の魚(ウグイ、ハヤ、オイカワなど)が居なくなったと感じている。多里地域のクロム鉱山、合併浄化槽など関係しているかは分からないが、この研究で明らかにされればと期待している。(増原町長)

【産 業】

・「日南町森林活用プロジェクト会議」について(鳥取大学教員が専門委員として参加)

→日南町の森林資源の有効活用と林業振興による森林環境の適正な管理と保全、地域雇用の創出を目指して、平成 25 年度に「日南町森林活用プロジェクトチーム」を立ち上げた。日南町は豊かな森林資源を有しているものの「FSC 森林認証」や「J-VER(カーボンクレジット)」などについて、まだまだ認知度も低くその活用については課題も山積している。日南町産材の販路拡大、認証材を使った木工品産業開発、町外からの視察に対応するためのモデルフォレストの選定など今後、チーム内で専門的な役割を分担し、情報を集め活かしていく。(永松教授)

→前回のプロジェクト会議以降、若干ではあるが認証材を使った商品の開発や広報用ポスターなどの作成が実現した。今月中旬から下旬頃に、今年度はじめの「森林活用プロジェクト会議」の開催を予定している。(島山主任)

【観 光】

・「地域資源を活かしたエコツーリズム振興のための人材養成」について(農学部 日置教授/日南町企画課との連携)

→平成 25 年度から「観光ガイド養成講座」を開始し、10 名の町観光ガイドが誕生した。先日 NHK ラジオ全国放送などでも活躍したと聞いている。今年度も引き続き観光ガイド養成講座と

連動する形で事業を実施し、旅行商品の開発と試行について講習するとともに、実際に試行ツアーガイドの現地指導を行うこととする。これにより、企画・参加者募集・現地でのガイド等の一連の業務が行える人材が養成されることを期待している。本日、6月10日に「観光ガイド養成講座開講式」を予定している。(日置座長)

→県が窓口の日野郡広域交流促進協議会では、夏・冬にかけて他県から日野郡3町をまわるツアーが計画されている。3町をガイドできる人材が育成できれば良いのに、という話が出ていた。日野高校による「高校生ガイド」などが実現すれば、学生の地域学習、アルバイト、社会貢献にも寄与することからおもしろいのではないかと考えている。(増原町長)

【四町（日南、南部、大山、琴浦）連携】

・「四町（日南町・南部町・大山町・琴浦町）連携事業」（鳥取大学へ職員派遣を実施している県内4町が連携した取り組み）

→日南町、南部町、大山町、琴浦町の4町は鳥取大学へ職員の研修派遣を実施しており、お互いの情報を共有している。各町が違った特色を持つ一方で、過疎高齢化といった共通の課題も多く抱えていることから、観光政策や地域活性化といった諸課題の解決に向けて連携事業に取り組んでいる。今年度も「とっとり産業フェスティバル」や「風紋祭」、各町のイベントなどにも連携した取り組みを行う予定。(川上課員)

【学生のインターンシップ受け入れについて】

→平成25年度、谷本教授のご協力により、将来公務員を目指す学生に行政職を紹介する一方で、本町の公共交通、空き家調査に取り組んで頂くインターンシップに取り組んだ。今年も各課からのニーズを吸い上げ、インターンシップに取り組むたいが、業務に限らず学生にどんどん日南町に来て頂ける機会を定着させたい。本町から一方的にお願いごとを提案するのではなく、学生の研究テーマと日南町の課題を結びつける仕組みづくりを定着させたいと考えている。(石倉主事)

→昨年度まで地域貢献支援事業として取り組んでいた「サマースクール」「ウィンタースクール」については、教育委員会としても大変成果が大きかったと感じている。地域貢献支援事業の原則期間の3年を経過し、今年度は大学予算では事業化していないが、学生の「子どもたちと関わりたい」という自主的な思いを尊重しながら、町教育委員会としての狙いを持ったうえで何らかの形で取り組むたいと考えている。(橋本室長)

→COC事業の中で「オーダーメイド型インターンシップ」というのは一つのテーマでもある。大学はただ学生を派遣する、一方、自治体は学生を受け入れるが何を頼んで良いか分からない、というような状況を解消したい。自治体と大学（学生）がお見合い形式でマッチングしながら取り組んで行きたいと考えている。学生の夏休み期間である8月、9月の頃には何らかの取り組みができるよう今後調整していく。

また、「サマースクール」「ウィンタースクール」については、インターンシップでは無い、いわゆるボランティアのようなルートでの仕組みづくりも考えたいと思っており、COC事業の検討事項にも入っている。(谷本教授)

→学生部、キャリアセンター、就職支援課などとも連携・調整する必要もある。企業版として行っているインターンシップの自治体版であるわけで「協働型インターンシップ」ということも視野に入れて欲しい。(法橋理事)

→今年度受験(来年採用)から職員の採用にかかる住所要件を「鳥取県内に住所を置く者」とした。(日南町、南部町、伯耆町) 将来、公務員を目指す学生は、良い部分も悪い部分も見て感じるという意味で、インターンシップを就職活動として利用していただければ良い。(増原町長)

→そういった内容(住所要件)を、就職支援課を通じて、学生に広報していかなければならない。(法橋理事)

【その他】

・4月初め～5月末までの新聞記事について説明

→日南町各担当者より説明

・鳥取県西部総合事務所日野振興センターより

→日野高校が来年度から、より地域に目を向けた科目を設定するというで力を入れている。

日野振興センターとしても、高校生により地域のことを知っていただけるような働きかけを強めて行きたい。(川本係長)

・「たたら」について

→地元で「たたら」について研究している方や、資料をお持ちの方が居られれば紹介していただきたい。名古屋からツアーを組みたい、という要望もあるようである。(法橋理事)

→「たたら顕彰会」が資料などはお持ちである。(増原町長)

4. 閉 会

中村副町長) 連携も9年目に入り、WGメンバーも昔に比べて随分多くなったこと、事業の中身についても成果が見え、安心感を持って連携事業に取り組み、職員の成長にも大きく関わっていただいていると感謝申し上げます。常に課題は次々と生まれてくるが、今後も良い関係を築いていけるようお願いしたい。



(第1回WG会議の様子)

平成 26 年度 第 2 回鳥取大学・日南町ワーキンググループ会議 次第

日時：平成 26 年 12 月 1 日（月）14：00～15：30

場所：日南町役場 1F 防災会議室

1. 挨拶

WG 会議座長 農学部フィールドサイエンスセンター教授 日置 佳之

鳥取大学 理事（地域連携担当）・副学長 法橋 誠

日南町長 増原 聡

2. 報告・協議

(1) 前回議事録より（前回 H26. 6. 10 第 1 回 WG 会議より）

(2) 平成 26 年度連携事業の進捗状況（中間報告）について

(3) 平成 27 年度連携事業について

・日南町からの提案

・鳥取大学からの提案・情報提供

(4) H26 年度連携事業報告会及び第 3 回 WG 会議の日程調整について

3. その他

4. 閉会

日南町副町長 中村 英明

平成26年度 第2回 鳥取大学・日南町連携事業ワーキンググループ会議 出席者

H26.12.1

所属・職名		氏名	参加
鳥取大学	理事(地域連携担当)・副学長	法 橋 誠	○
	農学部 附属フィールドサイエンスセンター 教授 (座長)	日 置 佳 之	○
	農学部 生物資源環境学科 国際環境科学 助教	片 野 洋 平	○
	大学院工学研究科 社会基盤工学専攻 社会経営工学 教授	谷 本 圭 志	○
	地域学部 地域環境学科 共生型環境学 教授	永 松 大	○
	地域学部 地域政策学科 公共政策学 准教授	筒 井 一 伸	×
	地域学部 地域環境学科 循環型環境学 准教授	寶 來 佐 和 子	×
	医学部 保健学科 看護学専攻 成人・老人看護学 教授	山 本 美 輪	○
	産学・地域連携推進機構 地域貢献・生涯学習部門 部門長 (地域学部 地域教育学科 教授)	福 田 恵 子	×
	産学・地域連携推進機構 地域貢献・生涯学習部門 副部門長	清 水 克 彦	○
	産学・地域連携推進機構 米子地区地域連携部門 部門長 (医学部 医学科 感染制御学 ウィルス学 教授)	景 山 誠 二	×
	産学・地域連携推進機構 米子地区地域連携部門 副部門長 (大学院 医学研究科 機能再生医科学専攻 遺伝子再生医療学 准教授)	栗 政 明 弘	×
	産学・地域連携推進機構 地域貢献・生涯学習部門 産官学連携コーディネーター	奥 村 和 敬	○
	産学・地域連携推進機構 米子地区地域連携部門 産官学連携コーディネーター	増 田 紳 哉	×
	地(知)の拠点整備(COC)推進室 特命教授	山 内 有 明	○
	地(知)の拠点整備(COC)推進室 特命講師	天 野 圭 子	○
	研究・国際協力部 社会貢献課 課長	原 田 剛	○
	研究・国際協力部 社会貢献課 係長(鳥取県派遣職員)	永 江 佳 朗	○
	研究・国際協力部 社会貢献課 課員	森 田 将 悟	○
	研究・国際協力部 社会貢献課 課員(日南町派遣職員)	川 上 将 典	○
鳥取県	西部総合事務所 福祉保健局 健康支援課 課長補佐	高 橋 千 晶	○
	西部総合事務所 日野振興センター 日野振興局 地域振興課 課長補佐 (日野川源流と流域を守る会事務局)	井 本 幹 彦	○
	西部総合事務所 日野振興センター 日野振興局 地域振興課 主事	田 中 裕 哉	○
日南町	町 長	増 原 聡	○
	副町長	中 村 英 明	○
	農林課 課長	青 葉 誠 也	○
	農林課 林政室 主任	島 山 圭 介	○
	農林課 農政室 主事	坪 倉 昂 平	○
	教育課 学校教育室 室長	橋 本 康 雄	○
	福祉保健課 主任社会福祉士	緒 形 明 朗	○
	福祉保健課 保健師	岩 佐 詩 織	○
	福祉保健課 保健師	松 本 朋 子	○
	住民課 住民生活室 主事	吉 田 博 一	○
	企画課 課長	中 曾 森 政	○
	企画課 企画振興室 室長	浅 田 雅 史	○
	企画課 自治振興室 主事	石 倉 嘉 寛	○

平成 26 年度第 2 回鳥取大学・日南町ワーキンググループ会議 概要

日時：平成 26 年 12 月 1 日（月）14：00～15：30

場所：日南町役場 1F 防災会議室

1. 挨拶

日置座長) 連携も 9 年を迎え来年は 10 周年を迎える。鳥取大学の地域貢献も進んできたが、核となっているのは日南町。10 周年を記念して区切りとなることを計画したい。

法橋理事) 市町村合併が行われるなか、単独の道を選んだ日南町が鳥取大学との連携を結ばれたことについては意味があり、鳥取大学としても責任は重大だと考えてきた。大学としても地域のために役に立つ改革に取り組んでいる。

増原町長) 自治体も大学も「選ばれる」ことを考えていく必要がある。選ばれるためには、これからも町と大学、お互いの力が必要であり、今後とも連携を深めて行きたい。

2. 報告・協議

(1) 前回議事録より（前回 H26. 6. 10 第 1 回 WG 会議より）

→前回議事録に異議あれば 12 月末までに事務局に申し立てを行って欲しい。

→今回の出席者確認。初めての参加者のみ挨拶。

（奥村 CD、森田課員、松本保健師、井本課長補佐、高橋課長補佐）

(2) 平成 26 年度連携事業の進捗状況（中間報告）について

→H26 年度に行っている下記 13 件の連携事業について、進捗状況を担当職員または教員より報告。いずれも概ね予定通り進んでいる。

①「にちなんふる里まつり」に連携する出前科学実験教室

→特に意見無し

②鳥取大学一日南町連携講座として「にちなん町民大学」を開催

→特に意見無し

③日南小・中学校「サマースクール」に学生が参加し学習支援

→スタッフとなる学生の休みと日南町の小・中学校との「休み」が合わず、調整が難しい部分があるが、何とか上手く考えて行きたい。（橋本室長）

→今年からは、日南町の独自事業だがこれまで通り地域学部矢部教授に支援（学生集め）いただく方が好ましい。（永松教授）

④住民の生きがいづくりのためのエコミュージアムワークショップの開発

→地域での成果も形になって見え始めている。（増原町長）

→15 分間×3 本のドキュメンタリー番組を制作、後世に伝える映像として残す。（川上）

⑤中山間地における大腸がん検診の課題

→検診の受診率の向上についての成果はどうか。(法橋理事)

→昨年作成していただいた啓発チラシもマンガで分かり易く、今年は早い段階から検診を受ける住民が多く、昨年よりも受診率は向上していると感じている。(松本保健師)

⑥発達障害児の包括的支援ネットワークの構築

→特に意見無し

⑦シミュレーションを用いた認知症プログラム

→三報社出版社からの電子書籍について詳しい内容は。(法橋理事)

→電子書籍だと分かりにくい部分があり、動画配信のような形になる模様。(山本教授)

⑧豊かな環境を守るための不在村地主問題

→空き家対策については、空き家を土地ごと自治体に寄付していただき地域のために再利用するといったことも考えて行かなければ。(増原町長)

→固定資産税の取り扱いや空き家管理の費用負担などについて新たな規定や条例などの策定まで結びつけたい。何らかの委員会のようなものを組織して取り組んでみてはどうか。(法橋理事)

⑨日野川源流域における水質・生態系調査

→寶來先生が、ご都合により3月末まで休暇なので3月の事業報告が難しいかもしれない。(永松教授)

→今後、調査を発展させていくために寶來先生のみならず地域学部を始め学内横断的にチーム研究も必要になるため、永松先生には調整もお願いしたい。(法橋理事)

⑩日南町森林活用プロジェクト会議

→学生のインターンシップなどでの「植林体験」なども考えて欲しい。(増原町長)

→鳥大の演習林は飽和状態であるため、町有林に植える場所があれば歓迎。(日置座長)

→事業の出口について「ウッドプラスチック」や「セルロースナノファイバー」などに出口を求めることも今後研究していただきたい。(法橋理事)

⑪地域資源を活かしたエコツーリズム振興のための人材養成

→特に意見なし

⑫オーダーメイド型インターンシップによる学生の受け入れ

→学生には、行政の財政状況も確認させ費用対効果の部分も考えさせながら取り組む必要があると考える。(法橋理事)

→自治体と学生だけでは、上手くいかないので大学の教員も積極的に関わって行くべきであり、全学横断的に発展させる必要もある。(谷本教授)

→国際交流(留学生)という部分でも考えていただきたいと思う。(増原町長)

⑬四町(日南町・南部町・大山町・琴浦町)連携事業

→特に意見無し

(3)平成27年度連携事業について

(日南町からの提案)

- ①オオハンゴンソウ（特定外来生物）の有効的な駆除についての調査・研究をお願いしたい
→日南町内で特定外来生物に指定されているオオハンゴンソウが繁茂しており、生態系だけでなく農業への悪影響も懸念される。有効な駆除対策の調査と研究をお願いし、可能な限り調査結果に基づいた駆除を行いたい。
→学内で相当の教員を探してみる（地域学部 永松教授）
- ②連携協定 10 周年記念イベントにご協力いただきたい
→平成 27 年度には、大学連携協定と日南町まちづくり協議会が共に記念すべき 10 周年を迎えるにあたり、コラボレーション企画「鳥取大学×日南町まちづくり協議会 10 周年記念事業」を開催したく、協力いただきたい。
(案) 記念講演、実践事例報告、トークセッション、展示・模擬店、懇親パーティーなど
→開催する方向で決定。

(鳥取大学からの提案・情報提供)

- ①平成 27 年度開設授業科目「地的好奇心育成のための早期体験学習」
→鳥取大学と連携協定を締結している日南町、琴浦町、南部町、大山町の協力のもと、実際に現地に赴き視察を実施し、大学入学後早い時期に地域の実情に接することにより各町の特色ある自然や産業についての教養を身につけるとともに、地域を学ぶ動機付けを行う。
→一同、了解。
- ②水田畦畔管理の現状と改善について
→畦畔・用水路・農道の管理における労働量の軽減対策として若桜町で導入が進んでいる「ムカデ芝」の事例を交えて紹介。

(4) H26 年度連携事業報告会及び第 3 回 WG 会議の日程調整について

- H27 年 2 月 28 日（土）若しくは 3 月 14 日（土）のどちらかで行う。
事務局の調整により追って決定・報告する。

3. その他

- 特に意見無し。

4. 閉 会

中村副町長) WG 会議が行われるたび、なるほどという気づきを得ることができる。今後とも更なる連携が推進されるようよろしくお願いしたい。



(事業の進捗状況について確認)

平成 26 年度 第 3 回鳥取大学・日南町ワーキンググループ会議 次第

日時：平成 27 年 2 月 28 日（土）13：00～15：00

場所：日南町総合文化センター2F 多目的ホール

1. 挨拶

WG 会議座長 農学部フィールドサイエンスセンター教授 日置 佳之
日南町長 増原 聡

2. 報告・協議

(1) 前回議事録より（前回 H26. 12. 1 第 2 回 WG 会議より）

(2) 平成 26 年度連携事業の実績報告について

(3) 平成 27 年度新規連携事業（案）について

3. その他

4. 閉会

日南町副町長 中村 英明

平成26年度鳥取大学・日南町連携事業第3回ワーキンググループ会議 出席者

H27.2.28

所属・職名		氏名	参加
鳥取大学	理事(地域連携担当)・副学長	法 橋 誠	○
	農学部 附属フィールドサイエンスセンター 教授(座長)	日 置 佳 之	○
	農学部 生物資源環境学科 国際環境科学 助教	片 野 洋 平	○
	大学院工学研究科 社会基盤工学専攻 社会経営工学 教授	谷 本 圭 志	×
	地域学部 地域環境学科 共生型環境学 教授	永 松 大	○
	地域学部 地域政策学科 公共政策学 准教授	筒 井 一 伸	×
	地域学部 地域環境学科 循環型環境学 准教授	寶 來 佐 和 子	×
	医学部 保健学科 看護学専攻 成人・老人看護学 教授	山 本 美 輪	○
	産学・地域連携推進機構 地域貢献・生涯学習部門 部門長 (地域学部 地域教育学科 教授)	福 田 恵 子	○
	産学・地域連携推進機構 地域貢献・生涯学習部門 副部門長	清 水 克 彦	○
	産学・地域連携推進機構 米子地区地域連携部門 部門長 (医学部 医学科 感染制御学 ウィルス学 教授)	景 山 誠 二	○
	産学・地域連携推進機構 米子地区地域連携部門 副部門長 (大学院 医学研究科 機能再生医科学専攻 遺伝子再生医療学 准教授)	栗 政 明 弘	○
	産学・地域連携推進機構 地域貢献・生涯学習部門 産官学連携コーディネーター	奥 村 和 敬	○
	産学・地域連携推進機構 米子地区地域連携部門 産官学連携コーディネーター	増 田 紳 哉	×
	地(知)の拠点整備(COC)推進室 特命教授	山 内 有 明	×
	地(知)の拠点整備(COC)推進室 特命講師	天 野 圭 子	×
	研究・国際協力部 社会貢献課 課長	原 田 剛	○
	研究・国際協力部 社会貢献課 係長(鳥取県派遣職員)	永 江 佳 朗	○
	研究・国際協力部 社会貢献課 課員	森 田 将 悟	○
	研究・国際協力部 社会貢献課 課員(大山町派遣職員)	林 原 康 浩	○
研究・国際協力部 社会貢献課 課員(日南町派遣職員)	川 上 将 典	○	
鳥取県	西部総合事務所 日野振興センター 日野振興局 副局長 (日南町担当コンシェルジュ)	池 内 富 久	○
	西部総合事務所 日野振興センター 日野振興局 地域振興課 課長補佐 (日野川源流と流域を守る会事務局)	井 本 幹 彦	○
	西部総合事務所 日野振興センター 日野振興局 地域振興課 主事	田 中 裕 哉	○
	西部総合事務所 福祉保健局 健康支援課 課長補佐	高 橋 千 晶	×
	西部総合事務所 西部振興課 係長	松 原 誠	×
日南町	町 長	増 原 聡	○
	副町長	中 村 英 明	○
	教育課 課長	黒 見 隆 久	○
	教育課 図書館司書	福 田 範 子	○
	農林課 林政室 主任	島 山 圭 介	○
	福祉保健課 主任社会福祉士	緒 形 明 朗	○
	福祉保健課 保健師	岩 佐 詩 織	○
	福祉保健課 保健師	松 本 朋 子	○
	住民課 住民生活室 主事	吉 田 博 一	○
	企画課 課長	中 曾 森 政	○
	企画課 企画振興室 室長	浅 田 雅 史	○
	企画課 自治振興室 主事	石 倉 嘉 寛	○

平成 26 年度 第 3 回鳥取大学・日南町ワーキンググループ会議 概要

日時：平成 27 年 2 月 28 日（土）13：00～14：45

場所：日南町総合文化センター2F 多目的ホール

1. 挨拶

日置佳之）→今年度最終の WG 会議となる。26 年度事業の実績確認と 27 年度事業についての協議を行う。

増原町長）→先日、27 年度の施政方針を示した。今後も、大学との連携を図り引き続き地域コミュニティや福祉、観光など様々な分野での行政サービスの向上に取り組みたい。また、「鳥取大学との連携協定」を締結し 10 周年を迎えることから 27 年度には、記念イベントも開催したく計画を立てている。

2. 報告・協議

(1) 前回議事録の確認（前回 H26. 12. 1 第 2 回 WG 会議より）

→意見なし

(2) 平成 26 年度連携事業の実績報告について

→26 年度に連携して行った 13 件の事業について、担当教員・町の担当者が説明し確認。いずれの事業も順調に進み、概ね終了している。

①「にちなんふる里まつり」に連携する出前科学実験教室（川上課員）

→意見なし

②鳥取大学一日南町連携講座として「にちなん町民大学」を開催（黒見課長）

→サイエン・スアカデミーや公開講座など、図書館を活用した配信の例もある。今後、視野に入れておいて欲しい。（法橋理事）

③日南小・中「サマー・ウィンタースクール」鳥大生スタッフ学習支援（黒見課長）

→矢部教授への報告と情報提供などに配慮いただくよう、改めてお願いしておきたい。（法橋理事）

④住民の生きがいのためのエコミュージアムワークショップの開発（福田教授）

→意見なし

⑤中山間地における大腸がん検診の課題（松本保健師）

→精検の受診率は向上しているのか。（法橋理事）

→県内ではまだまだ高い方では無いが、連携事業により受診率の向上が見られ、成果があると評価している。（松本保健師）

⑥発達障害児の包括的支援ネットワークの構築（岩佐保健師）

→意見なし

⑦シミュレーションを用いた認知症プログラム（山本教授、緒方社会福祉士）

→意見なし

⑧豊かな環境を守るための不在村地主問題（片野助教）

→意見なし

⑨日野川源流域における水質・生態系調査（吉田主事）

→特定の事業所排水が水質・生態系に及ぼす影響を測る調査にならないよう留意し、調
と研究を進めて欲しい。今後、寶來准教授以外の教員を含むチームを作り取り組まな
ければならないと理解している。（法橋理事）

⑩日南町森林活用プロジェクト会議（永松教授、島山主任）

→意見なし

⑪地域資源を活かしたエコツーリズム振興のための人材養成（日置座長）

→2年間で誕生した（誕生する予定）観光ガイド13名は、主にどういった活動を行って
いるのか。（法橋理事）

→視察の受け入れやNHKラジオなどにも出演している。今後は、観光ガイドがツアーを
計画し、町外者を受け入れる実践的な活動に移っていく。（日置座長）

⑫オーダーメイド型インターンシップによる学生の受け入れ（石倉主事）

→意見なし

⑬四町（日南町・南部町・大山町・琴浦町）連携事業（森田課員）

→意見なし

(3)平成27年度新規連携事業（案）について

→27年度に向けて、新規に取り組む予定の4件の事業について、担当教員・町の担当
が説明し確認。

①地（知）的好奇心育成のための早期体験学習（清水准教授）

→連携協定を締結している日南町、大山町、琴浦町、南部町をフィールドに、各町の特
徴や課題など実際に現地を訪問し、それぞれの町の風土を体感し人々と交流する。
日南町では「田植え」経験を通して、農業について学ぶ。

②取大学-日南町連携協定10周年記念イベント（中曾課長）

→H18年に鳥取大学と日南町の連携協定が締結され、H27年には節目となる10周年を迎
える。共に歩んだ10周年を記念して「鳥取大学×日南町10周年記念事業」を開催し、
更なる連携の推進を図る。

③国際理解講座

→鳥取大学に在籍する留学生が、母国の絵本や図書などを通して民俗、文化などを紹介
し、日南町内の小学生と交流を行うことで、他国への関心を高め、身近に感じるこ
とができる機会とする。

→留学生の中学校授業への参加はどうか。（増原町長）

→26年度は京都大学の留学生に来ていただき行った。現在、教育委員会においても協議
と検討を重ねている。（黒見課長）

→国際協力課と国際交流センターとの連携を図り進めて欲しい。（法橋理事）

3. その他

→配布チラシについて説明後、事務局より諸連絡。

- ・産官学・地域連携推進機構 20 周年シンポジウムチラシ 3/16（清水准教授）

→意見なし

- ・持続的過疎社会形成研究プロジェクト成果報告会チラシ 3/19（永江係長）

→意見なし

- ・H26 年度「鳥取大学-日南町連携のあゆみ」の発行について（川上課員）

→毎年、連携事業の成果を綴った「連携のあゆみ」報告書を作成しており、現在 3 月末の発行を目指して製本を行っている。また、27 年度には 10 周年記念イベントの一環として、10 年間のあゆみを 1 冊の冊子に纏め発行する予定。寄稿の依頼の際にはご協力いただきたい。

→意見なし

4. 閉 会

中村副町長）午前中には報告会、午後には WG 会議と意義ある 1 日だったと理解している。連携により、いつも新しい気づきを得ることができる。今後とも更なる連携が図られるようご協力いただきたい。



（事業実績の確認と新年度事業について協議するメンバー）

平成26年度連携事業

平成 26 年度鳥取大学一日南町連携事業実績報告 概要版

鳥取大学一日南町連携事業ワーキンググループ会議・連携事業報告会

- 第 1 回 平成 26 年 06 月 10 日（日南町役場 1F 防災会議室）
- 第 2 回 平成 26 年 12 月 01 日（日南町役場 1F 防災会議室）
- 第 3 回 平成 27 年 02 月 28 日（日南町総合文化センター2F 多目的ホール）
- 連携事業報告会 平成 27 年 02 月 28 日（日南町総合文化センター2F 多目的ホール）



【教育・文化】

● 「にちなんふる里まつり」に連携する出前科学実験教室（継続：H18 年度～）

（医学部 中本准教授／教育委員会との連携）

日南町最大のイベント「にちなんふる里まつり」と連携し、医学部及び生命機能研究センターの専門家が科学実験教室を出前する。子どもを中心とした参加者に医学的知識やものづくりの普及を図り、地域の科学技術を支える人材育成に繋がることを目指す。

【実績報告】

10 月 26 日に開催した「にちなんふる里まつり」に 12 名の専門家が参加し、8 ブースを設置した。「血で光る液体！」では、犯罪捜査で血痕の検出に用いられるルミノール液を作ったり「細胞・遺伝子の観察」では、口の中の粘膜細胞から自分自身の DNA を試験管内で抽出し、実際に目で観察した。

また、「キラキラバルーンスライム」では、ポリビニルアルコールのりとラメのりを用いてキラキラのスライムを作って感触を楽しみ応用してスライム風船を作るなど、ものづくりの楽しさも伝えた。

化学実験教室への参加者数は延べ 212 名であり、平成 25 年度に比べ 11 名増加した。参加者一人ひとりに手厚い指導ができることが理解度や満足度を高めており、この体験が参加者の将来の科学技術、地域産業人材育成の芽となるよう期待している。



● 鳥取大学一日南町連携講座として「にちなん町民大学」を開催（継続：H23 年度～）

様々な分野の町民向け講座を教育委員会が主催し、全 12 回（毎月 1 回）のうち数回、鳥取大学教員に講師としてご講演いただく。身近なことから、専門的な分野まで幅広い知識の宝庫である鳥取大学には、講師派遣を通じて、学ぶ楽しさや大切さを感じてもらおう生涯学習の場として定着させる。

【実績報告】

5月15日に第1回目の講座を開始し、現在第11回までが終了し、計約450名の受講があった。

6月27日に開催した第2回講座では、農学部芳賀准教授に「源流域での洪水発生と流木動態」と題し、源流域の洪水発生メカニズムについて講演いただいた。また、10月17日には、医学部山本教授にお越しいただき、高齢者体験装具を用いた高齢者体験を行った。12月24日には、地域学部榎木教授を講師に「方言生活語彙は地域を映す鏡」と題して、鳥取県内をはじめとする地域の方言について研究事例を紹介していただいた。

講座の内容により受講者の顔ぶれには変化もあるが、毎回受講される方も多く、日南町の生涯教育推進事業の一つとして「にちなん町民大学」が町内に広く定着し、生涯学習の場として機能している。今後も鳥取大学との連携により「にちなん町民大学」を開催したく講師派遣をお願いしたい。



●日南小・中学校「サマー・ウィンタースクール」鳥大生学習支援（継続：H23年度～）

小学校4年生～中学校3年生の希望者の学力向上対策の一つとして、夏期休業中を利用した「サマー・ウィンタースクール」を開催。大学生スタッフを募集し、学習方法や解答までの導き方を指導していただく。今年度から町の主体事業として実施し、学習習慣の確立と主体的学習の定着を目指す。

【実績報告】

今年度も8名の鳥取大学学生に学習支援者として協力いただき、夏季休業中の15日間、サマースクールを実施した。参加者は、小学生41名（小4～6対象）、中学生48名で、対象者の約半数の参加があった。昨年度参加してくれた学生が中心となり今年の参加学生を呼びかけ、学生は、学習指導の方法を工夫しながら熱心に指導にあたってくれた。参加した子どもたちも、年齢が近いこともあり親しみを持ちながら気軽に質問したり教えてもらったりしながら学習に取り組んだ。学生にとっても子どもたちに直接指導をする経験は、その接し方や具体的な指導法について学ぶ良い機会となっている。

ウィンタースクールについては、12月24日、25日の2日間実施した。大学の試験と日程が重なったため調整がうまくいかず、鳥大生の協力を得ることはできなかった。今回は、実施日が少ないことから、小学校は国語、算数、中学校は数学、英語に教科を絞り、たしかめテストを中心にした学習をすすめた。参加者は、小学生18名、中学生24名と例年より少なかったが、1日1教科に絞ることで、児童生徒は集中して学習に取り組んだ。

H27年度は、矢部教授への情報提供と連携を図るとともに永松教授のご紹介により、地域学部武田講師（1年生学級担任）の協力を仰ぎ、鳥大生スタッフ集めにご協力いただけるよう調整を行っている。



【医療・福祉】

●住民の生きがいづくりのためのエコミュージアムワークショップの開発（継続：H24年度～）

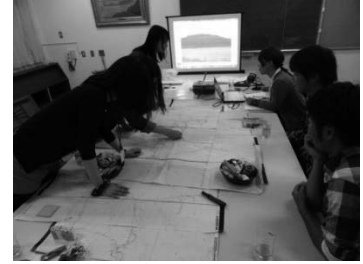
（地域学部 福田教授、筒井准教授、関准教授／大宮まちづくり協議会との連携）

日南町大宮まちづくり協議会との連携により、地域住民の生きがいや誇りの検証を行い、住民の趣味や特技のほか、地域の歴史・文化・自然・食材といった諸資源を包括した「地域まるごと博物館」を目指したワークショップの企画・実施を行う。

【実績報告】

これまで大宮地区では、ウォーキングコースを基盤とするヘルスツーリズム、「食」資源の活用、高齢者を中心とする「食」と「健康」の関連性などについて連携して行ってきた。これまでの成果を活用し、地域住民の生きがいづくり・地域づくりの一つの施策として、住民の趣味・特技のほか地域の歴史、文化、自然といった諸資源を包括した「エコミュージアム」構想の企画とその実現に向けた手法の開発、諸資源の発見・記録を目的として地域住民との協働によって事業を実施した。

事業内容は、大きく分けて「(1) エコミュージアム構想とストーリーマップづくりワークショップ」、
「(2) 地域の生活文化の短編ドキュメンタリー制作」の2件。ワークショップを通じて、大宮のもつ地域資源の住民間の共有が促進された。GPSデジタルカメラという視覚的なICTを用いたエコミュージアム構想の企画・提案は、ワークショップ参加者以外の住民への広報が可能であり、その活用の幅も大きいことが示唆された。



また、高齢者の知識や技を取材したドキュメンタリー映像への反響は大きく、記録しておくべき貴重な地域資源としての認識と保存意欲の高まりが認められた。今後は、今回開発された手法と発見された多様な地域資源にもとづく構想の実現化を図る。

●中山間地における大腸がん検診の課題（継続：H24年度～）

（医学部 渡辺助教／日南病院との連携）

昨年度、日南町の大腸がん検診と日南病院の大腸内視鏡データを分析し、大腸がん検診の啓発チラシとポスターを作成。今年度は、さらに日南病院の大腸内視鏡検査の調査範囲を広げ、また啓発活動の効果を判定し、受診率をさらに上げる工夫をしていくことで、日南町における大腸がん死亡率の減少、医療費の削減を目指す。

【実績報告】

日南町大腸がん検診については、平成26年度の大腸がん検診データ（速報値）と平成20～25年度の大腸がん検診二次精査データを分析した。日南病院の大腸内視鏡検査データ（H23・26）を収集し、平成23～26年に日南病院で行われたすべての大腸内視鏡検査データを分析した。苦痛の少ない内視鏡検査を行う目的で、日南病院の若手医師と看護師を対象に2回の勉強会を開催した。また、昨年度に引き続き、今年度は精密検査をテーマとして啓発チラシ、ポスターを作成した。2月9日には鳥取大学教育研究・事業成果報告会で本事業の25年度成果報告を行った。

今年度、日南町の大腸がん検診受診者数は666名（受診率22.5%）で、25年度より23名（0.8%）増加した。また、精密検査は対象者の約7割がすでに受診している。（2月16日現在）

今後は、今年度作成した啓発チラシ、ポスターを活用し、27年度住民検診案内とともに住民への啓発に取り組む。



●発達障害児の包括的支援ネットワークの構築（新規：H26年度～）

（医学部 前垣教授／福祉保健課、教育委員会、保育園職員で構成される子ども支援連絡会議との連携）

日南町内の保育園・小学校・中学校・教育委員会・福祉保健課で構成されている「日南町子ども支援連絡会議」に鳥取大学の医師、臨床心理士などの専門職が参加しスーパーバイズする。継続的に日南町内の事例の検討を行い、具体的な問題点と解決策を検討し支援の実施と評価の流れを定着させる。

【実績報告】

5月20日には大学と福祉保健課、12月25日には大学及び福祉保健課に保育園・小学校・中学校・教育委員会を加えて、医学部にて現状把握及び意見交換を行った。保・小・中それぞれの現状と現場で抱える具体的な問題点及びその背景について整理し、今後の事業の進め方について打合せを行った。

また、日南町子ども支援連絡会議内において大学側との打合せを振り返り、「何となく」ではなく「具体的に何に」困っているのかをそれぞれが自覚し、機関を越えて町全体の課題として共通認識を図ることが出来たのも成果である。今後は、具体的な事例（医療受診中の児童を含む）をもとに児童の観察や事例検討を通して、支援の方向性の決定や振り返りを行い、学校全体の支援スキルの向上を図るとともに、町としてより質の高い支援システムの構築に努めたい。3月16日に事例検討会を実施する予定にしている。



●シミュレーションを用いた認知症プログラム（継続：H25年度～）

（医学部山本教授／福祉保健課、日南病院、日南福祉会との連携）

平成27年1月末時点で認知症高齢者の高齢者人口に占める割合は約18%を示し、日南町の要支援・要介護認定者の67%が何らかの認知症状を有している。そのような背景の中、認知症ケアにおいて重要なことは、治療と併せて適切なケアを提供することが認知症状進行抑制に大きく影響することより認知症の進行に伴うスタッフの対応力が大きな課題となる。これより日南町の認知症ケアにおいても課題となり得る。その対応として、日南病院、日南福祉会それぞれのスタッフ研修会に本プログラムを組み入れ、高齢者体験から高齢者の全体・生活把握よりスタッフ自ら日頃のケアを確認・改善できる機会となることを期待し、研修会等を行った。

【実績報告】

9月、10月に日南病院スタッフに対し高齢者体験研修会を開催し77名の参加があった。10月には（2回）介護福祉センターあかねの郷にて同研修会を行い、33名のスタッフが参加した。10月には、にちなん町民大学との連携により、地域住民向けの講演を行い37名の参加をいただき、2月には日南小学校で高齢者体験を行い4年生と教職員30名の参加を得て、延べ177名に参加していただいた。

<研修参加者アンケートから一部抜粋>

- ・貴重な体験が出来て良かった。このような障がいを持つことになった時は、すぐに何もあきらめてしまうと思う。ストレスがきつかった。
- ・視野が狭くなって下を向かないと障がい物を見つけづらい。危険のリスクが高くなることがわかった。
- ・一人での行動が難しく、前が見づらいので怖かった。介助者がいるととても心強く感じた。
- ・見えない、聴こえない、動きにくいということがこんなに不安で心細いとは思わなかった。介助者は常にそれらを感じて介助しなければならないと思った。

研修会を実施したそれぞれの機関からは「学んだことをすぐに実践できる内容だった」として好評で

あった。日南病院は来年度もスタッフ研修会に組み入れたい意向が聞かれている。このような体験型研修会は、講義形式と比べ参加者の意識や行動の変容に効果が期待できることから、当初の目的に合致したものとなった。

今後は、日南病院のスタッフに対して、今年度と異なった ADL・IADA 援助内容での高齢者体験研修会を予定している。今後も町より依頼があれば、依頼者・対象者に合わせて対応していく。またこの COC 事業をベースとした内容で、三報社出版社（東京）と電子書籍（動画等）として出版予定で、現在動画サンプルを作成中である。



【生活・環境】

●豊かな環境を守るための不在村地主問題への対策（継続：H24 年度～）

（農学部 片野助教／企画課、農林課、住民課、建設課との連携）

土地や家屋を所有しながら管理を行わず、法的な諸手続も行うことがない不在村所有者問題についての対策を検討し、具体的な政策転換や条例等の整備を目標とする。

【実績報告】

平成 25 年度末に在村者不在村者に対して行った調査データの分析を進め、現状の分析、未来の予測、そしてより具体的な政策的アドバイスを町に対して行うことを目的とした。分析結果の報告書については、町の各課担当者に送付済みであるとともに、調査結果については、WEBSITE 上で公開している。調査の結果から、在村者においては、田、畑、森林（人工林）の順に管理意識が強くなっていることや、不在村者においては、田や家屋はかろうじて管理できているが、畑、森林（人工林）までは手が回らず、特に森林（人工林）までは手が回らないという方が多いことも明らかになっている。

調査結果については、学術的論文として投稿を行い（計3本）、掲載も可能となった。適宜、町の担当職員と共有し情報交換を行っているが、検討委員会を組織し取り組みたいと考えている。

今後については、調査により得られた結果を他県の過疎地域と比較し、さらには国際比較していくことも必要と考えており、最終的には、空き家の管理における費用負担や固定資産税の取り扱いなどについて、新たな規定や条例など政策的な条文レベルまで結びつけたいと考えている。



●日野川流域における水質・生態系調査（新規：H26 年度～）

（地域学部 寶來准教授／住民課との連携）

近年日野川水系の魚や生物が減少していると地元住民や関係機関からの声も多く、その環境変化や要因のメカニズムを明らかにし、河川生態系変化の原因解明と生態系修復計画の立案を目指す。

【実績報告】

H26 年 7 月から H27 年 2 月まで、日野川水系 8 地点、水田 2 地点における河川水、堆積物および周辺に生息している生物種（バッタ、カエル、ヤゴなど）を採取してきた。7 月から 2 月までの河川水中イオン態栄養塩類（ NO_2^- -N[亜硝酸イオン態窒素]、 NO_3^- -N[硝酸イオン態窒素]、 NH_4^+ -N[アンモニウムイオン態窒素]、 PO_4^{3-} -P[リン酸イオン態リン]）その他元素イオン（ Fe^{2+} [2 価鉄イオン]、 Cl^- [塩化物イオン]、 Cr^{6+} [6 価クロムイオン]、 SO_4^{2-} [硫酸イオン]、 Zn^{2+} [亜鉛イオン]）濃度を測定した。

事業所排水の栄養塩類およびその他元素イオン濃度は他地点よりも相対的に高値であったことが示された。また、排水が流入する事業所に最も近い河川である銭神川下流は、事業所排水と同様の変動パターンがみられた。銭神川下流域は事業所排水の影響を受けていることが示唆された。

今後も毎月のモニタリングを実施し、日野川流域環境変化の原因を究明したい。

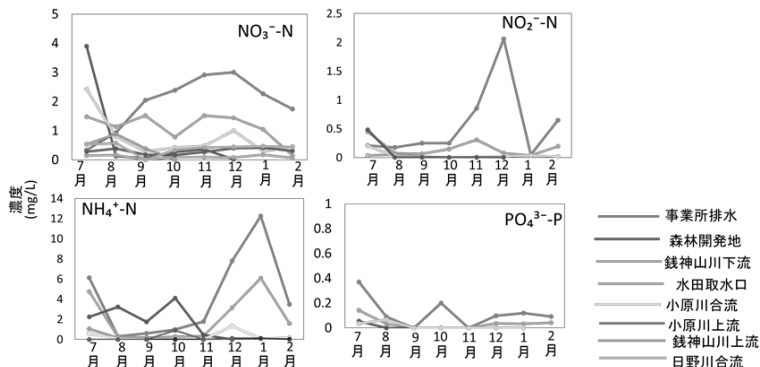


図1 日野川水系における窒素形態の季節変動



【産業】

●日南町森林活用プロジェクト会議（継続：H25年度～）

（鳥取大学教員が専門委員として参加）

日南町の森林資源の有効活用と林業振興による森林環境の適正な管理と保全、地域雇用の創出を目指して、平成25年度に「日南町森林活用プロジェクトチーム」を立ち上げた。

「FSC 森林認証」や「J-VER（カーボンクレジット）」などについて、まだまだ認知度も低くその活用について課題も山積している。日南町産材の販路拡大、認証材を使った木工品産業開発、町外からの視察に対応するためのモデルフォレストの選定など「森林、林業のまち」としての更なる振興を目指す。

【実績報告】

7月31日に今年度第1回目の会議を開催、11月5日に第2回目の会議（専門員によるメール会議）を行った。3月中に第3回会議を予定。今年度の総括及び次年度以降の取り組みについて協議する予定。各専門委員それぞれの研究内容は下記のとおり。

地）永松教授：日南町地域産材の流通と課題

農）日置教授：出立山見本林コースに関する具体案の設計

農）藤本教授：日南町有林産スギ材の木材性質変動予測手法の開発

農）片野教授：在村者不在村者の意志を確認する試み

本プロジェクトは、J-VER、FSC等、日南町の新たな森林資源をどのように町の活性化へつなげていくかが当初のスタートであった。平成25年度にスタートし、2年が経過したが、現状としては各委員からの活動状況の報告、日南町の林業における問題点の洗いだしなど、明確な目標は定まっておらず、プロジェクトの目標について意思統一を図る段階にある。課題抽出後には「日南町森林林業連絡会（仮）」などの位置づけで行政、民間、大学の情報を共有し、新規事業の提案に対し、大学側は研究課題のやりとり、学生教育の連携の場に発展させたい。

平成27年度以降、カーボン・オフセット、FSC 森林認証について、国は今まで以上の予算措置を行っている。2020年東京オリンピックで



の認証材の利用、FSC 認証材輸出、中心市街地構想におけるオフセット商品の開発等に向けて新たな切り口の提案等を継続的に行っていく。

【観 光】

●地域資源を活かしたエコツーリズム振興のための人材養成（継続：H25 年度～）

（農学部 日置教授／日南町企画課との連携）

昨年度、本事業の成果として誕生した 9 名の「日南町観光ガイド」が、引き続き観光ガイド養成講座と連動する形で実際に試行ツアーガイドの実地指導を行う。企画・参加者募集・現地でのガイド等の一連の業務が行える人材の養成を目指す。

【実績報告】

今年度は全 9 回のプログラムを計画し、現在までで 8 回が終了した。6 月 10 日に第 1 回目のガイド養成講座及び開校式を行い、最終となる第 9 回は 3 月 17 日に日南町観光ガイド養成講座終了式及び証書授与式を予定している。

第 2 回は船通山登山ガイドの実技講座、第 3 回は鹿野町から鹿野まちなみ観光ガイド「ぷらっとしかのガイドの会」会長を講師に実践例などの講座を開催。第 4 回はツアー企画講座を実施し、受講者自らがツアーの企画案を作成した。第 5 回の冬山座学を受け、第 6 回は花見山周辺スノーシューの実践を行った。第 7 回は日野郡交流協連携のたたら探訪とガイド視察研修を実施。第 8 回は特産品の勉強会とガイドの模擬演習を行った。

平成 25 年度からの計 2 年間で合計 13 名の観光ガイドが誕生する見込みであり、受講者たちは実践経験を積みガイドとしての人材養成を行うことができた。町外から多数訪れる視察研修をはじめ、観光客などの案内に積極的に関わっている。



【その他】

●オーダーメイド型インターンシップによる学生の受け入れ（継続：H25 年度～全学部と全庁の連携）

【実績報告】

9 月 29 日から 10 月 3 日の 5 日間、将来行政職を目指す 6 名の学生が町内にてインターンシップを行った。日南町全職員からインターンシップ希望業務の取りまとめ、最終的に 3 件をオーダー。9 月 11 日、日南町と学生双方にメリットのある内容となるよう日南町職員と学生がマッチング会議を行ったうえで実施した。

①町の課題学習

「日南町中心地域整備構想」や「第 5 次総合計画（後期計画）」などの実施について、町の事業担当者から説明を受け、現地視察を行うことで町の現状と課題の一部を理解した。社会におけるルールや行政の仕事を感じ、行政運営に必要なスキルや能力を学ぶ場とするために計画。



②町営バス乗降調査

日南町営バスに乗車（全 6 路線全便）し、乗車人数や乗車場所を記録し乗車密度を算出した。併せて、車内やバス停の様子などを記録し、危険箇所や乗降者のマナー、運転手の運転マナーなどについての調査・分析も行った。



調査結果をもとに学生が「利用しやすいバス運行対策」についての事業提案を作成し、公共交通のあり方について検討した。

③ワークショップ「やんれ♪日南！！」

誰でも自由に参加し語り合い、町の将来を描く住民参画ワークショップ「やんれ♪日南！」に参加し、学生らしい柔軟な発想でまちづくりのためのアイデアや施策を住民と一緒に考えた。地域住民と直接関わることで、教科書では学べない現場の声や実態をつかみ取り、地域住民の目的意識も確認した。



【鳥大協定 四町(日南、南部、大山、琴浦)連携】

●四町（日南町・南部町・大山町・琴浦町）連携事業

（鳥取大学へ職員派遣を実施している県内4町が連携した取り組み）

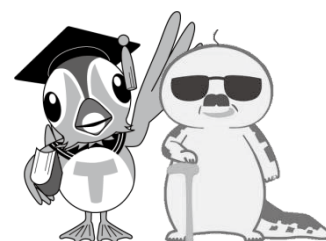
日南町、南部町、大山町、琴浦町の4町は鳥取大学へ職員の研修派遣を実施しており、お互いの情報を共有している。各町が違った特色を持つ一方で、過疎高齢化といった共通の課題も多く抱えていることから、観光政策や地域活性化といった諸課題の解決に向けて連携事業に取り組んでいる。

【実績報告】

H26年9月26日、27日に行われた「とっとり産業フェスティバル」に各町の連携ポスターや特産品（景品）などを提供したほか、その他イベントでも各町のPRに努めた。

H26年10月11日～13日に行われた鳥取大学風紋祭では、各町の特産品を使った「炊き込みご飯」を作り販売。（日南：新米、琴浦：あごダシ、あごちくわ、大山：大山ハーブ鶏、南部：猪肉、漬物）好評により250食を1日で完売、約65,000円の売り上げがあった。併せて、風紋祭に出店した料理サークルにも各町から食材を提供した。

また、H27年2月9日から27日までの間、鳥取大学広報センターにて「4タウンストーリー」と題して、各町の観光スポットや特産品などを掲載するとともに、大学と町の連携により行われた学生たちの様々な研究を紹介するパネル展示を行うことで、町の魅力の発信と学生の今後の研究フィールドとしての可能性を紹介し、学生を地域に呼び込むきっかけ作りとした。



教育・文化

「にちなんふる里まつり」に連携する出前科学実験教室 2014・・・36
医学部准教授 中本幸子

鳥取大学・日南町連携講座「にちなん町民大学」・・・41
日南町教育委員会

日南小・中学校「サマー・ウィンタースクール」・・・44
日南町教育委員会

「にちなんふる里まつり」に連携する出前科学実験教室2014

鳥取大学医学部 中本幸子、鈴木孝夫、藤原伸一、仲宗根眞恵
 鳥取大学技術部 三谷秀明、森野慎一、足立昭子、堀江享史
 鳥取大学産学・地域連携推進機 構田中俊行
 鳥取大学生命機能研究支援センター 檜垣克美
 鳥取大学医学部元教員 井元敏明、市川修

1. 平成26年度事業報告

筆者らは、日南町で毎年開催される「にちなんふる里まつり」に連携して、平成19年度から出前科学実験教室を開催し、小学生を中心に多くの町民の方に科学の楽しさを伝えて来ている。今回は、平成26年10月26日（日）、日南町役場を会場に、遺伝子や細胞の観察、液体のふしぎな現象、放射線に関する測定や味覚のふしぎ等に関する科学実験を中心に8講座を実施した。また、この事業では科学実験教室に対するアンケート調査を実施している。これらの結果は今後の活動に生かしていく。

(1) 科学実験教室の講座題目と内容

今回実施した科学実験教室の講座題目、講師名と概要は表1の通りである。

表1 科学実験講座と実施概要

講座題目	講師	実施概要
血で光る液体	田中	犯罪捜査で血痕の検出に使われるルミノール液を作って、試してみよう！
光と色 あらっ？不思議	中本	偏光板を2枚張り合わせた中に、セロファンを詰め込むとあらっ？不思議。夢のような光のアート。光が偏光板を通るときの仕組みを一緒に考えます。
さいころの目の 出かたを調べて みよう	藤原	さいころの目(1, 2, 3, 4, 5, 6)は、どの目も「同じ確率」で出るのでしょうか？これを①本物のさいころを振って調べてみよう。②パソコンを使って調べてみよう。
細胞・遺伝子を 観察しよう	檜垣	体の基本単位である細胞について、動物組織切片と培養細胞を顕微鏡下で観察します。また、口の中の粘膜細胞から自分自身のDNAを試験管内で抽出し、実際に目で観察します。
放射線をみる、 はかる	鈴木 三谷 堀江	私たちの生活において、放射線の利用は必要不可欠なものです。観察・測定を通して放射線を身近なものとして感じてください。 ①霧箱を作成し、鉱物標本の鉱石および三朝温泉中に含まれるラドンガスを用いて自然放射線の飛跡を観察する。 ②測定器（GM計数管）を用いて身の回り（食物など）の自然放射線を測定する。

キラキラバルーンスライム	森野 足立	特殊な PVA のりとラメのりを用いてキラキラしたスライムを作って手で感触を楽しむ。また、応用編として作製したスライムにストローをさして口にくわえ、息を吹き込んでスライム風船を作って楽しむ。
味覚のふしぎ体験 - すっぱいレモンがあまーいレモンに変身!?	井元	あるものをなめておくと、すっぱいはずのレモンがどんどん食べられるミラクルな体験をします。
反応時間を計ってみよう!	市川	いろいろな形の図形が光るのを見て、見えたらずぐにボタンを押すと、光ってから押すまでに約 0.2 秒かかります。これを反応時間といいます。反応時間は刺激のパターンや体調によっても変化します。

(2) 各講座の実施状況

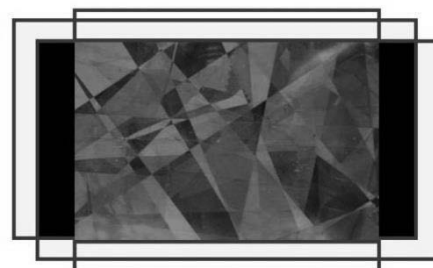
・血で光る液体

21名の子どもたちが、犯罪捜査で血痕の検出に使われるルミノール液（「血で光る液体」と呼ぶ）をつくる化学実験を行った。実際に希釈したヒト血液の少量を付着させたろ紙片に、作成した液体をかけて、暗箱内で青白く光る様子を観察した。ヒト血液の他に、イヌ血液、魚の血液でも青白く光ることを観察した。ルミノール粉末は電子天秤で0.05g量り取り、それを水酸化ナトリウム水溶液50mlにマグネティックスターラを使って溶かし、外用消毒薬のオキシドールとマイクロピペットを使い、2mlを加えると、「血で光る液体」が出来上がる。



・光と色あらっ？不思議

廃物の透明なプラスチック板にセロテープを貼っていきます。縦、横、斜めに貼っていきます。重なった枚数も様々に重ねて貼ります。「めちゃくちゃに貼ったよ??」「これでいいの??」「これどうするの?」楽しそうです。



不思議なシート（偏光板）を重ねます。まず透かして見えることを確認します。次に、重ね方を変えると真っ黒で何も見えません。ここからです。この間に挟んでみると、「エッ?」、「キレイ!」。「どうして?」。

偏光板の間に挟んだセロテープの層を光が通過する仕組みと色が見える仕組みを学びました。

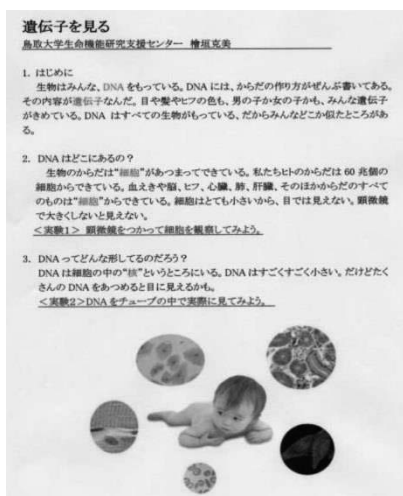
・さいころの目の出かたを調べてみよう

参加者は、さいころを10回振って1~6の目がそれぞれ何回出たかを記録し、その目の出かたを確認した。次に、コンピュータ上に再現したさいころを使って、1,000回以上さいころを振り、目の出かたを調べた。これらの実験を通して、参加者は、さいころをたくさん振れば振るほど、1~6の目の出かたがほぼ同じになることを確認した。また、参加者はコンピュータシミュレーションの一端に触れ、その意義を学んだ。



・細胞・遺伝子を観察しよう

昨年までは頬の粘膜細胞からDNAの抽出実験では、試験管内で抽出したDNAを観察する内容で終了でしたが、本年度は抽出した自分のDNAで“DNAペンダント”を作製し、



配布資料(左図)

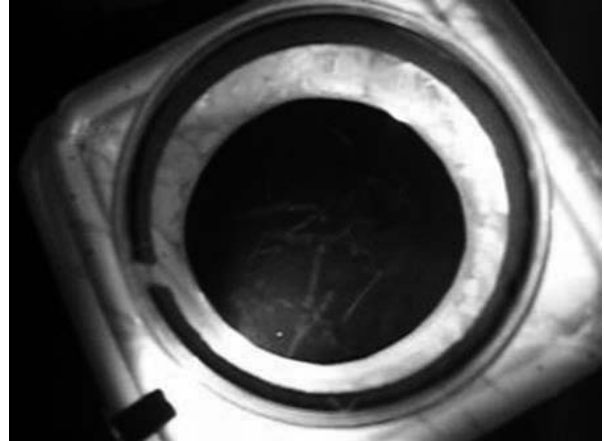
実験の様子(下図)



持ち帰り頂きました。そのためか、小さい子どもからご年配の方に至るまで、また、以前DNAしたことがある、とおっしゃった方々にも再度実験に参加して頂く事ができました。

・放射線をみる、はかる

鉱物標本の鉱石、および三朝温泉水中に含まれるラドンガスを線源として、ウイルソン霧箱による放射線の飛跡を観察、また測定器 (GM 計数管) を用いて昆布、肥料など身のまわりの放射線 (カリウム40) を測定し、環境中にも体に影響のない自然放射線が存在することを体得させた。



左：GM計数管による放射線の測定およびウイルソン霧箱による放射線の飛跡の観察風景
右：三朝温泉水に含まれるラドンガスによる α 線の飛跡

・キラキラバルーンスライム

出前科学実験教室の参加者は小学生がメインであることから、子ども達が楽しめる講座にしようと技術部の担当者間で議論を重ねた結果、今年度は通常のスライム作りに工夫を凝らして「キラキラバルーンスライム」というブースを設けることにした。通常、スライム作製には主な材料としてPVAのり（洗濯のり）を用いるが、本講座では特殊な配合のPVAのりと色の着いたラメ入りののりを用いて、キラキラしたスライムを作製して視覚的に楽しむ事と、作製したスライムにストローを挿して息を吹きかけ風船にして体感的に楽しむという2つのコンセプトを持ってイベントに臨んだ。当日は、例年の参加者数



から計算して十分な量の必要材料を準備していたが、終了時間を過ぎても参加者が途切れることがなく、最終的には材料がほぼ底をつくほどの大盛況であった。このような状況からも多くの方に楽しんでもらうことが出来たのではないかと思う。

上：キラキラバルーンスライム、右：味覚の不思議の風景

・味覚のふしぎ体験

～すっぱいレモンがあまーいレモンに大変身！？～

今回は「すっぱいレモンがあまーいレモンに大変身」をメインテーマに据えて、味覚革命タンパク質ミラクリンのタブレットを用いてそのミラクルぶりを体験してもらった。用意したレモン10個分のスライス



が足りなくなるほど、子どもたちみんなが「甘いレモンをほおぼっていたのが印象的だった。

この体験は食経験が豊富な大人の方がよりその不思議さを実感できるようで、親子ともども楽しめるが、ミラクルフルーツの抽出物をタブレット状に成型したものをを用いるのが難点かもしれない。動物と植物との不思議な関わりまで実感するためには、植物の実や葉っぱそのものをを用いることが理想的なので、今後の課題としたい。

・反応時間を計ってみよう！

画面に刺激図形が現れたらすぐにキーを押す。



まだまだ子供達には負けられません！



(3) アンケート調査結果

この出前科学実験教室の参加者実数は、各実験講座の参加者数から重複者を除き、算出したところ、71名でした。アンケート調査より、「楽しかった」97%、また、「わかりやすかった」が93%と高く、好評であったことがわかる。この講座は子供達の作る楽しさと科学への興味・関心を高めるうえでバランスのとれた講座内容になっていると考えます。また、子供から大人まで幅広い参加者に科学とものづくりの楽しさを体験してもらえたと評価している。今後やってみみたいことについての意見には、

「顕微鏡で色々なものを見たい」、「細胞やDNAについて」、あるいは「紫外線、色の変わり方について」。「器具を使うことがしたい」等があげられています。好評だったスライムでは、「もっと大きなスライムが造りたい」と言う子供たちの素直な声が聞かれました。こうした子供たちの声を大切にしていればより良い出前科学実験講座を目指したい。



2. 今後の展望

この出前科学実験講座は8回目となり、小学生だった子供達は中学生あるいは高校生になっています。その子供達の中には毎年きてくれる子供達があります。また、年を追うごとに専門的な質問が寄せられる時、この教室の定着と日南町の子供達の自然、科学、ものづくりに対する大きな関心や高い意識が生まれてきていることを感じます。子供達の声や新しい科学・技術を折り込んだ講座内容を目指して事業を継続して行きたい。

鳥取大学・日南町連携講座「にちなん町民大学」

日南町教育委員会

1. 事業紹介

平成 23 年度にスタートした「にちなん町民大学」も 4 年目を迎え、今年度は平成 26 年 5 月から翌年 3 月までの計 11 回行いました。（全 12 回計画のうち、1 回は雨天により中止）

医療・自然科学・文化・歴史など毎回テーマを設け、2 月末現在（第 11 回講座終了時）までに 451 名の皆さまに受講していただきました。「にちなん町民大学」の名前も町民にも浸透し、日南町における生涯教育の一環として定着しています。

2. 事業を実施して

講座の内容によって、出席される方の顔ぶれには変化もありますが、毎回受講される方も多く、日南町の生涯教育推進事業の一つとして「にちなん町民大学」が町内に広く定着し、学習環境の提供の場として機能していることがうかがえます。

また、興味のある講座を受講していただいたことをきっかけに「にちなん町民大学」に興味を持ってもらい、次回以降の講座の参加につながるケースもあるように担当者として感じています。6 月 27 日に開催した第 2 回講座では、農学部芳賀准教授に「源流域での洪水発生と流木動態」と題し、源流域の洪水発生メカニズムについて講演いただきました。また、10 月 17 日には、医学部山本教授にお越しいただき、高齢者体験装具を用いた高齢者体験を行い、12 月 24 日には、地域学部榎木教授を講師に「方言生活語彙は地域を映す鏡」と題して、鳥取県内をはじめとする地域の方言について研究事例を紹介していただきました。


我々に身近なことから、専門的な分野まで幅広い知識の宝庫である鳥取大学には、今後とも「にちなん町民大学」への講師派遣を通じて、積極的な地域貢献事業を行っていただきますようお願い申し上げますとともに、学ぶ楽しさや大切さを感じてもらおう生涯学習の場として「にちなん町民大学」を引き続き開講してまいりたいと考えていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

平成26年第9回 日南町生涯学習講座 にちなん町民大学

方言生活語彙は地域を映す鏡

日 時：平成26年12月26日（金）18：30～20：00
会 場：日南町役場1F 防災会議室
参加費：無 料

【講演講師】



鳥取大学 地域学部 地域文化学科
のりみ けんじ 氏
教授 榎木 久兼 氏

専門分野：日本語、歴史、言語、漢字音
主な研究：日本語音韻史
日本漢字音史
日本語文法史

【概 要】

言語は話す人の世界観と深く関わります。地域の日常生活で用いられる方言生活語彙は、地域の人々が自らの生活世界をどのように認識しているかを映します。

各地の方言についての研究事例を紹介し、方言生活語彙の姿を明らかにすることの意義についてお話しします。

【主 催】

日南町教育委員会事務局 社会教育室

Tel 0859-82-1118 / Fax 0859-82-0116

3. 平成26年度「にちなん町民大学」講座実施内容

日 時	テ ー マ	講 師	役 職	受講者数
5月15日 (木)	鳥取県の気候変動	北脇 安正	鳥取地方気象台 調査官	21
6月27日 (金)	美しいものは怖い ～源流域での洪水発生と流木動態～	芳賀 弘和	鳥取大学農学部 生物資源学科 准教授	23
7月21日 (月)	～フィールドにでかけよう～ 化石採集(日南町新屋地内)	徳田 悠希	鳥取県立博物館 主任学芸員	56
8月1日 (金)	～フィールドにでかけよう～ 天体観測(旧福栄小学校)	池口 邦雄 本庄 優	米子星の会	雨天 中止
8月29日 (金)	星野富弘の詩画の源流	聖生 清重	富弘美術館 館長	157
9月11日 (木)	よりよい睡眠のために	廣江 ゆう	米子養和会 医局長	24
10月17日 (金)	介護予防 ～加齢に伴う体の変化を知ろう!～	山本 美輪	鳥取大学医学部 保健学科 教授	45
11月7日 (金)	安定的なエネルギー・電力需給への 取り組みについて ～みんなで考えよう!電力のこと～	若山 慎史	鳥取県生活環境部環境立 県推進課エネルギーシフ ト戦略室 課長補佐	35
		小林 弘明	中国電力株式会社 鳥取支社 広報担当マネージャー	
12月24日 (水)	方言生活語彙は地域を映す鏡	榎木 久薫	鳥取大学地域学部 地域文化学科 教授	24
1月30日 (金)	鳥取県西部の雇用の動向	長谷川和孝	ハローワーク米子 所長	19
2月25日 (水)	メタボ・ロコモ・認知症予防改善 でいきいき健康ライフ	吉田 俊明	新見市健康増進施設 げんき広場にいみ施設長	47
3月25日 (水)	鳥取県の民話・わらべ歌	酒井 董美	山陰民俗学会 会長	未
受 講 者 数 合 計				451

4. 「にちなん町民大学」講座開催の様子

【第2回にちなん町民大学】

日 時：平成26年6月27日（金）18：30～

演 題：「美しいものは怖い ～源流域での洪水発生と流木動態～」

講 師：鳥取大学農学部生物資源学科准教授 芳賀 弘和 氏



【第7回にちなん町民大学】

日 時：平成26年10月17日（金）18：30～

演 題：「介護予防 ～加齢に伴う体の変化を知ろう！～」

講 師：鳥取大学医学部保健学科教授 山本 美輪 氏



【第9回にちなん町民大学】

日 時：平成26年12月24日（水）18：00～

演 題：「方言生活語彙は地域を映す鏡」

講 師：鳥取大学地域学部地域文化学科教授 榎木 久薫 氏



日南小・中学校「サマー・ウィンタースクール」

日南町教育委員会

事業の概要

小学校4年生～中学校3年生の希望者の学力向上対策の一つとして、夏期休業中を利用した「サマー・ウィンタースクール」を開催します。鳥取大学の学生スタッフを募集し、学習方法や解答までの導き方を指導していただきます。鳥取大学地域学部矢部敏昭教授に支援いただき、今年度から町の主体事業として実施し、学習習慣の確立と主体的学習の定着を目指します。



実施期間及び日程

サマースクール : 平成26年7月22日(火)～8月21日(木)のうち、計15日間

ウィンタースクール : 平成26年12月24日(水)、12月25日(木) 計2日間

事業の成果

8名の鳥取大学学生に学習支援者として協力いただき、夏季休業中の15日間、サマースクールを実施しました。参加者は、小学生41名(小4～6対象)、中学生48名で、対象者の約半数の参加がありました。昨年度参加してくれた学生が中心となり、今年の参加学生を呼びかけ、学生は学習指導の方法を工夫しながら熱心に指導にあたってくれました。参加した子どもたちも、年齢が近いこともあり親しみをもちながら気軽に質問したり教えてもらったりしながら学習に取り組みました。学生にとっても子どもたちに直接指導をする経験は、その接し方や具体的な指導法について学ぶ良い機会となっています。

ウィンタースクールは、12月24日、25日の2日間実施しました。大学の試験と日程が重なったため調整がうまくいかず、鳥大生の協力を得ることはできませんでした。今回は、実施日が少ないことから、小学校は国語、算数、中学校は数学、英語に教科を絞り、たしかめテストを中心にした学習を進め、参加者は小学生18名、中学生24名と例年より少なかったですが、1日1教科に絞ることで児童生徒は集中して学習に取り組むことができたようです。

2014 サマースクール in 日南町
ウィンタースクール in 日南町

【大学生・院生スタッフ募集!!】

日南町では、小・中学生を対象に夏休みの宿題を中心に予習や復習といった学習習慣の確立や、自学自習の学習態度を育てることを目的に「2014サマースクール」を実施します。
現在、スタッフとして活動していただける学生を募集しています。
子どもたちとのふれあいを通じて、学生の皆さんの教育実習体験の参考になればと考えています。子どもたちも皆さんの指導やアドバイスを楽しみにしていますので、ぜひご参加ください。

【スケジュール】

① 7月22日(火)	～ 7月24日(木)	午後のみ 3日間
② 7月28日(月)	～ 7月29日(火)	
③ 7月31日(木)	～ 8月1日(金)	4日間
④ 8月4日(月)	～ 8月7日(木)	4日間
⑤ 8月18日(月)	～ 8月21日(木)	4日間
		合計 15日間

いずれも、8:30～16:30までの予定です。

【募集人数】
各日程とも3名程度(調整させていただく場合があります)。

【募集期間】
～ 7月15日(火)まで

【費用】
宿泊、交通費は全額支給します。
尚給600円(1日7時間程度)

【申込方法】
電話、またはメールにより①スタッフ申込者氏名、
②年齢、③住所、④連絡先(電話番号及びメールアドレス)、⑤学部学科をお知らせ下さい。

【申込先・問合せ先】
日南町教育委員会事務局 担当 橋本
TEL 0859-82-1118
MAIL hashimoto1@town.nichinan.lg.jp

主催：日南町教育委員会 後援：鳥取大学

参加児童・生徒、保護者、スタッフ学生の感想（一部抜粋）

（参加児童・生徒の感想）

- ・目当ての「苦手なところを得意にする」が守れてよかったです。また参加したいです。
- ・家で分からないところを教えてもらったので、わかるようになりました。
- ・サマースクールに参加してよかったことは、分からないときに教えてもらって分かるようになったことです。
- ・分からないことがたくさんあったけど、こまったら大学生が分かりやすく教えてくださって、とてもよく分かったし、じぶんでもコツをつかんでどんどんできるようになってうれしかったです。
- ・サマースクールに参加して、目標を立てたときに「苦手なところをできるようになる」と書いていたので、鳥大の人がきてくださった時に分からないところを教えてもらったおかげでできるようになりました。



（保護者の感想）

- ・初めてのサマースクールであまり行きたくなかったみたいだけど、やさしい先生方に教えてもらって、分かりやすくて本当に勉強になったね。よくがんばったね。
- ・サマースクールでは分からないことはていねいに教えてもらって分かりやすかったし、集中してできてよかったと喜んでいました。ありがとうございます。
- ・大学生の方などと一緒に勉強できて楽しかったようでした。分からないところを教えてもらったりお話をしたりでよかったようです。ありがとうございます。
- ・サマースクールに自分からいきたいと言って行ったのががんばりました。教えてもらえる機会だったので、もっと復習にも取り組めばよかったですね。
- ・自主的に学習に取り組み、分からないところを集中して教えてもらえて、本人の意欲向上につながった。ていねいな指導に感謝します。



（スタッフ学生の感想）

- ・このようなことは初めての経験で最初は不安が多くありました。しかし、日を重ねるごとに子どもたちのことが見えてくるようになり、少しでも打ち解けられた部分があると感じています。勉強を教える難しさや子どもとの接し方の大変さも学びました。本当に今回は色々な経験ができて良かったです！機会があればまた友達と参加しようと考えていますのでよろしくお願いします！子ども（特に中学生）には、自分の人生を後悔しないようにしっかり将来を考えて生活してほしいということをお伝え頂けると幸いです。本当にありがとうございました！



サマースクール参加者結果一覧

学校	学年・組	参加者数	参加延人数	参加率	感想文提出	回数率
小学校	4年生	18	119	69.2	12	66.7
	5年生	11	71	40.7	10	90.9
	6年生	12	83	46.2	10	83.3
	計	41	273	51.9	32	78.0
中学校	1年1組	12	73	75.0	9	50.0
	1年2組	6	67	35.3		
	2年1組	8	51	38.1	8	57.1
	2年2組	6	76	30.0		
	3年1組	7	38	38.9	1	6.3
	3年2組	9	46	47.1		
	計	48	351	43.2	18	37.5
小・中計		89	624	46.8	50	56.2

ウィンタースクール参加者結果一覧

学校	学年・組	参加者数	参加延人数	参加率
小学校	4年生	5	7	19.2
	5年生	7	11	25.9
	6年生	6	7	23.1
	計	18	25	23.7
中学校	1年1組	6	10	37.5
	1年2組	6	11	35.3
	2年1組	5	8	16.1
	2年2組	5	9	25.0
	3年1組	2	4	11.1
	3年2組	2	4	10.5
	計	26	46	23.4
小・中計		44	71	23.5

住民の生きがいをづくりのための

エコミュージアムワークショップの開発・・・・・・・・・・ 47
地域学部教授 福田恵子、准教授 関 耕二、准教授 筒井一伸

中山間地における大腸がん検診の課題・・・・・・・・・・ 54
医学部特任助教 渡邊ありさ

発達障害児の包括的支援ネットワークの構築・・・・・・・・・・ 59
医学部教授 前垣義弘

シミュレーションを用いた認知症教育プログラム・・・・・・・・・・ 64
医学部教授 山本美輪

住民の生きがいくりのためのエコミュージアムワークショップの開発

鳥取大学地域学部 地域教育学科 福田恵子・関耕二
地域政策学科 筒井一伸

1. 平成 26 年度事業の概要

これまで日南町大宮地区では、大宮まちづくり協議会を中心にウォーキングコースを基盤とするヘルスツーリズム、「食」資源の活用、高齢者を中心とする「食」と「健康」の関連性などについて鳥取大学と連携して行ってきた。本事業では、これまでの成果を活用し、地区住民の生きがいくり・地域づくりの一つの施策として、住民の趣味・特技のほか、地域の歴史、文化、自然といった諸資源を包括した「エコミュージアム」構想の企画とその実現に向けた手法の開発、諸資源の発見・記録を目的として行った。事業の実2施にあたっては、地区住民との協働によって以下の3つの活動を柱として進めた。

- (1) エコミュージアム構想とストーリーマップづくりワークショップ(担当:筒井一伸)
- (2) 「地域の生活文化」の短編ドキュメンタリー映像の制作(担当:福田恵子, 関耕二)
- (3) 上記事業の成果を統合した大宮まちづくり協議会との意見交換会と報告書作成(別途刊行予定)

2. エコミュージアム構想とストーリーマップづくりワークショップ

大宮地区ではヘルスツーリズムなどテーマを限定したウォーキングコースづくりや、地域の魅力ある場所探し、集落食堂構想をはじめとする場所の魅力化などを行ってきた。今年度は、世代別・属性別の小規模なワークショップ(WS)を複数回実施して、ストーリー性のある大宮地区めぐりのルートを開発を行い、それを活用したエコミュージアム構想を企画・提案を行った。今年度行ったWSの概要は以下の通りである。

(1) 女子会ワークショップ—家族で一緒に楽しめる大宮にしよう

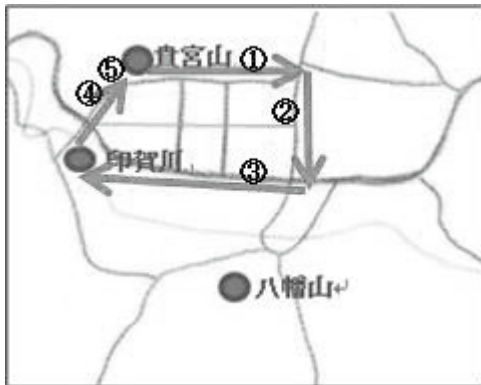
実施日:2014年9月21日(日) 参加者:3名・ファシリテーター:3名
実施場所:鳥取大学日南町地域活性化教育研究センター(旧大宮小学校)

このワークショップでは家族みんなで訪れてもらえる大宮にするために、昔どんな所で遊んでいたのか、現在お孫さん(もしくは自分のお子さん)と一緒にどんな所に遊びに行くのか、そこから課題を見つけていき、外部の人に訪れてもらえるような部分を提案した。

その結果、大宮は自然が豊かな町だということに気付き、それと同時に整備がされていないところが多く、その自然が活かされていないもったいないと感じた。WSの中で、「外での遊び方を知らない子どもが多い」「遊び方を教えてくれる大人がいない」という意見があり、自然での遊び方を教えてくれる人の存在も必要なのではないかと感じた。それらを踏まえて、大宮で自然を満喫するツアー『みんなの夏休み～おなかも心も大満足～』を企画提案した。



写真 ワークショップの様子



＜緑コースの見所＞

- ① 普音寺
- ② 田んぼ道
- ③ 並木道
- ④ 楽楽福神社
- ⑤ トトロに会える

図 「みんなの夏休み～おなかも心も大満足～」の緑コース

(2) むらの料理人ワークショップ—大宮の味をもってピクニック

実施日：2014年9月21日（日） 参加者：3名・ファシリテーター：2名

実施場所：鳥取大学日南町地域活性化教育研究センター（旧大宮小学校）

このワークショップでは大宮で料理が上手な方からお話を聞き、大宮でピクニックをするならどのような場所がよいのか、またそういったときに、大宮の食べ物でどのようなお弁当がつけられるのかを季節ごとで考える。さらに昨年のWSでの集落食堂とも結び付けられないかを考えた。季節ごとのお弁当のモデルメニューを考えた上で、適したピクニックコースを開発して、「お手軽ピクニック—孫とピクニック」、「お手軽ピクニック—青空ティータイム」、「星空ピクニック—大宮ビアガーデン」、「プチ登山ピクニック—汗を流してリフレッシュ」をルート企画した。



図 ルート例：「プチ登山ピクニック—汗を流してリフレッシュ」コース

(3) とても若い世代ワークショップ—BKB大宮

実施日：2014年9月21日（日） 参加者：4名・ファシリテーター：2名

実施場所：鳥取大学日南町地域活性化教育研究センター（旧大宮小学校）

このワークショップでは大宮のワカモノと学生が写真を撮り、話し合う中で大宮の様々な魅力を見つけ、そこにあるストーリーを散歩コースとしてつなげる。その散歩コースを利用した地域まるごと博物館について考えていくことを目的とした。このワークショップの中で分かったストーリーというのは、やはり参加者の皆さんの“思い出”であるということに至った。その場所、その場所に皆さんそれぞれの思い出があり、その中には共通するものや学年、世代の中で違うものなど様々なストーリーになっている。また、その今回出たストーリーの中には、その場所に行ったからこそ思い出されたものや、他の人と話したことでよみがえってきたもの、世代間での違いからの新しい発見もあった。それを他の大宮小学校卒業生にも感じてほしいと思う。今回のストーリーというのは、散歩コースを歩く人、メンバーによってすべて異なり、数えきれないほどのストーリーが生まれるということが、この散歩コースの魅力なのではないだろうか。それらをまとめ、この散歩コースの名前を「学校からの帰り道 —大宮小学校の思い出をふりかえりながら—」とした。

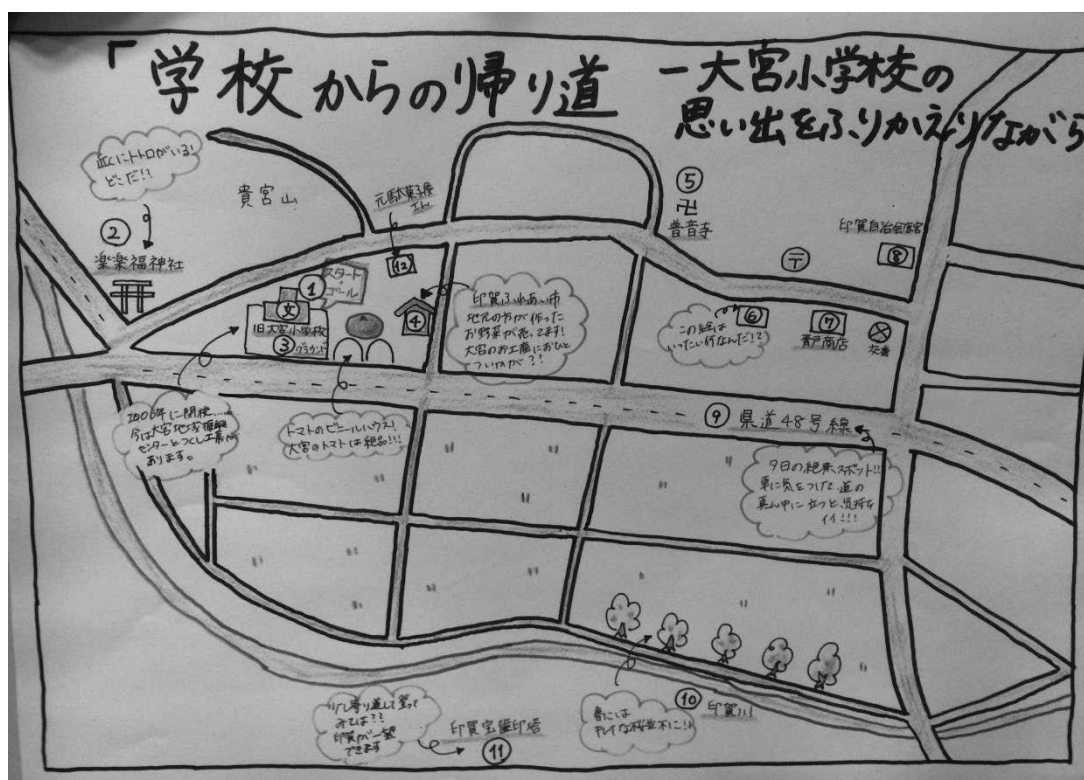


図 ルート例：「学校からの帰り道—大宮小学校の思い出をふりかえりながら—」

(4) ちょっと若い世代ワークショップ—Next (ネクスト) おおみや

実施日：2014年9月21日 (日) 参加者：6名・ファシリテーター：2名

実施場所：鳥取大学日南町地域活性化教育研究センター (旧大宮小学校)

このワークショップのテーマは「地域の近未来を担う人たちと学生が地域の将来を考える」であり、大宮の40, 50歳代を対象に、地域を担う次世代としての認識を持ち、仲間と意見を共有する場を設けることを目的とした。「Next (ネクスト) おおみや」という名前は、大宮の次世代を担う人が集うということで、ネクスト (次) をおおみやの頭につけて命名した。今回は40歳, 50歳代の方々を対象にしたワークショップであったが、大宮への思いをこれだけ持っている方がここにいるということ、そして知る場所がないだけであって、すべて住民の方々がこのような思いを持った大宮を担う人材であるということは、想像が容易である。しかし、このワークショップにおいて同時に、それぞれがそれぞれに思いを持っているだけでは、せっかくの人材が、大宮を担う材料、つまり真の人材として成り立たないということが浮き彫りになった。今回のワークショップでは、同世代が集まったということもあり、同級生という方も多かったが、そんな中でも、それぞれが考えていることを知ったのは初めてだったという感想が全ての方から発せられた。また、何かが行われているというわけでもない。この報告書でわかるとおり、思いには力がこもっているが、思いというのは非常に抽象度が高く、共有し、話し合う場がなければ、具体的に大宮に何かをすることにはならないのである。

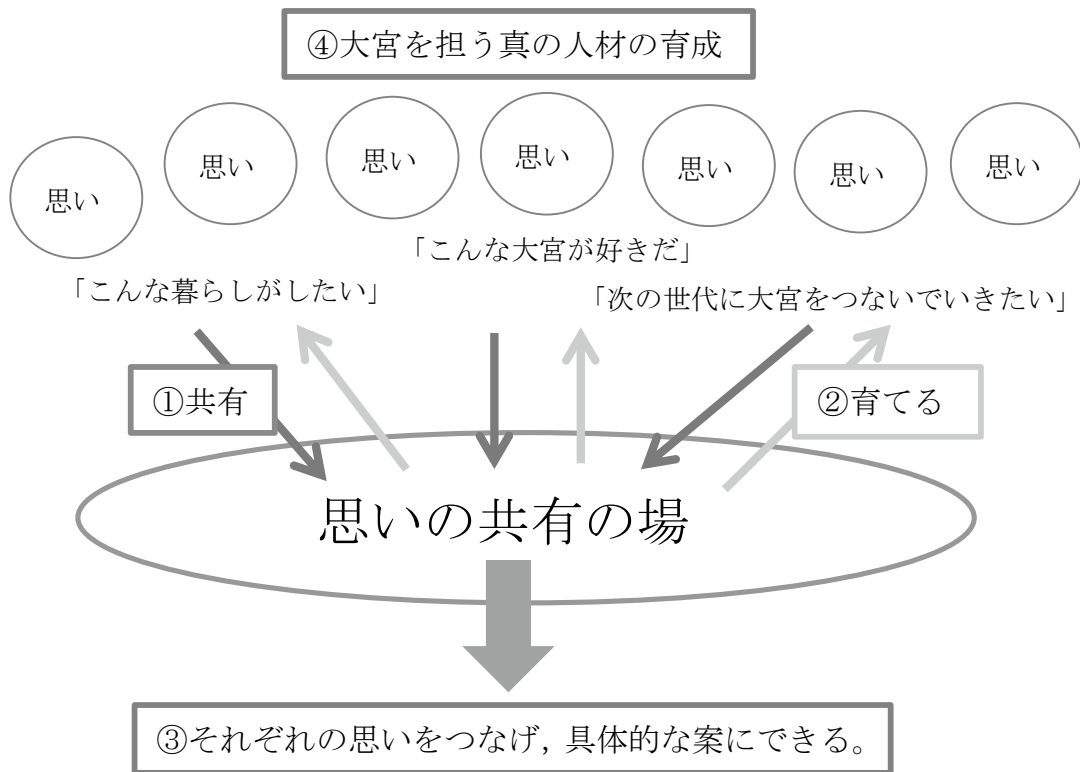


図 思いの共有の場の利点

(5) UJIターン者ワークショップ—田舎暮らしの道しるべ

実施日：2014年9月21日（日） 参加者：4名・ファシリテーター：2名

実施場所：鳥取大学日南町地域活性化教育研究センター（旧大宮小学校）

このワークショップでは大宮以外の暮らしを経験した方目線での大宮の魅力を発見する。UJIターン者を対象としたエコミュージアム構想を考え、移住・定住の促進に繋がる提案をすることを目的とした。ワークショップの結果を踏まえ、UJIターン者ならではのエコミュージアム構想について考えた。まず、1つ1つのポイントも人によって持つ意味合いが異なっているように感じられた。したがって、皆さんの意見をまとめると、UJIターン者を一括りにして1つのむら歩きルートに絞るのではなく、目的ごとに異なる3つのルートを設ける必要があると考えた。1つ目に、Uターン者向けの大宮の懐かしさを感じられる「昔懐かし思い出ルート」、2つ目に、Iターン者向けの大宮での暮らし・雰囲気・景色を味わえる「のんびり自然体験ルート」、3つ目に、UJIターン者が大宮で暮らすことが決まった際に、その受け入れをサポートする「暮らしお助けルート」を提案した。



写真 屋外ワークショップ

3. 「地域の生活文化」の短編ドキュメンタリー映像の制作

(1) 目的

高齢者のもつ知識・技、経験の記憶は、地域の貴重な資源である。しかしながら、高齢者自身がそれを主体的に残すことは希有であろう。なぜなら、①高齢者自身はそれが貴重な資源であることを認識されていないこと、②記録する意欲やその手段を持っていないといったケースが多いからである。また、高齢者の方々の持たれている資源の多くは、形のないものが多い。それを語り、技を伝える方が亡くなってしまえば、その資源も無となる。集落が消滅するという事は、その地域の歴史や生活文化も同時に消滅することを意味するのである。そこで、「高齢者の生きがいがづくりのサポート」と「地域資源の記録」という2つの目的のもとで、大宮地区に残る文化・伝統を題材にしたドキュメンタリー映像を制作し、記録として残すことにした。



(2) ドキュメンタリー映像（約15分×3名）の概要

1) 佐藤文子さん：「佐藤さんに学ぶ山菜料理一味を受け継いでいくために—」

佐藤文子さんは、息子夫婦は県外で暮らしているために長年1人暮らしをされている。

昔から山菜料理を作ること得意とされており、現在でも近所の方に振舞ったり、地域の100円市場で販売されたりしている。また、家の味噌倉には多くの漬物が保存されていた。今回はこの佐藤さんを通して山菜料理が出来上がるまでを追った。

映像は、①山から山菜を採ってくる→②山から採ってきた山菜を釜でぬかと一緒に湯煮をする→③味噌倉で保存する→④塩抜き(色だし)をする→⑤塩抜き(色だし)をした山菜で煮しめを作る→⑥出来た料理を盛り付ける

→⑦佐藤さんへのインタビューといった7つのシーンで構成されている。

インタビューの中で、今と昔の食生活の違いが語られるとともに、今でも作り続ける理由として、皆に喜ばれることが励みになり生きがいにもなっていることも語られている。



2) 井上恵子さん：「昔の生活風景を人形に託すー井上さんの心に残る風景ー」

井上恵子さんは、昔の生活風景を人形で再現されている。今回は、井上恵子さんが作られた人形の中で「田植え」・「冬の囲炉裏端」・「結婚式」の3つをピックアップして取材した。

映像は、手作りの人形などで再現された昔の生活風景の1シーンを、その当時の暮らしぶりやならわし、しきたり等を井上さんが思い出して語ってくださるもので、以下の内容が収録されている。

「田植え」：手代わり、えぶり(道具)、綱植え、はしま

「冬の囲炉裏端」：むしろうち、縄仕事(実際に藁打ちや縋わない縄ないを披露してください)、囲炉裏端で昔話をせがむ子ども達や家族団らんの様子、嫁入り前の針仕事など

「嫁入り行列」：仲人さんの役目、箆箆長持、傘と提灯、三三九度と子どもの役割など



3) 田淵恭さん：「私たちへのメッセージー炭焼き産業を支えてきた時代からー」

田淵恭さんは、農業と製炭、山の保全・管理を長年されてきた。大宮での製炭産業は、たたら製鉄用炭作りから始まり、昭和30年の生産ピークから昭和60年代半ばに衰退するまで、当時村集落のほとんどが炭焼きに従事していたという。

映像は、現在残っている山の炭焼き跡地を訪ねるシーンから始まり、製炭や森林保全に関わる仕事をされてきた田淵さんの経歴からかつての大宮の人々の生活を支えてきた製炭産業を振り返る。そして、大宮の歴史として残すべき展示資料の準備(旧大宮小学校2階)へと展開する。そして、田淵さんへのインタビューにおいては、地球環境の保全のために山の手入れは欠かせないこと、大宮に人々が住み続けることの大切さが語られている。



4. エコミュージアム構想の実現に向けて

2014年12月12日に鳥取大学日南町地域活性化教育研究センター（旧大宮小学校）において大宮まちづくり協議会と共催で現地報告会を実施した。今年度の事業成果として、前記3で述べた「地域の生活文化」の短編ドキュメンタリー映像の上映を行ったほか、2に関連してコース紹介のWeb用映像やクラウド版WebGISの技術を用いたルート統合の技術紹介を行った。これらの映像資料や地図およびルートをデジタルコンテンツ化することによってヴァーチャルエコミュージアムの構築が可能であり、それを踏まえた地域でのエコミュージアム構想の検討が可能となる。本事業は日南町大宮まちづくり協議会と綿密な協議を行って実施していることもあり、これらの事業成果を継続的活用できるよう引き続き鳥取大学と大宮地区との協働を進めていく

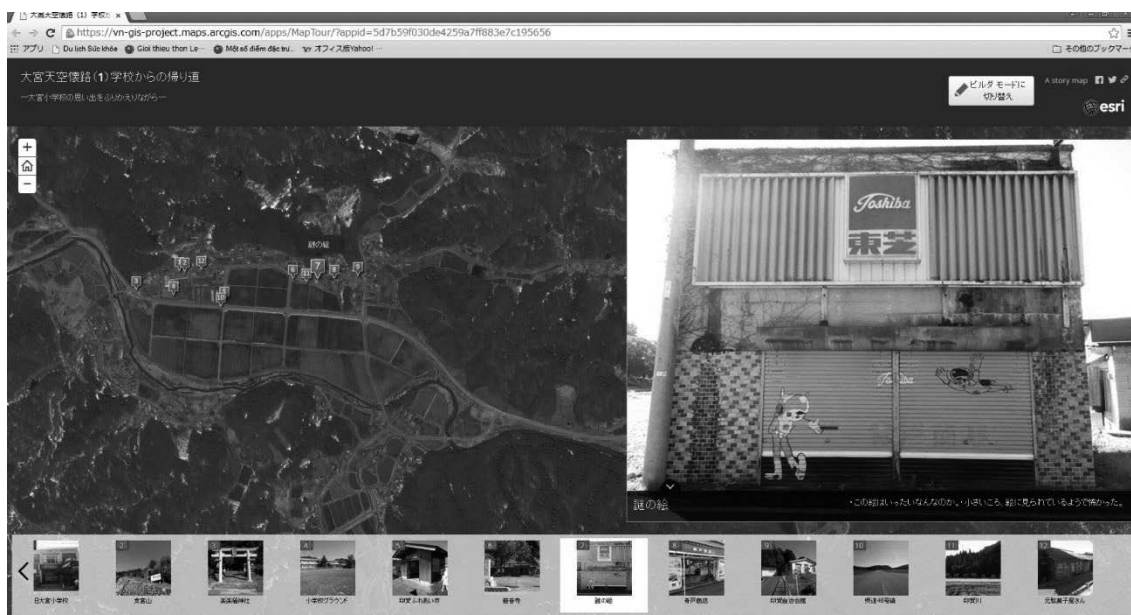


図 WebGISによるコースのデジタルコンテンツ化



写真 報告会の様子

中山間地における大腸がん検診の課題

医学部（地域医療学講座）特任助教 渡邊 ありさ

1. 背景と平成25年度事業の概要

➤ 背景

大腸がんの年齢階級別死亡率は、特に50歳を超えると急激に増加するため、高齢者の多い地域では大腸がんの診断・治療は重要な課題である。

一方、山間部の過疎地域には医療機関が少なく医師も少ない。日野郡日南町は島根県・広島県・岡山県との県境の山間部に位置する、人口5000人で高齢化率が45%の自治体である。町内に内視鏡検査を行える医療機関は町立日南病院1ヶ所のみで、町外へ出る移動手段のない高齢者も多い。

そのような背景を持つ日南町で大腸がんの診断はどのような経緯で行われているか、大腸がん検診と日南病院の大腸内視鏡検査の両面から調査した。

➤ 平成25年度事業の概要

① 日南町の大腸がん検診

平成20～24年度までの5年間の検診と二次検診（精検）を調査した。日南町の大腸がん検診受診率は平均21.6%であり、鳥取県の26.4%より低かった。

② 日南病院の大腸内視鏡検査

平成24～25年の2年間の調査。大腸内視鏡検査の受診動機としては、検診便潜血陽性が最多だが、次いで有症状と病院での定期加療中に行った便潜血検査陽性が多い。がん検診受診率の低さを、かかりつけ医が診療の中でカバーしている実状があった。

③ 大腸がん検診啓蒙チラシ・ポスターの作成

日南町の大腸がん検診・二次検診データを用いて、啓蒙チラシとポスターを作成した。平成26年度の住民検診の案内と同封して対象者全員に配布し、ポスターは日南病院や保健センターに掲示した。

2. 26年度の事業の目的

前年度に引き続き、平成25年度の日南町大腸がん検診と二次検診の資料および平成26年度の大腸がん検診受診者数の調査と、日南病院での大腸内視鏡検査の調査を行った。

3. 実施内容

① 日南町の大腸がん検診

- ・鳥取県および鳥取県健康対策協議会が毎年発行している「鳥取県がん検診実績報告書」より、平成20～24年度の鳥取県及び日南町の大腸がん検診受診率・要精査率・精検受診率・がん発見率を参照。
- ・平成26年度の大腸がん検診データ、また平成20～25年度の大腸がん検診二次精査のデータより、要精査者の受診先や精検結果を分析。

②日南病院の大腸内視鏡検査

・平成23～26年の4年間に日南病院で行われた全ての大腸内視鏡検査より患者の年齢、性別、検査の受診動機、診断名を分析した。

③内視鏡勉強会

大腸がん検診後の精密検査受診率が低い理由として「検査が怖い」「大腸内視鏡が苦痛だと聞いた」という意見もみられたため、苦痛の少ない内視鏡検査を行う目的で、日南病院の若手医師と看護師を対象に、2回の勉強会を行った。

④啓蒙チラシ作成

昨年度に引き続き、チラシを作成予定。

4. 結果

①日南町の大腸がん検診

1) 受診率

平成20年度以降の日南町と鳥取県の大腸がん検診受診率推移を図1に示す。

日南町は6年間の平均受診率が21.6%、鳥取県はデータの出ていた24年度までの5年間の平均受診率が26.8%である。速報ではあるが、26年度の日南町受診率は22.4%であった。

2) 精検受診率

日南町の大腸がん検診陽性者の精検受診率は平成20～24年度の平均が63.0%と低かったが、25年度は73.9%と大幅に上昇した(図2)。

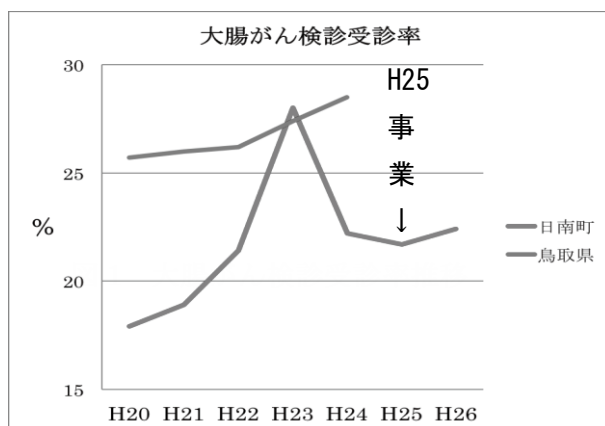


図1 日南町大腸がん検診受診率

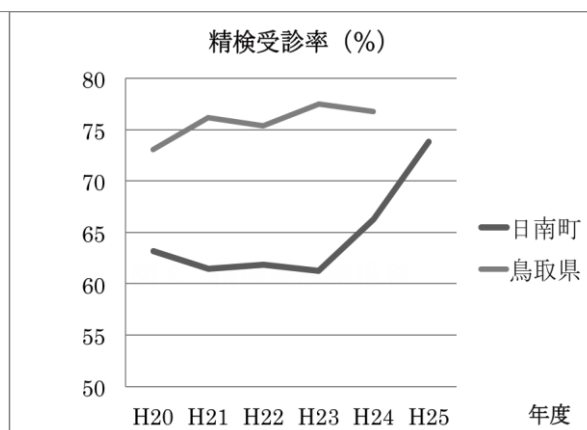


図2 検診陽性者の精検受診率

3) 精検受診先

精検受診者は平成20～25年度の6年間で261名であった。

精検受診先を地域別に分類すると、図3の如く日南町(日南病院)が101名(39%)、日南町以外の日野郡と西伯郡が62名(24%)、米子市が93名(35%)であった。

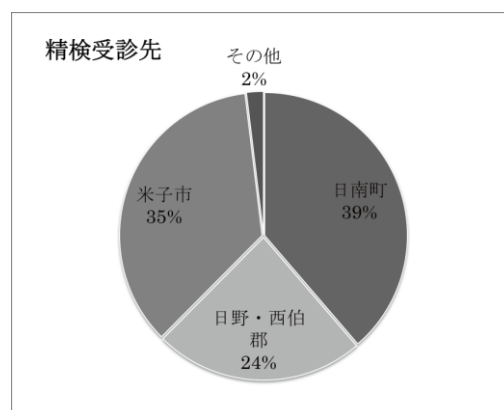


図3 地域別 精検受診先

4) 大腸がん診断

昨年度の調査では、平成20～24年度の5年間の大腸がん検診から7名の大腸がんが診断されていた。平成25年度は51名が二次精査を受けたが、大腸がんが診断されたものはいなかった。

② 日南病院の大腸内視鏡検査

平成23～26年の4年間に日南病院で行われた大腸内視鏡検査は445件で、平均年齢は74.6歳、男性46.5% 女性53.5%であった。

1) 検査件数 (図4)

平成23～25年の大腸内鏡検査は100件強で推移していたが、平成26年の検査件数は131件と約1.3倍に増加した。

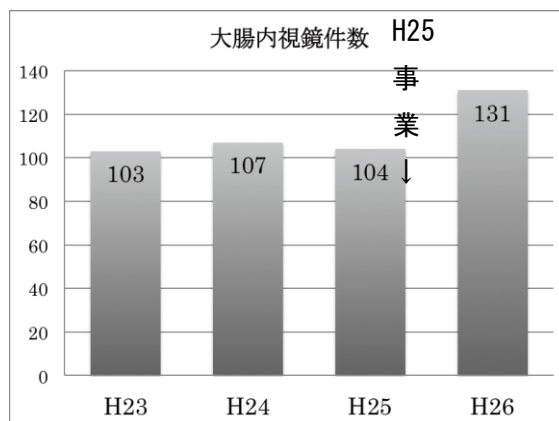


図4 大腸内視鏡検査 (平成23～26年)

2) 検査受診動機 (図5)

日南病院での大腸内視鏡検査動機は、「フォローアップ」18%、「検診便潜血陽性」29%、「病院の便潜血陽性」20%、「有症状」24%であった。

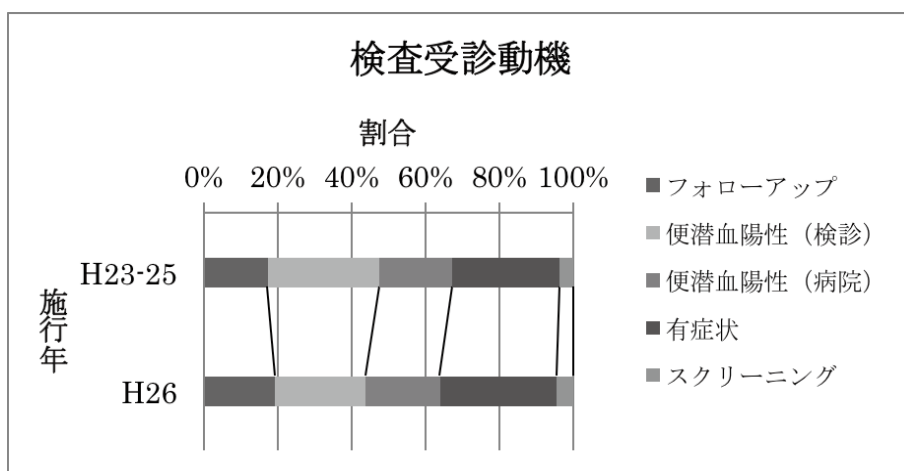


図5

3) 検査所見

445件のうちわけは、「異常なし」152件 34%、「がん」21件 5%、「大腸ポリープ」166件 37%、「その他疾患」106件 24%であった。

処置として、ポリープや早期がんに対する内視鏡的粘膜切除術を79件、生検を34件施行している。

4) 大腸がん (図 6)

調査した4年間で21名に計23個の大腸がんを認め、そのうち進行癌は18、早期がんは5つである。平成26年に新規に診断された7名はいずれも進行癌であった。

大腸がんの診断に至った21名の受診動機は、有症状15名、病院施行の便潜血陽性が3名、他疾患での定期フォローが1名、腫瘍マーカー高値の精査1名、検診便潜血陽性(他の自治体)1名である。

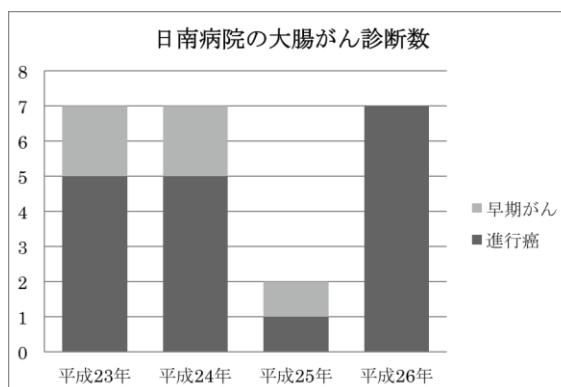


図 6 日南病院で診断された大腸がん

③ 内視鏡勉強会 (写真 1、2)

少しでも苦痛の少ない内視鏡検査を提供することで住民の検査に対する抵抗感を軽減するよう、日南病院の看護師と若手医師を対象に、2回の勉強会を行った。

a) 第1回 (7月24日(木)) 上部内視鏡を楽に受ける体位と介助

上部内視鏡は咽頭への刺激が苦痛になりやすく、またスコープを進める操作が咽頭に負担をかける原因になるため、体位を工夫することでも苦痛軽減が図れる。正しい体位と、その体位をとるための声かけや介助方法を伝えた。

b) 第2回 (11月27日(木)) 下部内視鏡の苦痛原因と、苦痛軽減のための介助

下部内視鏡は、腸管の長さやたわみ方によって苦痛の度合いが大きく異なる。どのようにたわむと苦痛に感じるのかを説明し、たわませないための有効な腹部圧迫介助の方法を指導した。



写真1 勉強会① 胃カメラの体位



写真2 勉強会② 大腸カメラの介助

5. 考察、今後の課題

鳥取県の大腸がん受診率が順調に増加していることと比較して、日南町の受診率には大きな変化がみられない。

一方で、日南町の精検受診率は61.3% (H23年度) →66.3% (H24年度) →73.9% (H25年度) と増加している。

日南病院の平成26年大腸内視鏡施行件数が従来の1.3倍に増加した理由について

内科の常勤医師に尋ねてみたところ、前年度の調査結果をふまえて意識的に大腸がん発見に努めているとのことであった。調査結果がすぐに翌年の診療に活かせるのはコンパクトでフットワークの軽い地域自治体病院のメリットであると考えます。

また、大腸内視鏡は痛くて怖い検査だというイメージが強く敬遠していた患者が、実際に検査を受けた友人からそれほど苦痛ではなかったと聞いて、受ける気になったというケースもあった。筆者は平成24年度から定期的に日南病院へ若手医師の内視鏡指導に行っており、その成果も出てきていると考える。

日南病院で大腸がん診断された症例の71%は、下血や腹痛などの症状が出てから精査として大腸内視鏡検査を受けて発見されている。もっと早期で発見できる症例を増やすためには、やはり症状の出る前に便潜血検査を受けてハイリスク者を拾い上げることが有効なので、がん検診の受診率をあげることが重要である。また、町の大腸がん検診受診率の低さを、かかりつけ医として定期的にフォローする中でがん検診の受診状況を確認して、個人に応じた検査を行うことである程度をカバーすることができる。これは地域に根ざした町立病院ならではのメリットと考えるが、病院での便潜血検査はあくまで保険診療による検査であり、行政が主体で行うがん検診に成り代わるものではない。

持病のない比較的若い住民や、総合病院の専門外来に通院しているような場合は、がん検診受診以外には定期的ながんスクリーニングを受ける機会が乏しいと考えられる。検診の受診率を上げることで、大腸がんに限らず各種がんの早期発見・早期治療につなげたい。

6. 大腸がん検診受診啓蒙チラシ

平成25年度の事業で作成して対象者全員に配布したチラシは、日南町の直近のデータを生かして住民にピンポイントでメッセージを伝えたことで好評だったと聞き、

26年度のチラシも作成した(図7)。

工夫した点は、前回と色違いのデザインで同じキャラクターを登場させ、実際に精密検査を受ける様子を紹介したこと、新しく平成25年度の精検データを使用したこと、がんの発見だけではなく、ポリープ切除で大腸がんへの進展を予防する効果を伝えることで、がん検診への親しみを育てるようにしたことなどである。

これを平成27年度の住民検診・がん検診の案内と共に対象者全員に配布し啓蒙する予定である。



図7 大腸がん検診の啓蒙チラシ

発達障害児の包括的支援ネットワークの構築

医学部医学部脳神経小児科 前垣 義弘

事業の背景と目的

多動・衝動性や対人関係の障害などを特徴とする発達障害の特性を持つ子どもは、普通学級に在籍している児童の6.5%を占めると言われている（1クラスに2-3人）。このような子どもたちは、学校や家庭のなかで多くの困難さを持ちながら、暮らしている。これらの児童のうち、障害特性を正しく評価され適切に支援されているのは、ほんの一部である。

発達障害の子どもたちは、わがままや家庭のしつけの問題として捉えられているため適切な対応がとられていない場合も多い。その背景には、発達障害に対する理解不足と支援システムが有効に機能していない点がある。学校においては、教員の他にスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーが関わりを持つことができ、教育委員会の発達障害専門教諭（LD等専門員）や通級指導教室などの専門機関が存在する。これら地域に存在する機関や専門職からなるネットワークが有効に機能するようにスーパーバイズすることにより、子どもたちが抱える発達特性を客観的に評価し、支援法を検討し、役割分担を明確化することを本事業の目的とした。

実施方法

- 1) 保育園・小学校・中学校・教育委員会・福祉保健課より構成されている「日南町子ども支援連絡会議」への本学職員などの専門職が第三者として参加し、スーパーバイズする。
- 2) 保育園・学校において、保育士や教員、養護教諭、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、必要に応じて連絡会議構成員も参加し、事例検討を実施する。
また、このような会議・検討会を継続的に行う。
- 3) 保護者に対して、発達障害の理解を深めるための講演会を開催する。

事業成果

1. 事業打ち合わせ会議：平成 26 年 5 月 20 日（参加者数 9 名）
日南町の現状と課題
 - ・ 保育所—小学校—中学校と連続性のある支援が必要である。
 - ・ 事例検討を行い、アセスメント→実践→振り返り、の流れで支援のスキルアップを図る。
 - ・ 子ども支援連絡会議を活用して検討会を行う。
 - ・ アセスメントツールの作成も必要である。
 - ・ 保護者への啓発のための講演会も有効である。
2. 関係機関連絡会議：平成 26 年 12 月 25 日（参加者 9 名）
 - ・ 各機関（保育所、小学校、中学校）が現場で感じている課題と現状についての確認。
 - ・ 現在、大学病院を受診している症例を事例検討する。一教員の経験値に頼るのではなく、誰もが共通して見立てが出来るように、観察の視点やポイントを共通理解し、根拠に基づいた支援につなげる。→アセスメントする力の底上げ。
 - ・ 各機関における相談支援の流れの確立。
3. 事例検討会：3 月 16 日（参加者 13 名）
 - ・ 学校内見学（ケース検討対象児クラス等）
 - ・ 事例検討、まとめ



事例検討会のようす

日南町の子どもを取り巻く関係機関の状況から考えられること

子どもたちの状況

- 発達障害診断あり児童
 - 発達障害様症状を呈する児童
 - 顕著な発達障害様症状は呈していないがひそかな困り感のある児童
 - 困り感のない児童
- ⇒⇒⇒ 検討されているが、さまざまなタイプやレベルの子どもたちが混在するなかで、適切な見立てや対応が十分に行いきれていない状況（教師の困り感）がある

小中学校の状況

【学校現場が考える子どもたちや保護者の現状】

子どもたちの育ちの中に、将来の進路選択及び決定の難しさがある。その要因は、児童生徒本人が勉強しようとしなない、やる気が出ないことが問題だと考えがち。保護者自身も子どもをうまくやる気にさせる言葉かけが苦手である。

【学校の対応の現状】

学校として、やる気が出にくい児童生徒や保護者に対して、進路決定が困難になっても仕方がないと捉えてしまうこともある。

果たして、自分の課題に気づかず、進路決定を難しくさせる要因は、本当に本人のやる気だけの問題か。子どもにとっての課題は何か、本当は何に困っているのか、困っていることにどう対処すればよいのかを、明らかにする必要がある現状としてある。

つまり、表面的な事象（結果）にとらわれて、子どもの行動の背景や経過に目が向きにくい状況がある。日々授業等を行う中で、個々にあわせて、事実の確認や現状の把握、見立てて支援することに困難が生じている。

【課題】

障がい（発達障がい、生活のしにくさ等を含む）の有無にかかわらず、①子どもの状態を客観的に見立て、②町内外にある資源を有効活用し、③適切な時期に、④適切な機関へつなげる機能が不十分である。

【みる】

見立ての視点の確認、次に生かすための学びを深める
◇子ども・保護者・地域
◇保・小・中・高
◇行政 ◇医療

【しる】

町内で使える資源の確認、さらに町内外の関係機関の役割分担、医療機関及び療育機関の活用法などの確認

【きづく・さぐる】

子どもの豊かな育ちを保障するために、できるだけ早期に成長発達の課題を探る

【つなぐ】

個別の支援計画、個別の指導計画を作成する

子どもにとって必要なことは何かを『熟議する』ことが大事
今、まだ充分とはいえない状態…

【“共生”の社会づくりのために…】

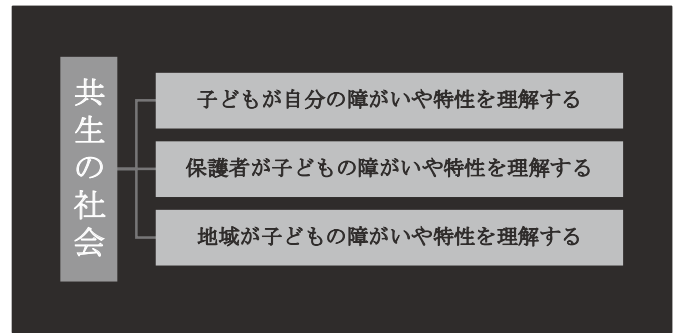
障がいや特性を理解し、必要に応じて自らSOS
 が出せる／出しやすい社会（環境）を！

より暮らしやすい、生活しやすい環境づくり
 を目指す。

『その子にとって必要なことは何か』を考える。

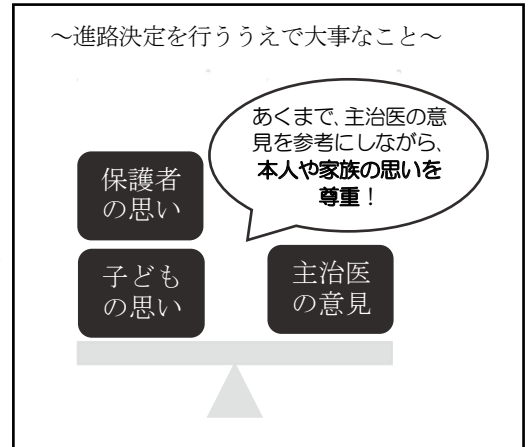
そして、

『必要なことを行うためにどうすればよいか』『学校として何ができるか』を考える必要がある。



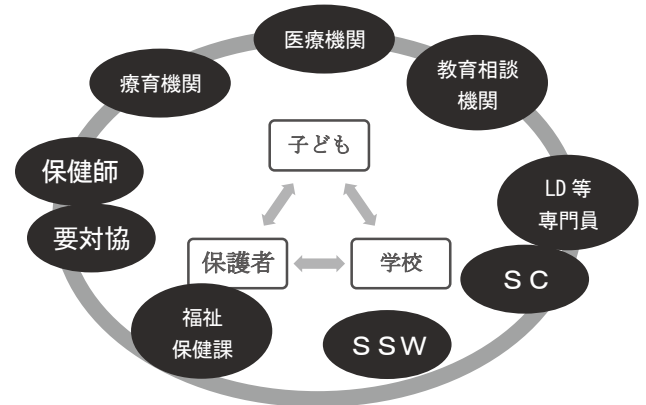
【忘れてはならないこと】

- 「その子どもがどうありたいか」「保護者としてその子どもにどう育ててほしいか」を明確に！
 → 基本は、子どもや保護者の希望に沿うことが前提。
- 子どもの状況に応じて、どのような支援が必要か、そのために学校としてどのような方法(手段、体制)が整えられるかを明確に！
 → 学校としてできる支援の選択肢を保護者(子ども)に提示する必要があり、それを元に保護者(子ども)が決める。



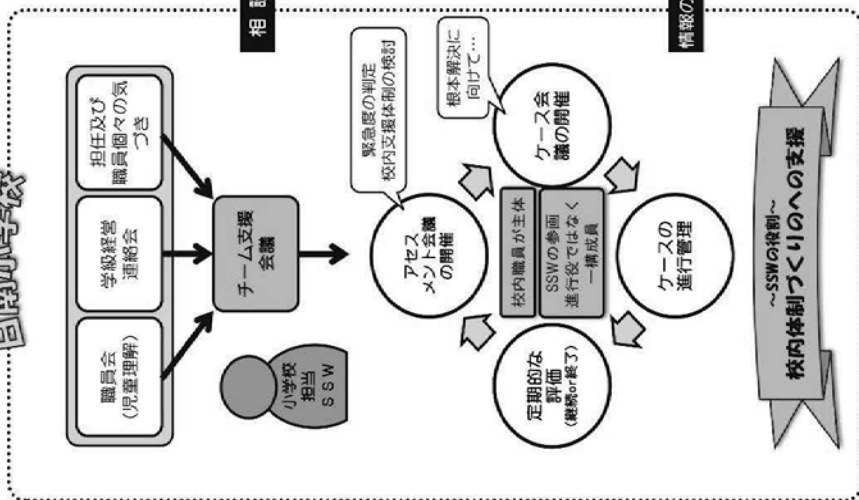
【校内の課題】

- 授業の中で、「どこまで子どもたちの個々の状況に合わせるか」が課題
- 現在行っている支援（視覚的支援等）は、本当に効果ある支援になっているかの検証
 → やっているつもりになってないか、本当に子どもたちの助けになっているか…
- 校内における相談支援体制はどうなっているか
 → 担任は困ったらまず誰に相談するのか??
 → 担任のフォローは誰が行うのか??
 → 支援の必要性の判断は誰が行うのか??
- 担任が困らないために学校として、地域としてどうすべきか
 → 校内で行うこと
 ▶ 校内における相談体制の明確化
 ▶ フローチャートにして共通理解を図る
 → 外部に依頼すること
 ▶ 「どんなとき」「どんなタイミングで」
 「どこ（誰）に」に相談すべきか、各機関・職種の役割を明確に！
 → 地域としてできること
- 暮らしやすさを考え、必要以上の配慮にならないよう（特別扱いではなく）、本人に必要な配慮がバランスよくなされる社会を目指す。

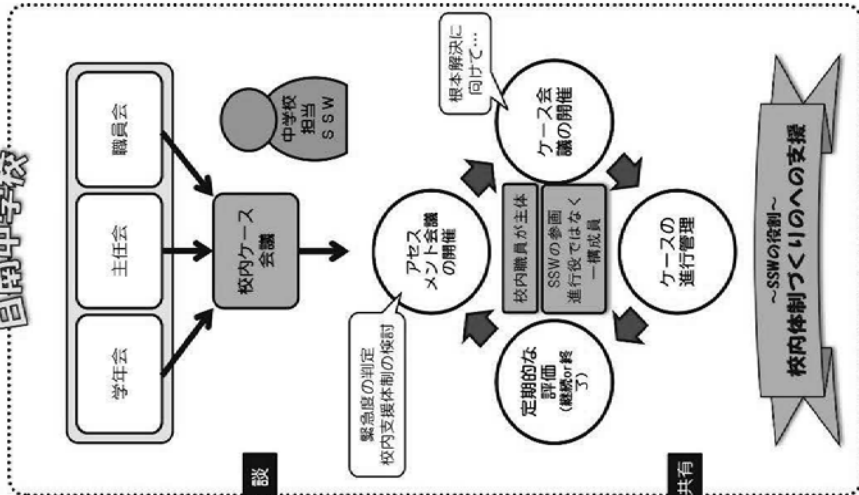


各機関における相談支援の流れ

目南小学校

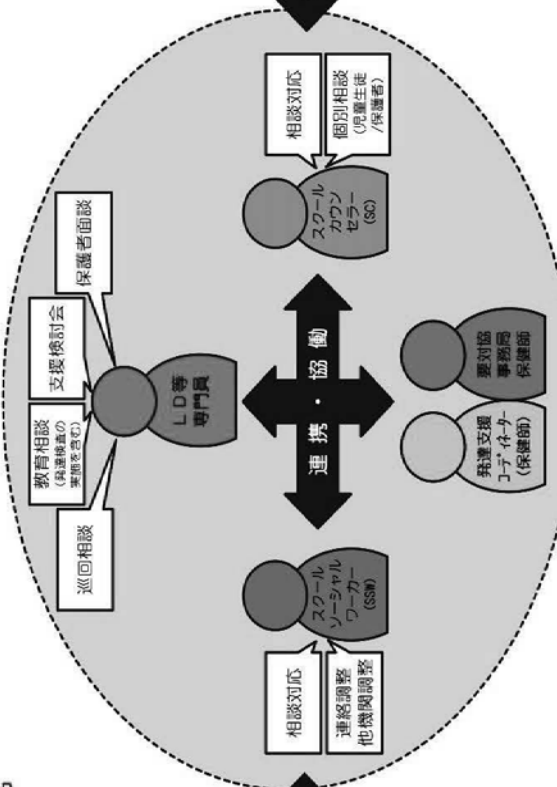


目南中学校



相談

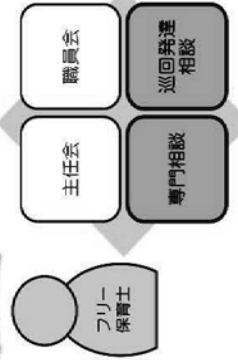
情報の報告・共有



相談

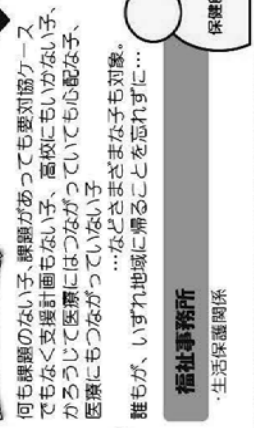
情報の報告・共有

保育園



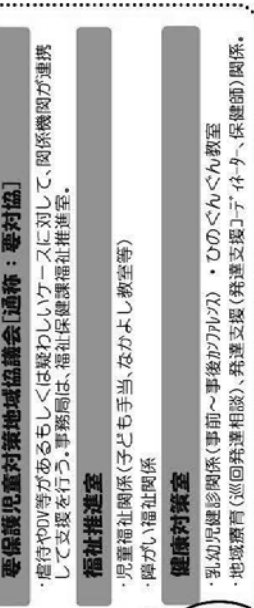
相談

福祉保健課



情報の報告・共有

要保護児童対策地域協議会 [通称：要対協]



シミュレーションを用いた認知症教育プログラム

医学部保健学科 山本 美輪

事業の概要

本事業は、下記の2部構成で、高齢者の全体像把握を認知症理解へとつなげる。

(1) 高齢者体験による高齢者把握

高齢者体験装具を装着し、ADL/IADLを体験することより80歳代高齢者の日常生活上の困難を経験することで、高齢者把握を行う。これより、加齢に伴う身体的変化、特に判断能力の元となる外部からの情報を高齢者がどのように体験しているかを理解する。

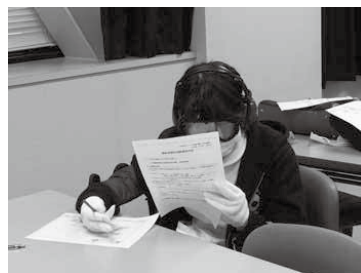
(2) 認知症状・対応シナリオ体験

認知症高齢者のシナリオゲーム（1.アルツハイマー病型認知症、2.脳血管性認知症の2事例）を作成し、そのシナリオゲームで認知症ケアをシミュレーションすることで認知症状や対応について理解する。

期待される効果

高齢者体験を行うことで加齢に伴う身体的変化やその変化に伴う心理的变化（喪失感や不安感等）をシミュレーションし、高齢者を理解することができる。そして、加齢に伴う変化が基盤となり、疾患である認知症の理解がより深まることが期待される。

また、認知症は「中核症状」「周辺症状」より構成されており、関わるスタッフの対応によって「周辺症状」の出現は異なる。そのためケアを提供するスタッフの経験知が、認知症ケアの質を左右する。つまり、認知症ケアを提供する看護職やケアスタッフが、効果的・合理的に経験知を積み重ねることが重要といえる。よって、症状・対応別シナリオゲームを体験し、グループで理解を共有することで認知症状や対応を理解し、看護職を目指す学生の老年看護学実習前レディネスを高め、日南町にある介護保険下施設における認知症ケアの質の向上につながると思われる。



事業の成果

9月、10月に「日南病院」スタッフに対して行った高齢者体験研修会では77名の参加があり、10月（2回）に行った「介護福祉センターあかねの郷」での同研修会には33名のスタッフの参加があった。

また、日南町で毎月開催されている生涯学習講座「にちなん町民大学」と連携し、一般町民に対し介護予防に関する講演を行った。参加者は「高齢者疑似体験装具」を装着し様式トイレでの排泄動作体験や箸でのピーズつかみ体験のほか、ぬり絵や階段昇降などを通じて高齢者体験を行うことで、加齢に伴う体の変化を理解した。

日南町は、46%を超える超高齢化社会となっており、参加者からは「家族や地域の方の介護に役立つ経験ができた」「自身の今後の生活にとっても参考になった」などといった声が聞かれた。



(研修参加者アンケートから一部抜粋)

- ・ 貴重な体験が出来て良かった。このような障がいを持つことになった時は、すぐに何もあきらめてしまうと思う。ストレスがきつかった。
- ・ 視野が狭くなって下を向かないと障がい物を見つけづらい。危険のリスクが高くなることがわかった。
- ・ 一人での行動が難しく、前が見づらいので怖かった。介助者がいるととても心強く感じた。
- ・ 見えない、聴こえない、動きにくいということがこんなに不安で心細いとは思わなかった。介助者は常にそれらを感じて介助しなければならないと思った。





2月には、日南小学校4年生児童26名を対象に「高齢者疑似体験」授業を行った。

授業では、児童自らが高齢者は日常生活上の不便に対し、それぞれの意見を発表後ビデオ学習を通して、高齢者の歩行速度の違いや白内障を患った場合の物の見え方の違いについて確認した。その後、高齢者疑似体験装着具を装着し、箸でビーズをつかみ移動させる作業や色鉛筆での塗り絵、歩行することを通して加齢に伴う体の変化を実体験した。参加児童からは、「高齢者の歩きにくさが分かった」や「肘が曲げにくく、腕が重く感じた」などと感想が聞かれた。

研修会を実施したそれぞれの機関からは「学んだことをすぐに実践できる内容だった」として好評であった。日南病院は来年度もスタッフ研修会に組み入れたい意向が聞かれている。このような体験型研修会は、講義形式と比べ参加者の意識や行動の変容に効果が期待できることから、当初の目的に合致したものとなった。

今後は、日南病院のスタッフに対して、今年度と異なったADL・IADA援助内容での高齢者体験研修会を予定している。今後も町より依頼があれば、依頼者・対象者に合わせて対応していきたい。またこのCOC事業をベースとした内容で、三報社出版社（東京）と電子書籍（動画等）として出版予定で、現在動画サンプルを作成中である。



豊かな環境を守るための不在村地主問題への対策・・・・・・・・・・67
農学部助教 片野洋平

日野川源流域における水質・生態系調査・・・・・・・・・・68
地域学部准教授 寶来佐和子

豊かな環境を守るための不在村地主問題への対策

農学部 生物資源環境学科 片野 洋平

1. 事業の背景と目的

法的には土地や家屋を所有しながら、管理を行わず、法的な諸手続も行わない、不在村所有者の問題は日本国内の地域社会で共有される課題になっている。同問題に対して、平成 25 年度末に、日南町の在村者不在村者に対して調査を行った。

本プロジェクトでは、同調査データの分析を進め、現状の分析、未来の予測、そして、より具体的な政策的アドバイスを日南町に対して行うことを目的とした。

2. 事業の実施内容

現在、調査結果については、日南町に対して開示し、調査結果を WEBSITE 上で公開している。また、調査結果については、学術的論文として投稿を行い（計 3 本）、掲載も可能となった。本分析家結果について、適宜日南町職員と共有し、情報交換を行っているところである。現状分析を終え、予測と政策的アドバイスについては、年度末に行う予定となっている。

3. 実施時期、参加者数

メール、電話でのやりとりが中心となっている。26年度末に複数回の打ち合わせを予定している。それぞれの町の複数の職員の参加が見込まれる。

4. 事業の成果と今後の展開

本プロジェクトについては、十分に支援していただき、状況の分析という点に於いては一定以上の成果を得たと考えている。今後については、異なる三つの方向性が考えられる。①本プロジェクトの対象を森林に限らず、耕作放棄地、家屋などに展開する方向。②本プロジェクトを条文レベルまで政策的に詰めていく方向。③本プロジェクトを他県の過疎地域と比較し、国際比較していく方向である。考えてみたい。

5. 連携自治体の声

概ね高評価を受けていると思われる。同プロジェクトは本申請書を提出してから2ヶ月もあり、期末に向けて、さらにより多くの成果が見込まれる。より具体的には分析結果を受けた後における、自治体との政策的議題についての打ち合わせである。



日野川源流域における水質・生態系調査

地域学部 地域環境学科 寶來 佐和子

1. 事業の背景と目的

日野川の河川改修による堰や護岸工事、生活の近代化による水質の悪化、近年の異常気象による水量の減少などによる水環境の変化は、淡水魚の生息域を直撃し、日野川流域に住む人の多くが日野川水系から魚が減少していると感じている。

そこで、町内を流れる日野川の健全な内水面生態系の復元を目的とした調査を行い、環境変化の要因やメカニズムを明らかにし河川生態系変化の原因解明と生態系修復計画の立案を目指す。

2. 事業の実施内容

サンプリング 10 地点（非被害水田水、被害水田水、銭上川上流、事業所排水、銭上川下流①、森林開発地下流、銭上川下流②、小原川合流地点、小原川上流、日野川合流地点）において、試料（河川水（水田水）、堆積物（河川底泥、土壌）、生物（昆虫、魚類など）を毎月採取し、水質（pH、水温、電気伝導度、酸化還元電位）、栄養塩類および金属濃度を測定し、季節変動を解析する。

②堆積物（河川底泥、土壌）試料

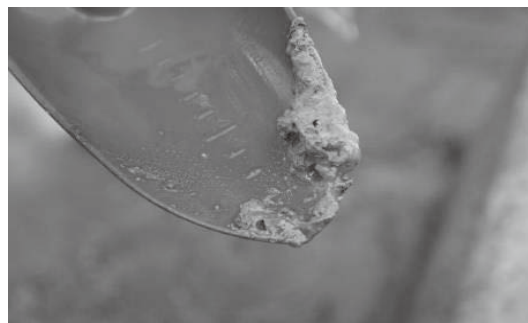
26 元素のトータル金属濃度（Li, Mg, Al, V, Cr, Mn, Fe, Co, Ni, Cu, Zn, As, Se, Rb, Sr, Mo, Ag, Cd, Sn, Sb, Cs, Ba, Hg, Tl, Pb, Bi）

および炭素窒素安定同位体比分析

③生物（昆虫、魚類など）

26 元素のトータル金属濃度（Li, Mg, Al, V, Cr, Mn, Fe, Co, Ni, Cu, Zn, As, Se, Rb, Sr, Mo, Ag, Cd, Sn, Sb, Cs, Ba, Hg, Tl, Pb, Bi）

および炭素窒素安定同位体比分析



3. 方法

2014年7月から2015年2月まで、日野川水系8地点、水田2地点における河川水、堆積物および周辺に生息している生物種（バッタ、カエル、ヤゴなど）を採取してきた。

7月から2月までの河川水中イオン態栄養塩類（ NO_2^- -N[亜硝酸イオン態窒素]、 NO_3^- -N[硝酸イオン態窒素]、 NH_4^+ -N[アンモニウムイオン態窒素]、 PO_4^{3-} -P[リン酸イオン態リン]）その他元素イオン（ Fe^{2+} [2価鉄イオン]、 Cl^- [塩化物イオン]、 Cr^{6+} [6価クロムイオン]、 SO_4^{2-} [硫酸イオン]、 Zn^{2+} [亜鉛イオン]）濃度を測定した。

4. 結果と考察

事業所排水の栄養塩類およびその他元素イオン濃度は他地点よりも相対的に高値であったことが示された。また、排水が流入する事業所に最も近い河川である銭神川下流は、事業所排水と同様の変動パターンがみられた。

銭神川下流域は事業所排水の影響を受けていることが示唆された。今後も毎月のモニタリングを実施し、日野川流域環境変化の原因を求めたい。

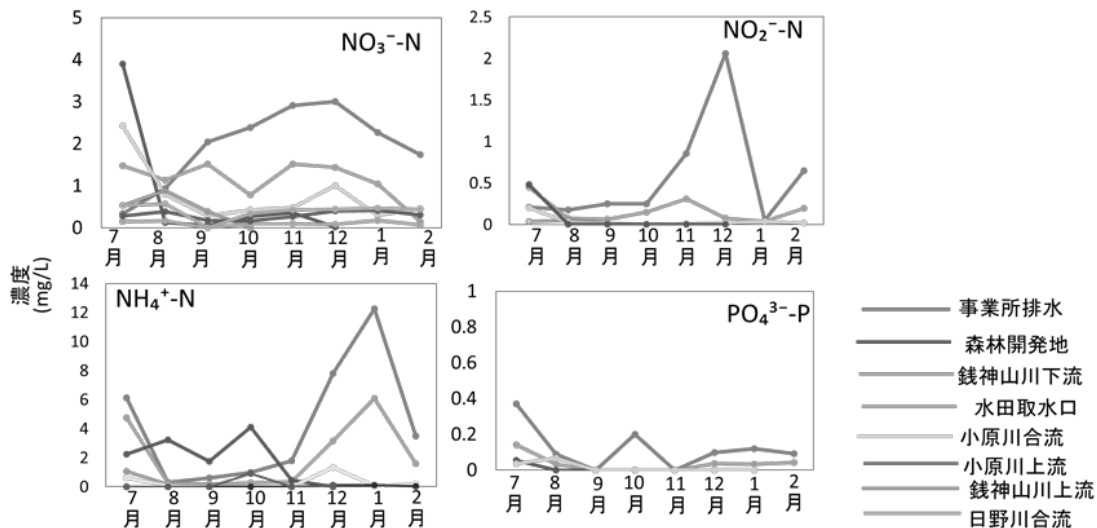


図1 日野川水系における窒素形態の季節変動

4. 事業の成果と今後の展開

事業所排水における窒素やリンといった栄養塩類、およびその他元素イオン濃度は、他地点よりも相対的に高値であった。また、流入河川である銭神川下流は事業所排水と同様の変動パターンがみられた。このことから銭神川下流は事業所排水の影響を受けていることが示唆された。今後も経年的モニタリングを実施し、日野川流域環境変化の原因を求めたい。

5. 連携自治体の声

26年度に日野川流域10地点で調査が行われたことにより、これまで調べられなかったことがない日南町内を流れる日野川の金属元素、炭素窒素安定同位体比の経時的な変動及びレベルを明らかにすることが期待できる。

今後も調査を継続し、環境変化の要因やメカニズムを明らかにし、河川生態系変化の原因解明と生態系修復計画の立案にご協力いただきたい。



日南町森林活用プロジェクト会議・・・・・・・・・・・・・・・・・・70

～森林を活用した山村地域振興～

地域学部教授 永松 大、農学部教授 日置佳之

農学部准教授 藤本高明、農学部助教 片野洋平

日南町森林活用プロジェクト会議 ～森林を活用した山村地域振興～

地域学部地域環境学科 永松 大
 農学部生物資源学科 日置 佳之
 農学部生物資源学科 藤本 高明
 農学部生物資源学科 片野 洋平

事業の概要

我が国の過疎地域では、今から30年から50年ほど前、盛んに植林された人工林をどのように使っていくかということが問題となっている。この問題は、一方では人工林を社会で価値あるものとして評価してもらうという「攻めの課題」がある。例えば、日南町の山林流通量の検証、木材の価値を高めるための製材の工夫などが含まれる。他方で、残され、放棄された人工林を、きちんと管理するという「守りの課題」がある。所有者が他界し、継承者がいないまま放置された人工林が、災害リスクと共に遍在する課題をいかに改善するかが問題となる。以上のような、中山間地域における人工林の「攻めの課題」と「守りの課題」を、日南町農林課と共に、日南町森林活用プロジェクト会議のメンバーがそれぞれの立場から考察を加える。そして、森林（人工林）を用いた持続可能な地域社会にあり方を提案する。

期待される効果

本事業・活動は、上述のように二つの方向性がある。森林をいかにして社会で評価してもらい地域振興に役立てるか、という森林の「攻めの課題」である。この課題には、地域社会における森林の重要性を外部者に知ってもらうため取り組み（日置）、木材の価値を高めるために木材の評価基準を厳密にする取り組み（藤本）、日南町産材の流通量を検証する取り組み（永松）などである。他方で、森林の「守りの課題」では、放棄された森林をどのように管理していくか、在村者不在村者の意思を確認する作業（片野）などがある。

それぞれの研究者が、担当分野において事業を展開することにより、平成25年10月から開始された現在進行中の日南町における「日南町森林活用プロジェクト会議」における諸課題の発展に資することが可能である。より具体的には、日南町の森林の社会的認知を高めること、日南町の森林の木材品質を安定させること、日南町産材の流通量を確定させること、日南町住民を主体とした管理にあり方の問題の解消が期待される。

各専門委員の26年度研究内容

地域学部地域環境学科 永松 大・・・日南町地域産材の流通と課題
 農学部生物資源学科 日置 佳之・・・出立山見本林コースに関する具体案の設計
 農学部生物資源学科 藤本 高明・・・日南町有林産スギ材の木材性質変動予測手法の開発
 農学部生物資源学科 片野 洋平・・・在村者不在村者の意志を確認する試み

事業の成果

7月31日に今年度第1回目の会議を開催、11月5日に第2回目の会議（専門員によるメール会議）を行った。今年度は主に「(1)森林・林業に関する新しい取り組みの広報・啓発（短期的に取組みが可能なもの）」について、「(2)日南町産材の販売戦略・林業活性化に向けた取組み（基礎研究および中・長期的な取組み）」について協議を行った。

(1) 森林・林業に関する新しい取り組みの広報・啓発実績

みなとパートナーシップ環境展への出展

「みなと環境にやさしい事業者会議(mecc)」の会員事業者である日本通運株式会社と、「みなと森と水ネットワーク会議(uni4m)」の協定自治体である日南町の展示を港区エコプラザで行った。町有林 J-VER の取組み、オオサンショウウオの保護活動などの紹介。



カーボンマーケット EXP02014 への出展

東京国際フォーラムで開催されたカーボン・マーケット EXP02014 に「日南町有林 J-VER」及び「日南町森林組合 J-VER」の展示、取組み状況を出展、紹介した。全国各地で J-VER（Jクレジット）に取り組む約 80 の企業、自治体等が自らの J-VER の取組み、カーボン・オフセット事例を出展し、今後カーボン・オフセットへ取り組む企業（買い手）等への売り込みを行った。



日南町イメージポスターの作成

上記のカーボン・マーケット EXP02014 にあわせて、FSC 森林認証取得のテーマである森林保全、生態系保全をテーマに日南町のイメージポスターを 5 枚作成。



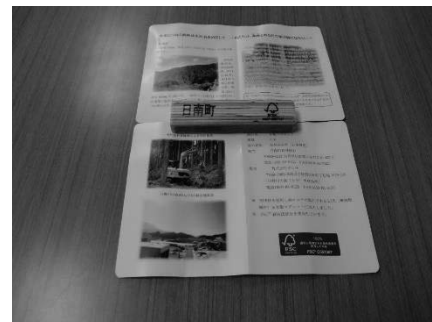
視察・研修・見学・実習対応

視察対応への担当者事務の軽減及びより視察者へ分かりやすい説明が出来るように、来町者へむけた日南町有林 J-VER 及び日南町 FSC 森林認証を紹介する PowerPoint を作成した。

また、町有林 J-VER を紹介する町の行政ホームページをより分かりやすく修正。販売実績、調印式の情報等タイムリーに発信できるよう更新した。

広報を兼ねた木工品開発

上記のカーボン・マーケット EXPO2014 にあわせて、町内 FSC 認証材を利用した木製マグネットを日南町森林組合が作成。カーボン・マーケット EXPO で来場者への配布、日南町森林資源行政視察者などへの配布物とした。



子どもたちへの森林教育

10月と11月には、日南小学校5年生児童を対象に森林学習を行った。町内の林業現場で木の伐採や運搬などの見学や最新型の高性能林業機械の操作、つる切り作業などを体験する機会を提供した。児童の中には「将来林業に携わりたい」と感想を述べる児童も見られ、森林を守り活かすことが大切であることを学ぶ機会とすることができた。



(2) 日南町産材の販売戦略・林業活性化に向けた取り組み

日南町産材の品質および高付加価値の検討

日本通運の贈答品用としてマルカン酢（株）製品の収納箱を製作

1649年（慶安2年）に創業し、徳川時代には「酒は正宗。酢は丸勘」と言われ、360年以上の歴史を誇るマルカン酢（株）は、中国山地の分水嶺から流れ出る清らかでミネラル豊富な水と、日南町でその水により育てられたコシヒカリを神戸へ運び、ベテラン技術者の手により短時間で大量に発酵させる「通気発酵法」ではなく、昔ながらの槽でゆっくり発酵させる「静置発酵法」で最高のお酢「酢屋勘三郎（フラッグシップモデル）」を作り上げた。

また、日本通運はCSR（企業の社会的責任）活動として地域社会と連携し森林育成活動を全国3箇所で行っており、その一つである日南町において平成22年度より、クヌギ、ケヤキ、ヤマザクラを毎年植栽し、下刈り等を実施することにより森林保全及び下流域の水源涵養の森を育む活動を行っている。

日本通運が贈答用の品物として、マルカン酢の「酢屋勘三郎」に着目したことを受け「酢屋勘三郎」を収納する箱を日南町森林組合が認証材を用いて製作した。環境・生態系に配慮した日南町の森林（FSC認証林）からもたらされるきれいで豊かな水でコシヒカリが栽培され、そのコシヒカリを原料として丁寧に作り上げられたお酢を再度ヒノキの箱の中に納めるというストーリーを持たせた。



課題と今後の方向性

本プロジェクトは、J-VER、FSC等、日南町の新たな森林資源をどのように町の活性化へつなげていくかが当初のスタートであった。平成25年度にスタートし、2年が経過したが、現状としては各委員からの活動状況の報告、日南町の林業における問題点の洗いだしなど、まだまだ明確な目標は定まっておらず、プロジェクトの目標について意思統一を図る段階にある。

今後、課題抽出後には「日南町森林林業連絡会（仮）」などの位置づけで行政、民間、大学の情報を共有し、新規事業の提案に対し、大学側は研究課題のやりとり、学生教育の連携の場に発展させたい。平成27年度以降、カーボン・オフセット、FSC森林認証について、国も大型の予算措置を行っている。2020年東京オリンピックでの認証材の利用、FSC認証材輸出、中心市街地構想におけるオフセット商品の開発等に向けて新たな切り口の提案等を継続的に行っていく必要があると考えている。

森林活用プロジェクトメンバー

役 職	所属 ・ 職名	氏 名	備 考
顧 問	鳥取大学理事（地域連携担当）・副学長	法橋 誠	
専門委員	鳥取大学地域学部地域環境学科 教授	永松 大	代 表
専門委員	鳥取大学農学部生物資源環境学科 教授	日置 佳之	
専門委員	鳥取大学農学部生物資源環境学科 准教授	藤本 高明	
専門委員	鳥取大学農学部生物資源環境学科 助教	片野 洋平	
委 員	株式会社オロチ 代表取締役	森 英樹	副 代 表
委 員	日南町森林組合 専務理事	入澤 淳	
委 員	日南町森林組合 森林整備係（FSC・J-VER 担当）	藤原 孝志	
委 員	日南町役場農林課 課長	青葉 誠也	
委 員	日南町役場企画課 課長	中曾 森政	
委 員	日南町役場住民課住民生活室 主事	吉田 博一	
委 員	日南町役場農林課 主任	島山 圭介	事 務 局
委 員	鳥取大学研究・国際協力部社会貢献課 課員	川上 将典	連絡調整

地域資源を活かしたエコツーリズム振興のための人材育成・・・・・・・・・・74
農学部教授 日置佳之

地域資源を活かしたエコツーリズム振興のための人材養成

農学部生物資源環境学科 日置 佳之

事業の背景と目的

日南町は平成25年度から「観光ガイド養成講座」を開始し、18人の受講者があった。本事業は町のガイド養成講座と連動して進めることとし、大学教員が講座の企画立案及び実施に参加した。平成26年度も引き続き町の講座と連動する形で事業を実施し、企画・参加者募集・現地でのガイド等の一連の業務が行える人材の養成を図った。

事業の実施内容

日程の確保が難しいことから、平成26年度からの新規受講者、25年度に受講したが出席回数が足りなかった者、及び25年度観光ガイド認定者に対して同内容で講習会を実施した。内容的には、①より深い内容のガイドができるようにする、②旅行商品の企画ができるようにする、という2つに力点を置き、26年度内で6回の講習会を実施した。

実施時期および参加者数

- 06月10日：開講式 伯耆の国歴史・文化勉強会（日南町役場、外部講師）
 - 08月02日：夏山ガイド講座（船通山）
 - 11月05日：先進地事例紹介（鳥取市鹿野町からの外部講師）
 - 12月06日：ツアー企画講座（日南町役場）
 - 01月23～24日：スノーシュー講座（日南邑）
 - 01月30日：先進地見学（安来市）
 - 03月08日：日南町内ガイド模擬演習勉強会
- 延べ約40名参加



事業の成果と今後の展開

25年度からの2箇年間で、合計13名の観光ガイドを認定または認定見込みとすることができた。25年度には受講者が中心となって、日南町福万来のヒメボタル発生地で積極的にガイドを行うなど、本事業の成果が現われ始めている。今後は、26年度講習の中で受講者から提案された旅行商品を試行するなどした上で、自立したガイド集団として同町の観光の担い手となることが期待される。

連携自治体の声

平成25年度からの2年間で13名の観光ガイドの認定を見込んでいる。団体顧客からの依頼時のガイドや、NHK鳥取での「ここはふるさと旅するラジオ」（5月／観光ガイド5名出演）、マレーシア最大の旅行会社アンソニーウォンさんをガイドするなど、その機会も多く成果が出始めつつある。また、養成講座プログラムでは、実際に観光ガイドがまち歩きルートや金額を考え提供するツアー（案）も出来つつある。今後は、より実戦経験を積み、PDCA実践により観光振興を深める体制を構築したい。



その他

日南町オーダーメイド型インターンシップ・・・・・・・・・・・・・・・・	76
工学研究科教授 谷本圭志、日南町企画課	
鳥取大学協定四町（日南町、南部町、大山町、琴浦町）連携事業・・・・・・・・	80
日南町、南部町、大山町、琴浦町	
連携事業報告会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	83
日南町企画課	

日南町オーダーメイド型インターンシップ

工学研究科教授 谷本 圭志
日南町企画課

平成 26 年度、地（知）の拠点整備事業（COC 事業）の取り組みとして「日南町オーダーメイド型インターンシップ」を行いました。インターンシップでは、学生の将来のキャリアプランの形成に寄与する一方で、若者から見た日南町はどのように見えるのかについての検討を行うことを目的としました。

インターンシップの実施に向けて、まず、日南町全職員から学生に依頼したい業務の取りまとめを行いました。結果、希望のあった業務の中から最終的に3件にオーダーを絞り、学生の受け入れ態勢を整えました。

9月11日（木）に工学研究科にて、町職員（業務担当者3名）とインターンシップにエントリーした学生（6名）がマッチング会議を行いました。日南町は、希望する3件の業務について学生にプレゼンテーションを行う一方で、学生はインターンシップにエントリーした理由、動機、自己PRなどを行いました。その後、日南町と学生双方にメリットのある内容となるよう意見交換を行いました。これにより、次の日程でインターンシップを行うことが決定しました。



(マッチング会議の様子)



(双方メリットある事業になるよう)

オーダーメイド型インターンシップ日程

	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00
9月29日 月	/	/	鳥大前発 → 生山駅着					事務説明、町の紹介など	町の課題解決 (説明)				/	/	/	/
9月30日 火	町営バス乗降調査															
10月1日 水	町営バス乗降調査															
10月2日 木	/	/	町の課題解決 (現地確認、調査など)				各自の資料整理		やんれ♪日南! 会場準備など		やんれ♪日南!					
10月3日 金	/	/	各自の資料整理			町の課題解決 (中間報告)	生山駅発 → 鳥大前着				/	/	/	/		

オーダー 1

「政策や課題を理解し、町の現状を考える」

「日南町中心地域整備計画」や「第5次総合計画（後期計画）」などの実施について、町の事業担当者から説明を受け、現地視察を行うことで現状と課題を理解していただきました。

日南町のみならず地方自治体は、生活環境・医療福祉・教育・文化・産業振興など多岐にわたる住民サービスを行っています。インターンシップによる就業体験を通じて、大学の講義等で得た知識を再確認すると共に社会におけるルールや行政の仕事の肌で感じ、行政運営を行う上で必要なスキルや能力を身に付ける場としていただきたいと思います。



(中心地域整備現場を視察)



(職員から施策や課題の説明を受ける)

オーダー 2

「町営バスに乗降し、利用者数や乗車マナーを調査」

日南町営バスに乗車（全6路線全便）していただき、乗車人数や乗車場所を記録し乗車密度を算出していただいたほか、車内やバス停の様子などを記録し、危険箇所や乗降者のマナー、運転手の運転マナーなどについての調査・分析も行っていました。調査結果をもとに学生と町の担当職員の意見交換、または学生から「利用しやすいバス運行対策」

について
の事業提案を
受け、公共交
通のあり方
について検討し



(町営バス乗降調査)



(町営バスの概要説明を受ける)

ました。

オーダー 3

「住民参加型ワークショップ「やんれ♪日南！」に参加し、意見交換」

誰でも自由に参加し語り合い、町の将来を描く住民参画ワークショップ「やんれ♪日南！」に参加していただき、学生らしい柔軟な発想でまちづくりのためのアイデアや施策を住民と一緒に考えていただきました。

ワークショップの中で学生は主に進行係・記録係などを行い、日頃住民が自身の住むまちに対してどのような考えを持ち、何を望んでいるのかを考えていただきたく計画しました。地域住民と直接関わることで、コミュニケーションや現場感覚を学び、教科書では学べない現場の声や実態をつかみ取りました。

また、地域住民の目的意識も確認しながら、ワークショップを通じて他人の意見を受け入れることの大切さ、まちづくりには様々な人たちが関わっていることなど、多くの「気づき」を得ていただくことができました。



(積極的に発言する学生たち)

オーダーメイド型インターンシップ報告会

12月1日には学生らが再度日南町を訪れ、インターンシップで得た経験をもとに、町に対し事業や政策を提案する形で報告会が開かれました。学生らは2チームに分かれ、「スクールバスを運行する際の町営バス運行」と「中心地域の新しい循環バスのあり方」について先進地の取り組みも交えた提案を行いました。

町長はじめ出席した町職員は、学生らの提案を町政に活かせる部分がないかと真剣に聞く姿が見られました。



(事業提案を行う学生たち)



(多くの質問や意見が出る)

インターンシップを通じて

日南町は進みゆく過疎化、少子・高齢化に嘆くのではなく将来にわたり持続的に発展し次の世代が希望を持って住み続けられるような町づくり「創造的過疎」をスローガンに掲げています。定住促進施策を重要施策のひとつとして掲げる日南町において、生産年齢人口のうち、なかでも最も少ない若年層比率の増加を目指すため、学生（若者・他所者）から見た日南町はどのように見えるのか、また若年層の定住に繋がるための事業や施策についてどういったものがあるのかについての検討は、まちづくりを考える切り離すことはできません。

インターンシップ参加者には、今後も自身の将来の就職を見据えながら目的意識を持って実習に臨んでいただきたい一方で、大学での学びと若者だからこそその視点を繋げたまちづくりに対する更なる問題提起や政策立案への結びつきを期待しています。

オーダーメイド型インターンシップに参加して



工学研究科社会基盤工学専攻
1年安田 啓人



工学研究科社会基盤工学専攻
1年日高 大希

事業の概要

各課の業務内容の説明や日南町が保有する施設等の見学から始まり、路線バスの乗降調査、ワークショップへの参加、日南町の新しい施策である中心地構想について意見交換を行いました。また、町の課題解決として二つのテーマに対して提案を行うといった業務を体験させて頂きました。調査内容に関しては一度大学に持ち帰り考察・分析を行い、その結果とともに後日、日南町役場にて実習内容の報告ならびに意見交換を行いました。

事業の成果

「路線バスの乗降調査」では、過疎地域における路線バス運行の実態の把握、運転手や町民の方々から意見の抽出を行うことができました。一方で、「町の課題解決」では、「中心地域の新しい循環バスのあり方」と「新たにスクールバスを運行する際の町営バス運行シミュレーション」という二つの町の課題に対して意見を出し合い、日南町に対して提案することができました。

事業に取り組んだ感想

山々に囲まれ、水が美味しく町の面積の90%が森林といわれるほど自然の豊かさから生まれるお米やトマト、野菜などの食べ物が本当に美味しいと感じました。

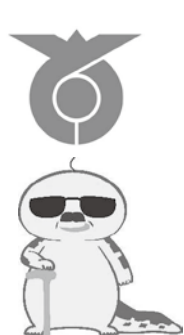
「路線バスの乗降調査」では、実際に2日間バスに乗ることで、現在の過疎地におけるバス運営の状況や課題を肌で感じることができました。「やんれ♪日南！ワークショップ」では、実際に住民の方々と意見を出し合うことで、住民と役場の考えを共有しながら政策を考えることの必要性を感じました。「町の課題解決」では、現在の日南町の状況を踏まえつつ、町民の方々が満足できるような提案を考えるのに苦労しました。しかし、町役場の方々が政策を考える上での苦労ややりがいも感じる事ができ、貴重な体験ができたと感じています。日南町はじめ関係者の皆さまには、本当にお世話になりありがとうございました。

鳥取大学協定四町 (琴浦町、日南町、南部町、大山町)連携事業

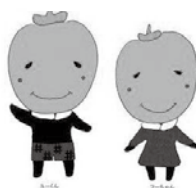
趣旨・経緯

琴浦町・日南町・南部町・大山町の四町は、鳥取大学へ職員の研修派遣を実施しており、お互いの情報を共有することで有意義な研修となるよう意見交換を行っています。

各町が違った特色を持つ一方で、過疎・少子高齢化といった共通の課題も多く抱えていることから、観光政策や地域活性化といった諸課題の解決に向けて連携事業に取り組んでいます。



オッサンショウオ (日南町)



なんぶカッキーズ
(南部町)



とりりん (鳥取大学)



むきはんだ (大山町)



琴浦さん (琴浦町)
©えのきづ/マイクロマガジン社

平成26年度の取り組み

1. とっとり産業フェスティバル2014への出展 (H26/9/26(金)~27(土))

目的：各町毎にポスターを作成し、大学連携事業や町の特産品等の紹介を目的としました。

会場：米子コンベンションセンタービッグシップ

内容：ポスター展示、特産品PRなど

成果：企業・団体・研究機関によるブース展示や各種セミナーのほか、伯耆・秋の手づくりまつりも行われ、会場は多くの家族連れや一般来場者で賑わいました。連携ポスターや各種イベントのチラシを掲示したほか、フェスティバルの景品として各町の特産品やお土産を提供し、PRに努めました。



会場の様子



産学・地域連携ブースの展示



景品(特産品)の提供

2. 第50回鳥取大学風紋祭への出店及び食材提供（H26/10/11(土)）

目的：各町の自慢の食材を使った料理を提供し、地域の食材と食文化を紹介することを目的としました。

会場：鳥取大学（鳥取キャンパス）

内容：四町特産炊き込みご飯の販売

成果：各町の特産品を使った「炊き込みご飯」を作り販売しました。
来場者からも大変好評をいただき、用意した250食を1日で完売しました。
併せて、風紋祭に出店した料理サークル（KCC、ふぁみーゆ）
にも各町から食材を提供し、地域の食材のPRに努めました。

- ・琴浦町：あごダシ、あごちくわ
- ・日南町：コシヒカリ
- ・南部町：猪肉、漬物
- ・大山町：大山ハーブ鶏



むきぱんだ（大山町）もお手伝い



四町特産「炊き込みご飯」



250食を1日で完売！！

3. 4タウンズストーリー企画展示（H27/2/9(月)～27(金)）

目的：主に学生をターゲットとし、大学と四町の連携成果と町自体のPRを行う事を目的としました。

会場：鳥取大学広報センター

内容：ポスター展示（観光、学生の研究）、特産品PRなど

成果：鳥取大学広報センターを会場に「4タウンズストーリー（地域の課題解決に取り組んだ学生たち）」を開催しました。

各町の観光スポットや特産品などを掲載するとともに、大学と町の連携により行われた、学生たちの様々な研究を紹介するパネル展示を行うことで、町の魅力の発信と学生の今後の研究フィールドとしての可能性を紹介し、学生を地域に呼び込むきっかけ作りとしました。



学生の調査や研究をはじめ、町の観光スポットや特産品を紹介

問合せ先：鳥取大学 社会貢献課 0857-31-6777 琴浦町企画情報課 0858-52-1708
南部町企画政策課 0859-66-3113 大山町企画情報課 0859-54-5202 日南町企画課 0859-82-1115

平成26年度

鳥取大学・日南町連携事業報告会



【日 時】 2月28日 (土) 午前 10:00~12:00

【会 場】 日南町総合文化センター 多目的ホール



○ 日 程 ○

◆開会挨拶

- 鳥取大学・日南町連携事業
ワーキンググループ座長 日置 佳之
- 日南町長 増原 聡
- 鳥取大学理事・副学長 法橋 誠



◆事例発表

『住民の生きがいづくりのための
エコミュージアムワークショップの開発』

地域学部教授 福田 恵子

地域学部と大宮地域の連携により制作された、地域住民が後世に伝えたい(残していくべき)地域資源をドキュメンタリー調で制作されたDVDを紹介します。(約15分×3本)



『豊かな環境を守るための不在村地主対策』

農学部助教 片野 洋平

平成26年度中に学生が地域を歩き、主に空き家など財の管理状況について住民の意識調査を実施。地域を周ることで見えてきたことをまとめ、その内容から対策案を検討します。



◆閉会挨拶

- 鳥取県西部総合事務所
日野振興センター所長 澤田 雅広

主催：鳥取大学・日南町連携事業ワーキンググループ会議 お問合せ：日南町役場 企画課 TEL 0859-82-1115

連携事業報告会

平成 26 年度鳥取大学-日南町連携事業報告会

日 時：平成 27 年 2 月 28 日（土）午前 10：00～

会 場：日南町総合文化センター 多目的ホール

事例報告

①住民の生きがいづくりのためのエコミュージアムワークショップの開発

地域学部と大宮地域の連携により制作された、地域住民が後世に伝えたい 地域資源をドキュメンタリー調にまとめた DVD を紹介します。

（報告者）

地域学部 教授 福田 恵子 氏

地域学部 地域教育学科 3 年 白根 裕也さん

地域学部 地域教育学科 3 年 八木 三穂さん

地域学部 地域教育学科 2 年 久住 和也さん

地域学部 地域教育学科 2 年 長住 雅之さん

②豊かな環境を守るための不在村地主対策

平成 26 年中に学生が地域を歩き、主に空き家など財の管理状況について住民の意識調査を実施。地域をまわることで見えてきたことをまとめ、その内容から対策案を報告します。

（報告者）

農学部助教 片野 洋平 氏

農学部 生物資源環境学科 4 年 笠波 春菜さん

（配付資料一覧）

- ・平成 26 年度までの主な経緯
- ・平成 26 年度連携事業実績
- ・鳥取大学広報誌「風紋」44 号
- ・産学・地域連携推進機構 パンフレット
- ・地域再生プロジェクト パンフレット
- ・産学・地域連携推進たより（2015 冬号）
- ・ものづくり道場 パンフレット
- ・サイエンスアカデミー チラシ（3/14、3/28）



地域に伝わる文化を形に残すために —消えゆく伝統を高齢者の思いとともに継承していく—

How to Conserve the Local Cultures in Marginal-Community : A Case Study
in Omiya Area, Nichinan Town, Tottori Prefecture

長住雅之*, 久住和也*, 山下真凜*, 八木三穂**, 白根裕也**, 福田恵子**
NAGASUMI Masayuki* HISAZUMI Kazuya* YAMASHITA Marin*
YAGI Miho** SHIRANE Yuya**, FUKUDA Keiko***

(*地域教育学科 2年, **地域教育学科 3年, ***教授・学習科学講座)

キーワード：高齢化 high-aged 伝統文化 traditional culture 生きがい reason for living
限界集落 marginal-community

I. 調査の目的

現在、日本の、高齢化率は25%に達している(平成25年9月15日現在)。高齢化率の高い地域の課題として限界集落がある。限界集落とは過疎化・高齢化が進展していく中で、経済的・社会的な共同生活の維持が難しくなり、社会単位としての存続が危ぶまれている集落であり、中山間地域や山村地域、離島などの社会経済的条件に恵まれない地域に集中している。このような事態に対して政府も動いており、今回の衆議院議員総選挙でも当選した自民党の石破茂を筆頭に地方創生に力を入れ、地方・地域活性化に対して積極的な取り組みを行っている。

今回の調査を行った鳥取県日野郡日南町大宮地区は、限界集落に近づきつつある集落である。地域教育学科では、この地域で2012年度から高齢者を対象として継続的に調査をさせていただいている。2013年度の「高齢者の生きがいに関する調査」においては、個々人の生きた甲斐(経験)を次世代につなげる機会そのものが、高齢者の「生きがい」のサポートになるのではないかと、ということが示唆された。高齢者の生きがいに関する一般的な行政政策にみられるように、自分のやりたいこと、楽しいことをして生きがいを持つことができれば何も問題はない。そのような政策を否定するわけではないが、行動できる体力や意欲がすでにない人々は、その政策からこぼれ落ちることになる。しかし、前年度の調査では、若い人に話を聞いてもらっているだけでうれしいと思う高齢者は多く、語ることで生きがいを持ってもらうきっかけになることが明らかにされている。

そこで、今年度の調査では、埋もれ、消失してしまう高齢者の方々の経験、知恵や技術といった地域に残存する貴重な歴史や文化的な資源を、私たちが“引き出し”、“評価し”、“記録に残し”、“伝える”ことで、高齢者自身にその人生の価値と後世に伝える使命の意識化を図りたいと考えた。主体的に高齢者自身がその知識や技術を残すことは希有であろう。なぜなら、①高齢者自身はそれが貴重な資源であることを認識されていないこと、②記録する意欲やその手段を持ってい

ない、といったケースが多いからである。それを次世代の私たちがサポートするのである。高齢者の方々の持たれている資源の多くは、形のないものが多い。それを語り、技を伝える方が亡くなってしまえば、その資源も消失する。集落が消滅するということは、その地域の歴史や生活文化も同時に消滅することを意味するのである。私たちの調査実習は、「高齢者の生きがいづくりのサポート」と「地域資源の記録」という2つの目的のもとで、大宮地区に残る文化・伝統を題材にしたドキュメンタリー映像を制作し、記録として残すことにした。

II. 調査方法

1. 調査対象および調査内容

本調査は、大宮まちづくり協議会の協力で調査協力を承諾して下さった大宮地区に在住の佐藤文子さん・井上恵子さん・田淵恭さんから話を伺い、宮地区に残る伝統・文化を調査・撮影した。

(1) 佐藤文子さん：調査内容「昔から伝わる山菜料理」

佐藤文さんは、息子夫婦は県外で暮らしているために長年1人暮らしをされている。昔から山菜料理を作ること得意とされており、現在でも近所の方に振舞ったり、地域の100円市場で販売されたりしている。また、家の味噌倉には多くの漬物が保存されていた。今回はこの佐藤さんを通して山菜料理が出来上がるまでを追う。

(2) 井上恵子さん「人形による昔の生活内容の説明」

井上恵さんは、昔の生活風景を人形で再現されている。井上恵さんが作られた人形の中で、今回は「田植え」と「冬の囲炉裏端」と「結婚式」の3つをピックアップして取材した。このレポートでは昔の生活内容がどのようなものであったか明らかにする。

(3) 田淵恭さん「炭焼き産業が盛んだった頃の時代と今」

昔盛んであった炭焼きの技術を町内で語るができる人はもう数少なく、田淵恭さんはそのうちの一人である。今回はその貴重な技術だけでなく、炭焼き産業を支えた世代から

表1 ドキュメンタリー映像の流れ

佐藤文子さん		井上恵子さん		田淵 恭さん	
シーン	映像内容	シーン	映像内容	シーン	映像内容
I 【山菜料理ができるまで】	1 山から山菜を採ってくるシーン —オートバイに乗って山に行き、籠に入れて持ち帰る	1 学生が井上さんの自宅に訪問するシーン	I 【田植え風景】	I 【製炭の歴史について】	1 かつての炭焼き窯を訪れるシーン —山に登って、炭焼きの跡地を発見する
2 山菜を釜で湯煮をするシーン —長期保存できるようにゆかど湯煮をする	2 井上さんが家の中から出てこられるシーン	2 田淵恭さんのプロフィール紹介シーン —田淵さんは、長年製炭や森林保全に関わる仕事をされてきた		2 田淵さんの歴史について説明するシーン —大宮の人々の生活を支えてきた製炭産業を写真とともに振り替える	
3 味噌倉で保存するシーン —採取した山菜を味噌蔵で保存しておく	3 昔の生活風景を人形を用いて説明するシーン	3 田おこしと代かきの説明		3 大宮の炭焼きの歴史とそれに従事した世代から、これからの時代へのメッセージ	
4 塩抜き(色出し)をするシーン —調理前に湯煮をする	3 綱植えの説明	4 はしまの説明		4 製炭に関する展示会の準備のシーン —旧大宮小学校での製炭に関する展示用に提供された様々な道具や衣服について、当時の様子や思い出とともに振り返る	
5 塩抜き(色だし)をした山菜で煮しめを作るシーン —豆腐をはじめとして煮しめを作る	4 囲炉裏端の子供たちの説明	II 【冬の囲炉裏端】	5 大宮の炭焼きの歴史とそれに従事した世代から、これからの時代へのメッセージ	II 【インタビュー】	Q1 展示を見てもらって、若者に何をかんにしてもらいたいのか
6 出来た料理を盛り付けるシーン —煮た山菜を並べて完成	III 【嫁入り】	1 むしろ打ちの説明	II 【インタビュー】	Q2 製炭をはじめた理由	Q3 日南町に望むことがあるとすれば
II 【インタビュー】	Q1 どんな料理を作っているか	2 迎える立場の説明	IV 【インタビュー】	Q1 なぜ昔の生活を再現しようと思われたのか	Q2 これからはどんなものを作りたいか
Q2 味付けの工夫について	Q2 今と昔の食生活の変化	3 三々九度と子供役割の説明	Q2 これからはどんなものを作りたいか	Q2 これからはどんなものを作りたいか	Q2 これからはどんなものを作りたいか
Q3 山菜料理を食べてもらう機会はあるか	Q5 なぜ山菜料理を作り続けるのか	IV 【インタビュー】	Q2 これからはどんなものを作りたいか	Q2 これからはどんなものを作りたいか	Q2 これからはどんなものを作りたいか
Q4 今と昔の食生活の変化	Q5 なぜ山菜料理を作り続けるのか	IV 【インタビュー】	Q2 これからはどんなものを作りたいか	Q2 これからはどんなものを作りたいか	Q2 これからはどんなものを作りたいか
Q5 なぜ山菜料理を作り続けるのか	Q5 なぜ山菜料理を作り続けるのか	IV 【インタビュー】	Q2 これからはどんなものを作りたいか	Q2 これからはどんなものを作りたいか	Q2 これからはどんなものを作りたいか

見る現代の問題点を紐解いていく。

2. 調査時期及び調査方法

調査は、2014年9月20日～23日に実施した。

(1) 事前調査 (9月)

電話で調査対象者との事前の打ち合わせを行った。

(2) インタビュー調査および撮影企画 (9月20日)

ドキュメンタリー映像の作成が目的であることから、ビデオを回しながらインタビュー形式によって調査を行った。インタビューは一問一答形式ではなく会話形式で話を伺った。

(3) 撮影打ち合わせ・撮影 (9月20-21日)

各お宅に行き事前に作成した撮影案のもと、シーンに分けて撮影した。

(4) 編集作業 (9月23日)

2日間にわたって撮影した映像のうち、採用シーンや秒数のカウントなどの細かな作業やナレーションの収録を行った。

(5) 大宮地区での報告会 (12月12日)

完成したドキュメンタリー映像を、大宮地区での報告会において上映し、調査対象者を含む住民の方々(約20名)に披露した。

(6) 事後調査 (2015年1月)

電話で調査対象者のその後の日々の生活や意識についてうかがった。

III. 映像に収録された地域の資源 (表1)

1. 佐藤文子さんから学ぶ食生活の知恵と技能

料理を得意とされる佐藤文子さんへのインタビューと山菜料理づくりの撮影を通して得られた食生活の知恵と技能を以下にまとめる。



写真1 佐藤さんの山菜料理

(1) 山菜料理ができるまで

1) 山から山菜を採ってくる

佐藤さんは、自らオートバイに乗って山に行き、山菜を採

りに行っている。そうして採った山菜を自家製の籠に入れて持ち帰る。たくさん採れたときには「わご」といって、山菜が落ちないように固定するために、籠の上に木でできた棒状のものを刺して持ち帰る。

2) 山から採ってきた山菜を釜でぬかと一緒に湯煮をする

採ってきた山菜を保存する前に、長く保存できるようにぬか^{注1)}と一緒に、外にある釜で湯煮をする。

3) 味噌倉で保存する

釜で湯煮した山菜を味噌倉という山菜を寝かしておく部屋で保存する。この部屋にはぜんまい・わらび・山椒・ふきなど、約15種類保存してある。それぞれの山菜が入った容器の上には重石として石が置いてあるが、その重石の重さは15Kg以上にもなる。「石が相当重たいです」と1回1回石を持ち上げるのが一苦労のように感じられた。「雪が降れば食べます」と、冬に外に出られない時に備えて多くの食料を保存していることがわかった。また採ってきた山菜の他にも漬物が趣味のようで、梅など様々な種類の漬物も保存してあった。

4) 塩抜き(色だし)をする

味噌倉から山菜を出した後に、塩を抜いて山菜に色を出すために銅でできた鍋(銅鍋)^{注2)}に水を入れてゆっくりと湯煮をする。塩抜きをする前と銅線を入れて塩抜きをした後では見違えるほど色の変化がみられ、塩抜き前では茶色だったものが塩抜きをすることによって青く変化していた。

5) 塩抜き(色だし)をした山菜で煮しめを作る

今回は、豆腐、ふき、こうたけ、たけのこ、人参、ごぼうを使って煮しめを作ってもらった。はじめに、いりこを使って出汁をつくり、各材料に調味料と一緒に出汁を入れて煮込んだ。今回使った調味料はみりん、醤油、砂糖、酒、塩で、それぞれの分量も佐藤さんの長年の感覚であろうか、目分量で入れていた。また調味料を入れる順番や、同じ醤油でも薄口か濃口かといった佐藤さん独自のこだわりも見ることができた。一般的に調味料を入れる順番は「さ(砂糖、酒)→し(塩)→す(酢)→せ(醤油)→そ(味噌)」の順で入れると良いと言われるが、ここでは佐藤さんの調味料の入れ方を挙げたいと思う。

【焼き豆腐】：出汁→みりん→砂糖→薄口→煮る

【きのこ類】：出汁→みりん→酒→煮る→砂糖→濃口

【ふき】：出汁→砂糖→酒→みりん→薄口→煮る

【竹の子】：出汁→酒→みりん→煮る→砂糖→薄口→塩

【こうたけ】：出汁→酒→みりん→砂糖→煮る

【ごぼう】：出汁→酒→みりん→煮る

【にんじん】：出汁→酒→みりん→砂糖→濃口→煮る

以上のように若干違いはあるも、基本は「さしすせそ」の順番で入れていることがわかる。また、薄口と濃口の使い分けは具材の色が薄いものには薄口を、具材の色が濃く、色が濃くなっても良い具材には濃口を使っていた。

6) 出来た料理を盛り付ける

煮込んだ山菜を大皿に盛り付けていく。並べることに順番があり、皿の後ろに色の暗いふきや、わらびなどを盛り付け、前に並べるにつれて色の明るい豆腐や人参などを盛り付

けていく。こうした並べ方を行うのも昔からの習わしであると佐藤さんは語っていた。

(2) 佐藤さんと料理—インタビューを通して—

【どんな料理を作っているか】

昔は、山菜を煮たものの他に、枝豆が無かったために大豆を茹でて刻んで擦って味をつけていたそうだ。また、漬物を漬けることも好きなようで、少しずつ漬けているそうだ。

【味付けの工夫について】

特別な味付けは無いという。昔はみりんやお酒が無かったけれども、今はみりんやお酒といった多くの調味料があるので良い味がつくという。そして、今は味付けの粉といった既存のものがあるが、昔からの伝統でいりこを使うようにすることは外さないようにしているという。いりこ出汁といった、売られているものではなく本物のいりこで出汁を出して味付けをすることにこだわりが表れる。

【山菜料理を食べてもらう機会はあるか】

「私は他の人に食べてもらうことが嬉しいです」と佐藤さんは語る。家族がいらないからだけではなく他の人に食べてもらうことが好きだからだそうだ。今でも地域の集まりがあるときには持って行って食べてもらっているという。その理由の1つに、他の人は年を取ってしまって、佐藤さんより年の上の方は負担になって料理を作ることができないからである。「多くの人と集まることが少なくなって悲しいです」と、残念そうな表情をされていた。料理をされる人が少なくなっている中、佐藤さんだけが作られる懐かしい味だからこそ人気なのであろう。逆に、佐藤さんより若い世代の方は忙しくてされないという。勤めがあるからだそうである。

【今と昔の食生活の変化について】

昔は、醤油と砂糖を少しずつ入れて作っていたが今の若い人は自分たちが追いつかないほど色々な材料を使うという。そしてそれらの調味料には、お年寄りにはわからないカタカナ表記があるという。また、昔は煮しめを作るときも単品(ふきはふき、わらびはわらびといった具合)で煮ていたが、今の人は全部の材料を混ぜて煮ているという。そのために出来た料理が全部混ぜた様に盛り付けられていると、今と昔の食生活の変化を語られた。

【なぜ、山菜料理を作り続けるのか】

昔からやっており、作ってあげるとみんなが喜ぶからだと語る。それが佐藤さんの生きがいになっているとも言われた。周りの人は年を取って出来ないために自分が作って持つていくとみんなが喜ぶので励みになるのだと。このようなきっかけが、佐藤さんが料理を作り続ける理由ではないかと考える。

2. 井上恵子さんに学ぶ昔の生活風景

(1) 田植え

田植えの人形は、昭和30年の初め頃をイメージして作られていた。その頃は全ての作業を人が行っており、特に田植えは多数の人手が必要だったので、家族だけでは間に合わず、「手がわり」といってお互いに作業を助け合うといった形で地域の方たちは協力して田植えを行っていた。

また、田植えには様々な作業がある。まず田起こしといって田んぼを荒起こしする作業を行い、それから代かきといって田んぼを平らにする作業を行っていた。始めに牛を使い田んぼをある程度平らにし、その後に人間が「えぶり」という道具を使い田んぼをさらに平らにし苗を植えやすくしていた。田んぼが平らでないと田んぼに水を入れた際、水の浅いところや、深いところができ苗の生長に差が出てしまうので、田んぼが平らであるということはとても重要で、丁寧に作業されていた。

田植えの苗は春の雪解けを待つ苗床に種を植え育てており、田植えの時には夜が明ける前からその日どれだけ植えるか考え、苗床から苗を刈り取り、田んぼに運んでいた。

田植えをする時には、「綱植え」といって赤い印がついた綱を田んぼの端から端へ引っ張りそれを移動させながらそれを目印にして田植えを行っていた。他にも4m位の定規に印を付けそれを目印にする定規植えや、田んぼ自体に筋を掘りそれに植える筋植えといった方法もあったのだが綱植えが主流だったようである。

田植えをする人は、お年寄りの方は少なく若い娘さんやお嫁さんが多くて、皆心の中で誰が一番速くできるか競い合っており、特に嫁入り前の娘さんはよく働けるのか周りの人達も気にしていたようである。人形にはないのだが、田植えの時に太鼓をたたいてそのリズムに乗せて苗を植えたり、田植え歌を歌ったりして作業効率を上げていたこともあったようであるが、それが行き過ぎてしまい作業がとても雑になり、お上から禁止のお触れが出たこともあったようである。

また、田植えをする人たちは日の出から日の入りまで長時間働いているので、1日3食では足りず午後3時位に「はしま」という時間を設けおにぎりや団子などを食べており、田植えをする人たちはそれをとても楽しみにしていたようである。

(2) 冬の囲炉裏端



写真2 井上さん作成「冬の囲炉裏端」

次に、「冬の囲炉裏端」についてである。昔ほどの部屋にも灯りも暖もなかったため、囲炉裏の火の明るさと暖かさを求めて囲炉裏端に家族皆が集まっていた。冬の仕事は男の人は炭焼きやわら仕事をする事が多く、女の人は食事の準備等はもちろんだが、「むしろうち」や機織り、家族全員の来年着る衣類を作り直したりすることが多かった。

その当時は、わらで履くものや道具類などあらゆるものを

自分で作っていた。わらはとってきたそのままだととても硬く加工がしづらいので、硬い石や木の上に乗せて槌で叩き柔らかくして加工しやすくしていた。その柔らかくしたわらがない、むしろうちをしたり、草履やかごなどを作っていた。その「わらをなう」というのを実際に見せてもらったのだが、一見わらをただ束ねているだけのように見えても、実際に触ってみると簡単には解けなくて、昔の方の技術の高さを目の当たりにした。

また、冬以外は日中家族皆が外で仕事をしていて家で集まるという時間は少ないので、冬に皆が囲炉裏端に集まるというのは家族皆嬉しかったのだが、特に子どもたちは嬉しかったようで、囲炉裏端で団子や栗などを焼いて食べたり、お年寄りの方に昔話をしてもらったりすることがとても楽しかったようだ。そのお年寄りの方と話していく中で子どもたちは生き方や、善悪の捉え方等も学んでいたようである。

(3) 結婚式

最後に「結婚式」についてである。この頃の結婚というのは仲人さんの世話ですることが多かったため、仲人さんはお互いの家を何往復もして説得して結婚するという形だった。中には結婚するまで結婚相手がどんな人かわからず、結婚式当日に誰が結婚相手が探したという人もいたようである。

当時、乗り物などはなかったため結婚式当日には嫁ごお嫁さん側の人たちは自分の家から行列を作ってお婿さんの家まで歩いていた。その行列の中には箆笥を運んだりする人もいてこの箆笥が多ければ多いほど周りの人達は良い家から嫁いできたなと思っていた。歩いていく最中に祝言歌といって様々な歌を歌っていたようである。結婚式というのは夜行うということが多いので、お嫁さんが歩いていくのは夕刻時が多く、提灯を持って歩いていた。またお嫁さんは傘をさしていたようだが、これは顔を出すのが恥ずかしいから傘で顔を隠すためや、傘をさすことによって陰影ができてお嫁さんが美しく見えるためなどいろいろ考えられていた。

その当時は、三々九度の盃を交わし合うと婚姻が成立するという形だったようで、子供たちはその盃にお酒を入れる仕事を任されていた。その仕事を任せられると子供たちはお菓子がもらえたり、お金がもらえたりするし、綺麗な着物も着ることができるので子供たちは喜んで行っていたようである。

また、結婚式があると聞くと周りの人はどんなお嫁さんが来るか見たいので大勢の人が集まって、食事を振舞ったり、お酒を振舞ったりしていたようである。

(4) 井上さんと人形づくりインタビューを通してー

次に、井上恵子さんにインタビューさせていただいた内容を明らかにしていく。

井上さんは、お年を召されて昔のことがとても懐かしく感じるようになり、井上さんの心の中にしか残っていない、今見ようと思っても見ることができない今無い風景を再び見て楽しみたいということで設計図などは使わず、心の中に残っている風景を思い出しながら人形を作られたという。また、これからは年中行事や、昔の子供の遊んでいる風景等も作っていききたいそうである。

私は、学校の授業などで昔の生活について勉強したことはあったが、実際には見たことがなくて今ひとつよくわかっていなかった。しかし、今回井上恵子さんを取材させていただいて少しわかったような気がした。人形を見るだけでもある程度のことはわかるが、井上さんの語りが加わることによってその当時のことが、目に見えるように伝わってきた。そのどちらか片方が欠けただけでも意味がないと思うので、今回ビデオによって記録に残すことの意味を実感した。

3. 田淵恭さん：わたしたちへのメッセージ

—炭焼き産業を支えてきた時代から—

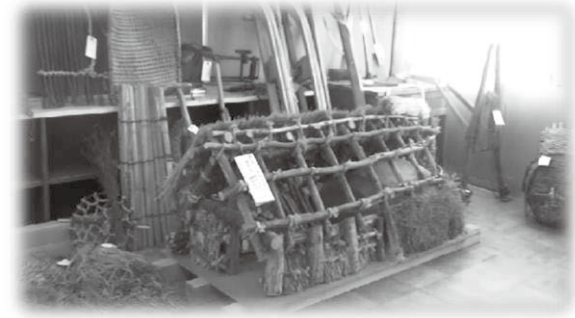


写真3 炭焼に関する展示

(1) 炭焼きに関する知識

1) 窯の作り方

① 築窯（かまうち）の立地条件

築窯は山の条件が命である。実際に田淵さん宅の近くの山に登って説明してもらった。以前窯があった場所に今はもう大体の大きさが分かる穴しか残っていなかった。窯は、山に樹齢20年以上の広葉樹が多くあると築きやすいという。田淵さんの山は条件の良い方の山だったという。窯一箇所の使用山林面積は1ヘクタール（1町歩）で、斜面が良い。穴を掘った近くに大木が立っていたりすると、それを丈夫な壁として使用することができるので、なおよい。田淵さんが特に強調して話されていたことが、山の中央部で水路が近くにあるところが適切だということだ。土と水をあわせて粘土状にして、窯を形成、修復に使用していたそうだ。冬季は、暖かい場所（日のあたる場所）、夏季は、涼しい場所（日陰ができる場所）に作られた。窯の入り口は東南である。これは北風が窯内に入り込み、温度が下がるのを防ぐためである。

② 窯の種類

白炭窯と黒炭窯の2つがある。作り方も完成した炭の用途も違う。白炭窯（八等式改良窯）は奥行き6尺幅4.8尺の小さな窯であり、炭化は24時間と一度の製炭に時間を要するため、一箇所に並べて築窯し、交互に使用した→夫婦窯と呼ばれる。黒炭窯（標準窯）は、奥行き9尺、幅8尺の、白炭窯よりも大きな窯である。窯が広いので、着火技術が必要だったという。白炭窯より低温であるので、窯の中に人が入って炭を取り出した。

③ 窯の形成

甲（型）＝天井を強くするために、天井をたたくのが毎日

の仕事であったという。土が白くなってくると完成に近く、天井がしっかりしたという状態。築窯をしているときや、炭を作っているときに熱で、天井にひびがはいってくる。それを補強するためさらに土^{注3)}を盛る。

2) 製炭の仕方

① 良質な木材

硬度が高く、木の密度が高いもの（木目が細かいもの）。カシ、クヌギ、ナラの順である。

② 炭焼き数え唄

「一とせ ひとつに大事は窯づくり よい土たつぷりよくしめよ」から始まり、炭焼きのコツが十まで記載してある。

3) 炭焼きの存在価値

石炭は、工業用と家庭用の2つがある。工業用の炭は後に、バス、トラックの燃料に使用され、家庭用の炭は陶芸、こたつ、七輪に使われた。炭は、人々の暮らしにとっても密接した、必要不可欠のものであったことが分かる。

国の統制品なので、商品として出すために、検査を必ず通さなければならなかった。その検査で使えなかったものを家に持ち帰って使っていたようである。炭焼き産業は男性だけの仕事のようにだが、窯の屋根の役割をする藁や炭を運ぶためのかごに使う縄などは女性が編んでいたし、山から炭を運ぶ作業にも女性が参加していた。家族の協力が必要な職業だった。

(2) 田淵さんと炭焼き—インタビューを通して—

【炭焼きをしていた理由】

米作りと炭焼きは、国の統制品であったため最大の収入源で、これに精励することで、家庭を安定に支えた。そのため、当時村集落のほとんどが炭焼き（山子）に従事していたという。田淵さんもいままで行っていた米作と併せて、製炭を始めた。農家は主に夏農業を行い、冬、山へ行って製炭を行っていた。質のよいものを作れば作るほど高く売れた。

【炭焼きの展示を見てもらって若い人にどう感じてもらいたいのか？】

「今は何もかもが完備され、手に入る時代だが、若い人たちに、重労働で体を張っていた時代があったことは知ってほしい。山は、雑木のままでいいので、手入れをしないと荒廃してしまうし、ただの山と思って放っておくだけで自然の恵みがあるという甘い考えだけではだめだと思う」と田淵さんはいう。炭焼きの技術を伝えたいというよりも、炭焼きをやっていた頃を知り、昔のように最低40年に一度は木を切り、また再生していくというサイクルが必要であることを理解し、自分たちが森林を守らなければならないことを、自覚してほしいのであろう。

【これから日南町の人々、町外の人々に望むこと】

「若い人の数は少ないが、日南の良さを今一度見出してもらって、日南町に人が来てどうやったら定住するだろうかということを、若い人と年寄りが一緒になって考えていかなければならないと思う。自分たちも高齢者になるのでできることが少ないような気もするけれど、みなさんから依頼があれば、自分のできる分野で、できるだけの協力をしていかなければ

れまいけないと思う。」

田淵さんは、炭焼きの技術を私たちに伝え残していったほしいという考えよりも、炭焼きを通して、今の自分たちに欠けているもの、自分たちがやるべきことに気づいてもらいたいという思いを強くもたれている。炭焼きだけではない、昔は自分たちの暮しと隣り合わせに存在している自然を活用し、物を作り、あるいはそれを食し、しかし絶やすこと無いように育て、保護し暮していた。炭焼きは1つの家族では成し得ないもので、近所の協力が大前提のものである。私たちの暮す社会には、そういうものが欠けている。だがそれに気づかせてくれる町は、消えかけている。彼らからのメッセージを、私たちがどう残していくかが重要になってくる。

IV. 高齢者にとってのドキュメンタリー映像

撮影の意味

表2 報告会でのDVD上映後の意識や生活上の変化

インタビュー内容	調査対象者				大宮まちづくり協議会 (総務部長)
	佐藤さん	井上さん	田淵さん	田邊次良さん	
①DVDを人に見せたか	○	○	○	—	
②撮影に思い残したことがあるか	○	○	x	—	
③地域のことを意識するきっかけになったか	○	○	○	○	
④DVDを見たあとで生活の変化はあったか	○	x	△	○	
⑤今後も伝統を伝えることをしていくか	x	x	○	○	
⑥自分のことを取り上げてもらえてよかったか	○	○	○	—	

12月の報告会で完成した映像を見ていただいた後、約1ヶ月後に話を伺った。質問内容は、表2に示す①から⑥である。

①については、調査対象者である3人ともがやはり自分が出演しているDVDは他人に見てもらいたいようで、お正月を挟んでいたこともあり、親戚や知人にまで及んで見せてあげたそうである。

②については、佐藤さんと井上さんは、映像を振り返り「こうすればよかった」など撮影時の反省やさらなるこだわりへの意欲がみられた。

③については、3人とも今回の取り組みを通じて地域の伝統文化を残さなければいけないと改めて感じられた様子であった。

④については、特に佐藤さんの場合、作成したDVDを見るためにわざわざ長男にDVDプレーヤーを買ってもらい、毎日のようにDVDを見る生活になったという。そのために以前までは使うことのなかった機械を使いこなせるようになり、生活に変化が生じたといえる。

⑤については、佐藤さんと井上さんも伝統を伝えていきたいという気持ちは当然のことであるが、体力的な問題もあって具体的に活動をするということは厳しいようである。

⑥についても、自分のことを評価してもらえ、思い出になったと語っておられた。

また②と⑤から読み取ることができることは、田淵さんの

ように伝統の継承への意欲を持ち、実際に展示会を行うなど自ら活動できる方は、記録化にまだ重きを置いていないのかもしれない。一方、佐藤さんや井上さんのように伝統を伝える機会を持たず、自ら作り出すまでいけない方は、私たちの提供した機会を貴重なものとして捉えていただいているように感じられる。そして、普段当たり前に行っていることを、多くの人々から評価してもらうことによって、自分がやってきたこと(生きた甲斐)への見え方が変わっていき、自信と生きがいにつながるのではないだろうか。

V. まとめ

私たちは、12月12日に大宮地域振興センターで報告会を行った。その報告会で、制作したドキュメンタリー映像を上映し終わると会場は沈黙に包まれていた。感想を聞くと「よかった」「感動した」とのことであった。住民の方は、私たちが制作した映像にとっても驚かれた様子であった。調査対象者にとっては、何気ないもの見慣れたものである伝統や文化、知恵が映像化されたことへの意外性や喜びを感じていただけた。調査対象者だけでなく映像を見てくださった皆さんが、価値のあるものであると評価して下さった。私たちは、私たちが高齢者に関わることで生きがいのサポートができるのではないかという思いで活動してきたが、逆に、私たち自身が生きがいを感じさせてもらう結果になった。

また、これを機に大宮地区だけでなく日南町全体でこのようなドキュメンタリー映像を撮ってほしい、残してほしいと大宮まちづくり協議会の方に言っていた。私たちは地域が活発になれるマニュアル的なものをひとつ提案できたのではないだろうか。このことが地域の人の生きがいにつながり、これがきっかけで日南町に興味を持つ人が増え、注目されていけばよい。

1月現在、このドキュメンタリー映像を収録したDVDは、日南町長：増原聡氏も視聴され、町長・日南町・町立図書館において保管されるとともに、日南町役場のWebサイトを通してインターネット回線への掲載が予定されている。また、この調査・活動について、日南町役場企画課より以下のような評価を得ることができた。

本事業により、大宮の地域づくりまたは住民個人の生きがいづくりが促進された。鳥取大学との協働により、地域住民自らが地域について考え、歴史や文化、自然などを再確認する機会となり、本事業は失われつつある地域の「誇り」と維持の回復、さらには発展に寄与するものであった。

今後も、町全体が目指す創造的な過疎地域からの地方創生が大宮地域から広がることを期待している。



写真4 完成したDVD「発掘!!大宮の宝物」

今回の調査の目的は、私たちが高齢者に生きがいを感じていただけるきっかけをつくることと、地域資源の記録の2つであった。たくさんの人の協力、指導のおかげで意味のあるドキュメンタリー映像が完成し、日南町に今残されているものの重要性、そして超高齢化によって記録をしていかないと失われてしまうかもしれないという危機感を実際に地域に入らなくても視聴者に伝えることができる作品に仕上がったのではないかな。大宮まちづくり協議会会長の古都純孝氏がおっしゃっていたことであるが、毎年、町を活性化するための提案を学生が提供してくれているが、なかなか実行するのは現実的に難しいということだ。今までのことに何か変化をつけようと思えば、高齢者だけでは体力的に厳しいこともある。私たち学生が外側から関わることで高齢者に与えられるものは確かにあるが、提案に終わることなく、共に創ろうとする姿勢や態度が今一番必要とされているのではないだろうか。



写真5 報告会を終えて地域の方々とともに

VI. 謝辞

本調査研究を進めるにあたり、調査に多大なるご協力とご支援を賜りました佐藤文子様、井上恵子様、田淵恭様に心よりお礼を申し上げます。また、準備から報告まで、調査のサポートをして下さいました大宮まちづくり協議会の皆様、株式会社アシスト日南の皆様、地域教育学科3年生の八木三徳さん、白根裕也さんに深く感謝いたします。

注

- 1) むかの一般的な使い方は、調理前にむかと一緒に茹でることによって山菜に含まれるアクを抜いたり、柔らかくするために用いるが佐藤さんは保存する前にむかと一緒に茹でていた。
- 2) 銅鍋で調理することによって銅鍋に含まれる銅イオンが流出してその効果により野菜の色彩がきれいに出る。また、銅は調理用品として最も熱伝導に優れていて、鍋にまんべんなく熱を伝えて銅鍋全体が熱くなるので、料理を均一に調理することも出来る。今回は銅の鍋が壊れていたために、銅線を入れた鍋で湯煮をする。
- 3) 土と水を混ぜて粘土状にしたものを使う。そのための水路も必要となる。

日南町における空き家調査の報告

鳥取大学 4 年生 笠波春菜

1 空き家問題と関心の高まり

- 空き家の問題性…空き巣・火災など防犯・防災面、近隣住民に不快感を与えるなどの環境面での問題を抱えている
- 全国の空き家の状況…全国の空き家数は 820 万戸、空き家率は 13.5%
※空き家率とは、総住宅数に対する空き家数の割合

2 都市の空き家問題と地方の空き家問題

- 都市の空き家の主流は貸家・共同住宅である
 - 地方の空き家の主流は持ち家・一戸建てである
- 都市と地方では空き家問題の性質が異なっている

3 日南町における空き家の状況

- 町の調査によると、日南町の空き家数は 484 戸
- $\text{空き家数} \div \text{町内総世帯数 (H26.3)} = \text{約 } 22\%$ (おおよその日南町の空き家率)
→全国の空き家率より高い割合

4 日南町の空き家対策

<行政の空き家対策>

- 空き家バンクの設置
…空き家を空き家バンクに登録してもらい、移住者などに空き家の情報を提供する制度
- 空き家等の適正管理に関する条例 (H25.4.1 施行)
…危険家屋の持ち主に対して勧告・命令、空き家の処分を行政が代理執行できる制度
- 空き家解体の助成制度 (日南町老朽危険家屋等解体撤去補助金)
…空き家の解体費の 5 分の 1 を助成 (上限 30 万円)

<住民の空き家への取り組み>

- 空き家の把握、マップの作成
…町づくり協議会で作成
…独居老人世帯の把握と併せて行い、災害時の救助活動などに役立てるねらい
- 空き家の持ち主への呼びかけ
…危険家屋の持ち主に対して近隣住民が空き家の管理を呼びかけている
- 空き家周辺の草刈り
…中山間地域等直接支払制度を活用し、空き家周辺の草木の手入れを行っている

5 日南町の調査からわかったこと

- 日南町の空き家は大きく分けると「住民の死亡」、「転出」、「入院・施設入所」、「地区内での新築移転」によって空き家となっている
- しかし、それぞれの空き家はそれぞれ複雑な事情を持っており、一般化できない
- 住民の多くが、将来的に空き家になる可能性がありながら、なかなか対策を行うことができない
- 空き家の住民が地域コミュニティから外れている場合、空き家が放置される傾向
- 空き家の元住人が地域との深い付き合いを続けている場合、空き家は適正に管理される傾向

6 空き家の適正な管理を阻害するもの

- 経済的負担
- 家が絶えている
- 相続に関するトラブル（複雑な家庭内の事情、兄弟の不仲など）
- 家屋の老朽化
- 隣接する道路、家屋がない

→個々の空き家が持つ複雑な事情が、空き家になった後の管理状況に影響を与えている可能性

7 空き家増加の社会的背景

空き家の背後に見える、農村社会の変化

- 農業の機械化・生業の衰退…農業外収入への依存
 - 集落の農業組織としての機能が必ずしも必要ではなくなる
 - 農作業における人手不足の解消し、余剰労働力が集落の外部に流出
- 生活保障、子供の教育、日常生活における相互扶助
 - 外部の資本、サービスの普及で集落の生活組織としての機能の役目がなくなる

☆人々の暮らしや産業構造が変化したことで、かつて集落が担っていた機能は失われた

→農村社会がかつてのように人々をひきつけておくことができなくなった可能性

9 日南町外に住む空き家の所有者について

日南町の不在損地主に対するアンケート調査（H26.2 実施）

- 日南町不在村者、南部町不在村者の6割が空き家を所有
 - 空き家の所有者が日南町内にいるとは限らない
- そのうちの7割が空き家の管理に負担に感じている
 - 彼らが空き家を維持し続けることが困難になる可能性

8 今後の空き家対策

- 普段から地域や家族で空き家になった際の対応について議論する
- 町外の人々に空き家バンクの存在を知ってもらう
- 町外に住む空き家の所有者に働きかける など

平成 26 年度鳥取大学-日南町連携事業報告会 概要

日 時：平成 27 年 2 月 28 日（土）午前 10：00～

会 場：日南町総合文化センター多目的ホール

1. 事例報告

①住民の生きがいをづくりのためのエコミュージアムワークショップの開発

報告者：地域学部教授 福田恵子氏、地域教育学科白根裕也さん（3年）、
八木三穂さん（3年）、久住 和也さん（2年）長住 雅之さん（2年）

内 容：地域学部と大宮地域の連携により制作された、地域住民が後世に伝えたい地域資源
（①山菜料理ができるまで②昔の生活風景を人形に託して③炭焼き産業を支えてきた時代から）をドキュメンタリー調にまとめた DVD を紹介した。

②豊かな環境を守るための不在村地主対策

報告者：農学部助教 片野洋平氏、生物資源環境学科笠波春菜さん（4年）

内 容：平成 26 年中に学生が地域を歩き、主に空き家など財の管理状況について住民の意識
調査を実施。地域をまわることで見えてきたことをまとめ、その内容から対策案を
報告した。

2. まとめ

2月28日（土）午前10時から正午まで、日南町総合文化センターを会場に「平成26年度鳥取大学-日南町連携事業報告会」を開催した。一般町民をはじめ、行政関係者や大学関係者など82名の参加があった。

この度の報告会では、担当教員が冒頭簡単な導入を行い、具体的な報告は地域で実習・調査を行った学生が登壇し行った。上記報告①については、来場者から「地域資源の保存・継承はその他の地域や町全体でも取り組んでいただきたい」などといった意見も聞かれた。

